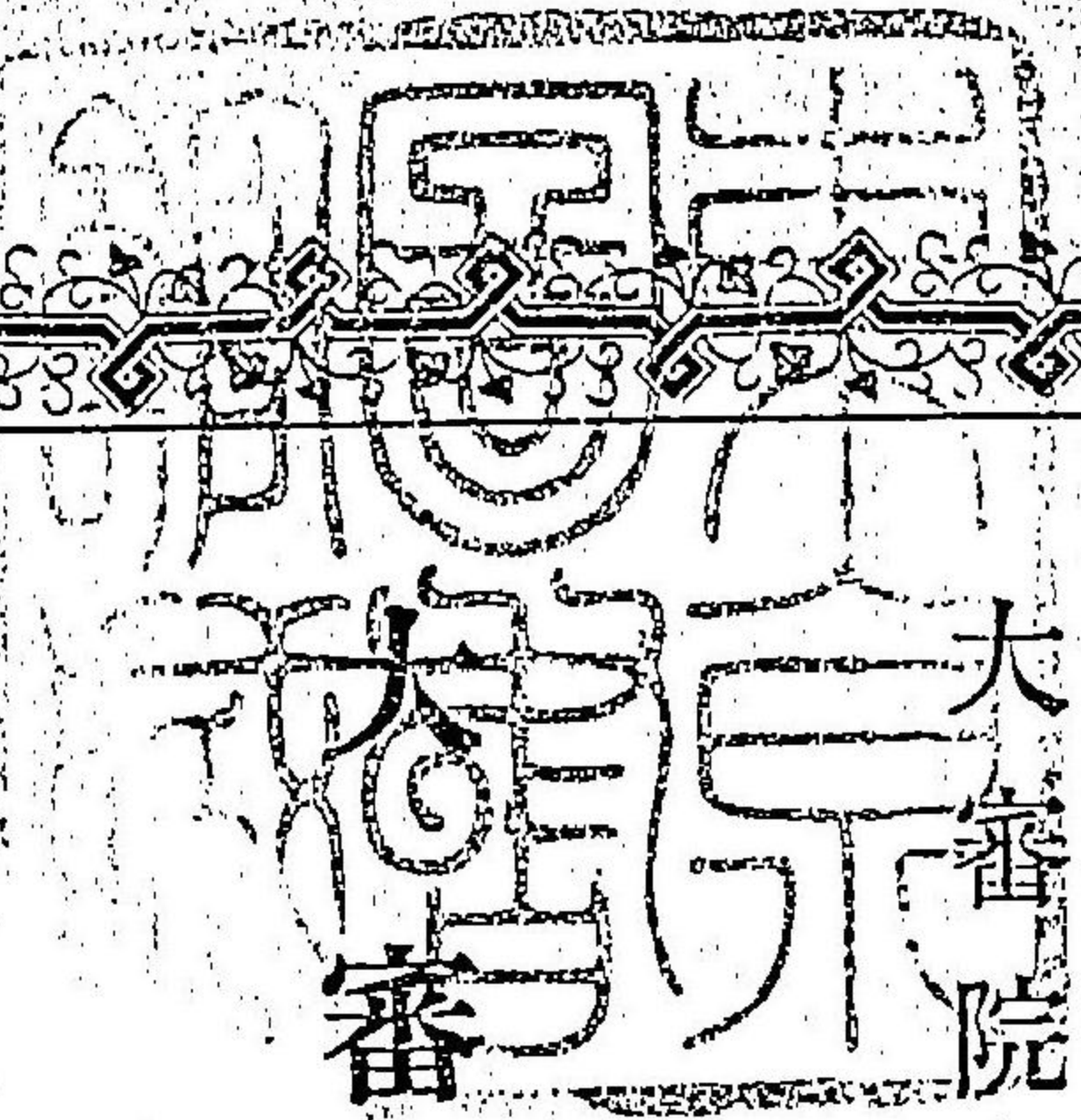


4-11-68

1936



大審院  
藏版  
版權所有

院  
判  
決  
錄

明治二十五年四月印行

自明治二十五年  
一月至二月





C2  
2117  
02

## 大審院判決録

### 凡例

- 一 本書ハ大審院各部判決中他日ノ参考ニ供スヘキモノヲ輯録ス
- 一 本輯編次ノ體ハ一ニ判決日付ノ順序ニ從テ列載シ敢テ民事ト刑事トヲ分タス又事ノ相類似スルモノヲ區分シテ輯録セス
- 一 毎件ノ初メニ判決ノ要旨ヲ摘記シ且關係ノ事項ヲ列記ス
- 一 件名目錄ノ外いろは索引及ヒ法文表ヲ掲ケ以テ搜索ニ便ス



目錄

明治廿五年二月分

判決日附	番號	訴名	關係事項	訴訟關係人	丁數
四月四日	刑六號四	委託物費消事件 附帶私訴ノ件	抗告者原裁判所上告申立 尋常期間期間ノ特別決定	被告尾崎正利 上告人沖銀次郎 被上告人月岡勝三郎	一
八月八日	民四號五	後見人解任 請求ノ件	檢事ノ立會、絶交 親族ノ關係	上告人鈴木嘉一郎 被上告人中島重雄	四
九月九日	民六號一	貸金催促ノ件	荷爲替既済ニ屬スル利子利息 制限法附帶控訴金額ノ權限	被告末次友二 上告人水島庄兵衛 被上告人吉田與三郎	九
十一月十四日	刑一號四	官文書偽造ノ件	郵便局ノ通帳變造、官文 書偽造行使既遂	被告梅原賢藏 上告人太田順三郎 被上告人半田宗三郎	一三
十一月十四日	刑一號五	爆發物取締罰 則違反ノ件	爆發物擬律 破毀審判	被告梅原賢藏 上告人水島庄兵衛 被上告人吉田與三郎	一三
十一月十四日	民五號二	貸金請求ノ件	利息制限法請 求以外ノ判決	被告末次友二 上告人水島庄兵衛 被上告人吉田與三郎	一三
十一月十四日	民四號三	鐵山借區持歩高讓 渡契約排斥ノ件	關席裁判、 故障申立	被告末次友二 上告人水島庄兵衛 被上告人吉田與三郎	一三
十一月十九日	民四號六	衆議院議員當 選無効ノ件	不知ノ答述理由不付、破毀ノ 原由、衆議院議員當選訴訟	被告末次友二 上告人水島庄兵衛 被上告人吉田與三郎	一三
十一月十九日	民二號七	不當辨償金 取戻ノ件	債權差押事實上不當ノ確 定法則上不當ノ適用	被告末次友二 上告人水島庄兵衛 被上告人吉田與三郎	一三
十一月十九日	民一號〇	辨償金請求ノ件	契約證書ノ無効、契約證書ノ 理由ナキ裁判保證人、債權者 保證義務ノ免除、普通ノ法理	被告末次友二 上告人水島庄兵衛 被上告人吉田與三郎	一三



廿一月	刑四七	盜賊牙保ノ件	贓物牙保、賣主買主	被告野田光之助	四九
廿一月	民二部	預ケ金取戻ノ件	會社ノ責任有限責任、地方廳指令舉證ノ責	被告上告人中村良春	五二
廿三日	民九號	頼母子請掛金請求ノ件	公正證書、證據ノ効力	被告上告人日出間五兵衛	五六
廿六日	民一二	貸金請求ノ件	檢眞私署證書、舉證者	被告上告人小田左衛門	五九
廿八日	民二部	貸金請求ノ件	社寺要式請求ノ目的一事再理	被告上告人野口孝二郎	六五
二二日	二〇二部	擄帶ノ件	實家復歸ノ籍上父子ノ關係親屬不論罪	被告上告人淺田順證	七二
四二日	八刑四	姦通ノ件	代人證書本人ノ名義無効	被告上告人伯爵板垣退助	七五
四二日	一民	貸金請求ノ件	姦通罪	被告上告人深見彦左衛門外一名	八〇
四二日	五民	抵當附預ケ時計并ニ過剩金取戻ノ件	戶籍ノ移動、辨償ノ義務、新ナル請求ノ利益ノ變更	被告上告人柿本作之助	八五
四二日	〇刑四	徴兵忌避ノ件	立證排斥ノ理、由法ノ裁判	被告上告人川添眞政	九〇
四二日	九刑	竊盜ノ件	連續犯	被告上告人大野徳太郎後見人小松保	九二
四二日	九刑	竊盜ノ件	被告所在、地管轄	被告深川ツル	九六
四二日	九刑	誹毀ノ件	誹毀有形人、無形人	被告山口重次	九九

九二日	民二六	無抵當貸金、催促ノ件	運帶義務失跡者分身一體、現在債務者普通ノ法理	被告上告人佃與次郎	一〇五
十三日	七民二	約定金請求ノ件	習慣法、當事者證明職、權取調判決ノ說明	被告上告人柳川清助、柳川繁	一〇七
十六日	六民二	貸金辨償請求ノ件	債務ノ時効、保證義務ノ主、家資分散債權者保證人	被告上告人正田一太郎	一一三
廿五日	一五二部	證書偽造行使公訴附帶私訴ノ件	時効ノ經過、相當印紙ノ貼用、不受理法則不當ノ適用、檢眞ノ申立證據方法、違法ノ裁判	被告上告人熊本作右衛門	一一七
廿七日	三民三	辨償金請求ノ件	事實ノ摘示、前審ノ判決、著シキ謬誤更正ノ請求	被告上告人栗原宗八	一二一
廿九日	一民三	地所取戻ノ件	解釋爭執、判決示、公示セザル契約、第三者竊取、公示ノ方法、秘密契約、登記法ノ賣買買戻條件付賣買	被告上告人水本忠次	一二六
廿九日	一民	水入地所引渡地券名義書換並ニ未納米請求ノ件	新證提出、闕席判決	被告上告人上杉桂三郎	一三三
廿九日	一民	水入地所引渡地券名義書換並ニ未納米請求ノ件		被告上告人田卷三郎兵衛	一三三



いろは索引

此索引ハ法語若クハ普通慣用スル文字ノ頭音ヲ取テいろはノ順ニ從テ編製シ以テ法理及ヒ法律ノ適用等ヲ同時ニ摘視スルノ便ニ供ス○頭音ハ必スシモ字音ノ假名遣ニ拘ラス人ノ通常言フ所ノ口頭ニ據ル例之ハいろはヨウニ、はろはろニ、をろおニ入ル、カ如シ

【い】

有限責任

(會社ノ責任)(地方廳指令)ヲ見ヨ

一事再理

(請求ノ目的)ヲ見ヨ

違法ノ裁判

(立證)ヲ見ヨ

有形人

(誹毀)ヲ見ヨ

違法ノ裁判

(檢査ノ申立)ヲ見ヨ

著シキ誤謬

更正ノ請求○著シキ誤謬ハ法律ノ規定ニ則リ原裁判所ニ對シ更正ヲ求メ得ヘキモノナレハ之ヲ以テ上告ノ理由ト爲スヲ得ス

【は】

爆發物

既ニ爆發スヘキ性質ヲ具備セル諸原料ノ自己ノ手ニ取集メ必要アルトキハ自由ニ使用シ爆發セシムルヲ得ヘキモ

五三

六四

八九

九九

二七

三三

二

【じ】

丁

ノトナシタル以上ハ假令ヒ其藥品其他ノ物品ヲ調合シ一物體ト爲サ、ルモ爆發物ヲ所持シタルニ外ナラサルヲ以テ爆發物取締規則第三條ニ據リ重懲役ニ處スヘキモノニシテ火藥取締規則第二十五條ニ據リ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處スヘキモノニ非ス

爆發物取締規則第二十五條

破毀

(擬律)ヲ見ヨ

破毀ノ原由

(不知ノ答述)ヲ見ヨ

賣主買主

(贖物牙保)ヲ見ヨ

排斥ノ理由

(立證)ヲ見ヨ

判旨

(解釋)ヲ見ヨ

荷爲替

三

三九

四九

八九

二六

八

いろは索引



〔ほ〕

通常荷爲替ナルモノハ其證文ノ明文ニ依リ債主タル者ノ隨意處分スルヲ得ヘキモノナレハ其處分上ニ付債主ノ承諾ヲ經サルモ荷爲替代金ニ不足ヲ生スル時ハ負債主ニ於テ之ヲ償却スル義務アルモノトス

法則上不當ノ適用  
(債權差押)ヲ見ヨ

保證人第一

債權者保證義務ノ免除、普通ノ法理〇二人以上ノ保證人アル場合ニ於テ債權者カ其一人ニ對シ保證義務ヲ免除シタルハ他ノ保證人ハ免除セラレタル者ノ部分ニ付テハ其義務ヲ免ル、ヲ普通ノ法理ナリトス

保證人義務ノ免除  
(保證人第一)ヲ見ヨ

本人ノ名義  
(代人)ヲ見ヨ

保證義務  
(債務ノ時効)ヲ見ヨ

一三 二七 八四 一〇七 一三六 五三 八

〔へ〕

保證人第二  
(戸主)ヲ見ヨ  
法則不當ノ適用  
(時効ノ經過)ヲ見ヨ  
辨償ノ義務  
(戸籍ノ移動)ヲ見ヨ

〔と〕

取調  
(習慣法)ヲ見ヨ  
登記法ノ賣買  
買戻條件付賣買〇登記法第一條ノ所謂賣買中ニハ條件付即チ買戻條件付ノ賣買モ包含スルモノトス 登記法第一條

〔ち〕

地方廳指令  
有限責任〇地方廳力與ヘタル「會社條例施行迄相對自營ニ任ス」トノ指令ハ有限責任ナル會社ノ設立ヲ認可シタルモノトハ論シ難シ

〔り〕

利息制限法第一  
既濟ニ屬スル利子〇既濟ニ屬スル利子ハ利息制限法ニ據リ引直スヘキモノトス 明治十年布告 第六十六號

一三 二七 八四 一〇七 一三六 五三 八

〔か〕

利息制限法第二  
利息制限法ハ利息ヲ元金ニ結ヒ證書ヲ改正セシモノヲモ引戻ノ旨意ニアラス 明治十年布告 第六十六號

理由不付  
(不知ノ答述)ヲ見ヨ

理由ナキ裁判  
(契約證書ノ無効)ヲ見ヨ

立證

排斥ノ理由、違法ノ裁判〇凡ソ立證ヲ斥クルニハ必ス排斥ノ理由ヲ付セサル可ラス若シ之ヲ付セサルハ違法ノ裁判ナリ

抗告者

原裁判所、上告申立、尋常期間、期間ノ特別、決定〇抗告者カ原裁判所ヘ爲シタル上告申立ハ尋常期間ヲ經過スルモ特別ノ場合ニ適スルトキハ原裁判所ハ之ヲ決定スル權ヲ有セス上訴ヲ裁判ス可キ裁判所ニ於テ之ヲ決定スヘキモノトス 刑訴一七條二四八條 二項二七一條

一五〇は索引

一三 二七 八四 一〇七 一三六 五三 八

行使既遂  
貯金通帳ノ文字ヲ改竄シ既ニ他人ニ交付シタル以上ハ文書變造行使既遂ノ罪便チ組成ス

姦通罪  
姦通者ノ一方死去スト雖モ殘リノ一人ハ爲メニ其罪體及ヒ公訴權消滅セス乃チ姦通罪ハ二者相須テ一罪ヲ構成スト云フト雖モ其罪ノ成否ハ必スシモ二者ノ同存ヲ要セス

家資分散  
(戸主)ヲ見ヨ

更正ノ請求  
(著シキ誤謬)ヲ見ヨ

解釋

爭點、判旨〇法律ノ解釋ニ關スル單純ノ問題ハ假令一個ノ爭點トナルモ其解釋ニ就キ判文上自ラ判旨ノアル所明カナル上ハ特ニ其爭點ニ對シ判決ヲ爲サハルモ爲メニ本案ノ結果ニ影響ヲ及ボササルモノトス

一三 二七 八四 一〇七 一三六 五三 八



買戻条件付賣買 (登記法ノ賣買)ヲ見ヨ	二六
代人 證書本人ノ名義無効○代人ノ作リタル證書ニシテ本人ノ名義ヲ用ヒサルハ必ス無効ナリトノ規定ナシ	七五
當事者 (習慣法)ヲ見ヨ	一〇七
第三者 (公示セサル契約)(公示ノ方法)ヲ見ヨ	二六
連續犯 繼續犯○連續犯ハ繼續犯ト同シク前後ノ所爲ヲ通シテ一罪ト爲シ處斷スヘキモノナレハ其犯罪未タ終了ヲ告サルニ其幾分ヲ切斷シテ一罪ト爲シ處斷スルヲ得ス	九三
連帶義務 失踪者分身ニ體現在債務者普通ノ法理○連帶義務ノ契約ハ縱令連帶者中ニ失踪者アリテ三十六ヶ月ノ期間ヲ經過セサルモ素ヨリ分身一體ノ責ヲ負フヘ	一〇五
無形人 (誹毀)ヲ見ヨ	八七
無効 (代人)及ヒ(期日)ヲ見ヨ	九四
官文書偽造 (郵便局ノ通帳變造)ヲ見ヨ	一三
管轄 (被告所在地)ヲ見ヨ	九五
會社ノ責任 有限責任○會社ノ責任ヲシテ有限ト爲サンニハ格段ナル條件ヲ要ス否ラサルハ他人ニ對シテ有限責任ヲ主張スルコトヲ得ス	五三
原裁判所 (抗告者)ヲ見ヨ	一

決定 (抗告者)ヲ見ヨ	一
檢事ノ立會 民事訴訟法第四十二條ノ場合ニ於テ檢事ノ立會ナキモ單ニ是レノミヲ以テ上告適法ノ理由ト爲スヲ得ス 民事四二條	三
闕席裁判 故障申立○闕席裁判ニ付故障申立アリタルハ裁判所ハ職權ヲ以テ故障ヲ許ス可キヤ否ヤ又法律上ノ方式ニ從ヒ若クハ其期間ニ於テ故障ヲ申立テタルハ否ヤヲ調査シ此三要件ヲ缺カサルハ之ヲ受理シ闕席前ノ程度ニ復スヘキモノトス 民事二五九條	三五
契約證書ノ無効 契約證書ノ羈束、理由ナキ裁判○一ノ契約證書ヲ無効ナラシメテ他ノ契約證書ニ羈束セラルヘキモノト爲サンニハ必ス其理由ヲ示サ、ル可ラス之ヲ示サ、ルハ理由ナキ不法ノ裁判ナリ	四五
契約證書ノ羈束	五
檢眞 (契約證書ノ無効)ヲ見ヨ	五八
私署證書○相手方ニ於テ私署證書ヲ認メサル場合ニハ必ス民事訴訟法ノ詔ハユル檢眞ノ申立ヲ爲サ、ル可ラス只對照スヘキ書類ヲ提出シテ本證書ノ眞正ナルヲ陳辯スルヲ以テ檢眞ノ申立ヲ爲シタルモノトハ云フ可ラス 民事三三條	九二
繼續犯 (連續犯)ヲ見ヨ	九二
現在債務者 (連帶義務)ヲ見ヨ	一〇五
檢眞ノ申立 證據方法、違法ノ裁判○檢眞ノ申立ヲ爲サ、リシ一事ヲ以テ證據方法ヲ拋棄シタルモノトシ他ノ理由及ヒ證據ノ有無如何ヲ問ハスシテ直ニ排斥スルハ違法ノ裁判ナリ	一一七
闕席判決 (新證提出)ヲ見ヨ	一三三
附帶控訴	八

いろは索引



<p>控訴ヲ不適法トシテ判決ヲ以テ棄却シタルハ附帶控訴ノ効力ヲ失フ○六條          不知ノ答述          理由不付、破毀ノ原由○不知ノ答述ヲ採用シ且ツ判決ノ要點ニ理由ヲ付セサル裁判ハ破毀ノ原由アルモノトス          一四三          一四四          一四五          普通ノ法理          (保證人第一)(連帶義務)ヲ見ヨ          不論罪          (實家復讐)ヲ見ヨ          不利益ノ變更          (新ナル請求)ヲ見ヨ          分身一體          (連帶義務)ヲ見ヨ          不受理          (時効ノ經過)ヲ見ヨ          故障申立          (關席裁判)ヲ見ヨ          公正證書          證據ノ効力○公正證書ハ擅ニ調製シ得</p>	<p>三九          四〇          四一          四二          四三          四四          四五          四六          四七          四八          四九          五〇          五一          五二          五三          五四          五五          五六          五七          五八          五九          六〇          六一          六二          六三          六四          六五          六六          六七          六八          六九          七〇          七一          七二          七三          七四          七五          七六          七七          七八          七九          八〇          八一          八二          八三          八四          八五          八六          八七          八八          八九          九〇          九一          九二          九三          九四          九五          九六          九七          九八          九九          一〇〇</p>
<p>ヘキモノニ非ルヲ以テ一方カ認メサレハトテ證據ノ効力ヲ失ハス明治十九年法律第二號          公證人          戶籍上父子ノ關係          (實家復讐)ヲ見ヨ          戶籍ノ移動          辦償ノ義務○債務ヲ負ヒシ後退隱シテ戶籍ヲ移動スルモ依然其他ニ在テ從前ノ業務ニ從事スルハ爲メニ辦償ノ義務ヲ免ル、コトヲ得ス          戶主          家資分散債權者、保證人○戶主カ前戶主ノ債務ノ爲メニ家資分散ノ處分ヲ受ケ其債務ヲ盡シシ能ハサル場合ニ於テ債權者ハ其保證人ヲ措キ前戶主ニ係リ復更ニ之レカ償還ヲ求ムヘキモノニアラス          公示セサル契約          第三者 羈束○公示セサル契約ハ第三者ヲ羈束スル効力ナシ          公示ノ方法</p>	<p>七一          七二          七三          七四          七五          七六          七七          七八          七九          八〇          八一          八二          八三          八四          八五          八六          八七          八八          八九          九〇          九一          九二          九三          九四          九五          九六          九七          九八          九九          一〇〇</p>

<p>江          要式          (社寺)ヲ見ヨ          新ナル請求          不利益ノ變更○新ナル請求アルハ民事訴訟法第四百十六條同法第九十六條第二號ニ據テ採用セサル可ラス而シテ其申立印紙貼用等ノ法式ヲ缺キタルモノヲ採用シ前審ノ判決ヲ對手人ノ不利益ニ變更シタルハ不法ノ裁判ナリ          債權差押          事實上不當ノ確定、法則上不當ノ適用          ○甲カ乙ニ對スル權利ノ爲メ丙ノ乙ニ負フ所ノ義務即チ乙ノ債權ヲ差押フル場合ニ於テ金圓ヲ受取ル能ハサル事實即チ再ヒ金圓ヲ返辨シタルトアルニモ拘ラス甲カ當然トヨリ得ヘキ權利ヲ有</p>	<p>六四          六五          六六          六七          六八          六九          七〇          七一          七二          七三          七四          七五          七六          七七          七八          七九          八〇          八一          八二          八三          八四          八五          八六          八七          八八          八九          九〇          九一          九二          九三          九四          九五          九六          九七          九八          九九          一〇〇</p>
<p>シ、如ク乙ノ權利ヲ行ヒタルモノトシテ判決シタルハ事實ヲ不當ニ確定シ法則ヲ不當ニ適用シタルモノナリ          贓物牙保          賣主買主○贓物牙保ノ罪ハ其賣主買主雙方ノ間ニ介立シテ賣買ヲ遂ケシムルニ因テ成立スルモノナレハ牙保罪ノ成立ニ付テハ果シテ其賣買ヲ遂ケタルヲ明示セサル可カラス刑三九          債務ノ時効          保證義務○債務ノ時効ハ人ニ對スルモノニ非スシテ債務其者ニ對スルモノナルヲ以テ時効ノ中斷セラル、場合ニ在テモ保證義務ハ其債務ニ隨伴スルモノトス          債權者          (戶主)及ヒ(保證人第一)ヲ見ヨ          相當印紙ノ貼用          (時効ノ經過)ヲ見ヨ          爭點          (解釋)ヲ見ヨ</p>	<p>一〇一          一〇二          一〇三          一〇四          一〇五          一〇六          一〇七          一〇八          一〇九          一一〇          一一一          一一二          一一三          一一四          一一五          一一六          一一七          一一八          一一九          一二〇          一二一          一二二          一二三          一二四          一二五          一二六          一二七          一二八          一二九          一三〇          一三一          一三二          一三三          一三四          一三五          一三六          一三七          一三八          一三九          一四〇          一四一          一四二          一四三          一四四          一四五          一四六          一四七          一四八          一四九          一五〇</p>

いるは索引



〔キ〕

期間ノ特別

(抗告者)ヲ見ヨ  
既済ニ屬スル利子

(利息制限法第一)ヲ見ヨ

金額ノ權限

控訴院ハ金額ノ權限如何ニ拘ハラズ訴  
訟ヲ受理シテ判決スルモ不法ニ非ス

擧律

破毀、審判○原判決ニ其事實ノ認定ナ  
キトキハ大審院モ其擧律ノ如何ヲ判定  
スルニ由シナキヲ以テ之ヲ破毀シ更ニ

審判セシム 刑訴二  
八六條

擧證ノ責

明示ヲ受ケサルモノハ擧證ノ責ナシ

擧證者

相手方ニ於テ證書ヲ認メサルニ擧證者  
ニ於テ檢眞ノ申立ヲ爲サ、ル以上ハ法  
律上其證書ハ證據ノ効力ナキモノトス  
民訴三  
五二條 ○擧證者ニ於テ檢眞ノ申立ヲ爲  
サ、レハ對照ノ書類ヲ提出セントテ裁  
判所ハ進ンテ檢眞スヘキモノニ非ス 民  
訴

三五  
二條 ○仍ホ(檢眞)ヲ見ヨ

期日

無効○民事訴訟法第二百三十三條ノ但  
書三「其期日ハ七日ヲ過ルコトヲ得ス」  
トアルハ畢竟裁判所ヲシテ之ヲ守ラシ  
ムル規定タルニ過キサレハ七日以後ニ  
裁判ヲ言渡シタレハトテ其裁判ヲ無効  
ナラシムヘキ法條ニアラサルカ故ニ上  
告ノ理由トナラス 民訴二  
三三條

羈束

(公示セサル契約)ヲ見ヨ

郵便局ノ通帳變造

官文書偽造○郵便局ヨリ交付シタル通  
帳ヲ變造スルモ官文書偽造ヲ以テ論ス  
ルヲ得ス何ントナレハ郵便局ノ通帳ハ  
人民ヨリ寄託シタル金圓ヲ預リタル  
ヲ證スルカ爲メ人民ニ交付シタルニ過  
キサレハナリ故ニ本罪ハ刑法第二百  
條第一項ヲ以テ論スヘキモノトス 刑  
一  
條

上告申立

(抗告者)ヲ見ヨ

尋常期間

(抗告者)ヲ見ヨ

親族ノ關係

絶交○私交上絶交スルトアルモ親族ノ  
關係ニ至テハ法理上之ヲ斷絶スルト  
得ス既ニ之ヲ斷絶スルト得サルハ  
親族ノ關係ヨリ生スル權利ヲ行用スル  
ト得ヘシ

審判

(擬律)ヲ見ヨ

衆議院議員當選訴訟

衆議院議員當選訴訟ハ原判破毀ノ理由  
アルモ審判中衆議院解散ノ命アルハ  
之ヲ他ニ移送セス破毀ノ上直ニ棄却ス  
衆議院選舉法  
第八十二條

事實上不當ノ確定

(債權差押)ヲ見ヨ

證據ノ効力

(公正證書)ヲ見ヨ

社寺

いろは索引

一 四 二 三 四 五 六

要式○社寺ノ爲メニ金穀ノ借入等ヲ爲  
スルハ必ス氏子檀家ト協議シ總代二名  
以上ノ連署ヲ要ス此等ノ要式ヲ缺キタ  
ルモノハ無効ナリ 明治十年布告  
第四十三號

實家復歸

戸籍上父子ノ關係、親屬不論罪○實父  
實家ニ復歸シ戸籍上父子ノ關係消滅ス  
ルモ父子ハ天然上消滅シ得ヘキ道理ナ  
キヲ以テ其父ニ對シ詐欺取財ノ所爲ア  
ルモ親屬ニ係ルトシテ其罪ヲ論セス 刑  
一四條三九〇  
條三九八條

親屬

(實家復歸)ヲ見ヨ

證書

(代人)ヲ見ヨ

失踪者

(連帶義務)ヲ見ヨ

習慣法

當事者證明、職權取調○習慣法ニ違背  
スト云フハ當事者ニ於テ之ヲ證明ス  
ルカ若クハ職權ヲ以テ之レカ取調ヲ爲



シタル場合ニ非レハ之ヲ以テ上告ノ理由ト爲スヲ得ス民訴二一九條

**證明**

(習慣法)ヲ見ヨ  
職權

**時効ノ經過**

相當印紙ノ貼用、不受理法則不當ノ適用○證券印稅違犯者時効ノ年月ヲ經過シ公訴權消滅ニ屬シ處罰ノ責任ヲ免ル、場合ニ於テ其證書ニ相當印紙ヲ貼用シ之ヲ提出シタルハ其時効ノ如何ヲ論究セスシテ直チニ不受理ノ判決ヲ爲シタルハ注則ヲ不當ニ適用シタルモノナリ民訴四三三條

**證據方法**

(檢査ノ申立)ヲ見ヨ

**事實ノ摘示**

前審ノ判決○判決ノ事實ノ摘示ハ前審ノ判決ヲ引用スルヲ得民訴二三六條  
第二號及ヒ第三號

一〇七

一〇七

二七

**ひ**

**新證提出**

闕席判決○民事訴訟法第四百二十九條末段ハ控訴人ニ於テ一應相當ノ證據力アリトスヘキ新證ヲ提出シ以テ第一審裁判所ニテ確定セル事實ヲ攻撃スルニ際シ被控訴人ニ於テ出頭シテ辯論セサルハ控訴人ノ立證ハ其證據ニ相當セル結果ヲ得タルモノトシテ闕席判決ヲ爲スヘントノ律意ナリ民訴四二九條

**被告所在地**

管轄○刑事訴訟法第二十六條ノ被告人所在地トハ被告人ノ現在スル所ノ地ヲ云フモノニシテ其本籍地ト雖モ被告人現在セサルトキハ之ヲ所在地ト云フヲ得ス刑訴二六條

**誹毀**

有形人、無形人○刑法第三百五十八條ノ「人」ヲ誹毀シタル者ハ云々トアル人トハ只有形人ヲ指スノミナラス無形人ヲモ包含スルモノトス故ニ各人ノ集合ヨリ團結スル所ノ會社等ヲ誹毀スルニ

一三三

九五

九九

**せ**

於テハ同條ノ制裁ヲ受ケサル可ラス刑五八條

**秘密契約**

(公示ノ方法)ヲ見ヨ

**絶交**

(親族ノ關係)ヲ見ヨ

**請求以外ノ判決**

請求以外ニ涉リタル判決ハ不法ナリ

**請求ノ目的**

一事再理○同一事件ニテハ請求ノ目的ヲ異ニスレハ一事再理ニアラス

**前審ノ判決**

(事實ノ摘示)ヲ見ヨ

一三六

三

三

六四

二三

スルは索引

十一



法 文 表

刑 法	丁 數		
一一四條	七二	一一一條	三九
二一〇條一項	一三	一三六條二號	一一一
三五八條	一〇〇	二一九條	一〇七
三九〇條	七二	二三三條	八四
三九八條	七二	二五九條	三五
三九九條	四九	二六〇條	三五
刑事訴訟法		三五二條	五八
一七條	一	四〇六條	九
二六條	九六	四二九條	一三三
二四、八條二項	一	四三〇條	一三一
二七一條	一	四三五條	一八
民事訴訟法		四三六條二號	三九
四二條	四	明治十年布告第六十六號	三八
		爆發物取締規則第三條	三二

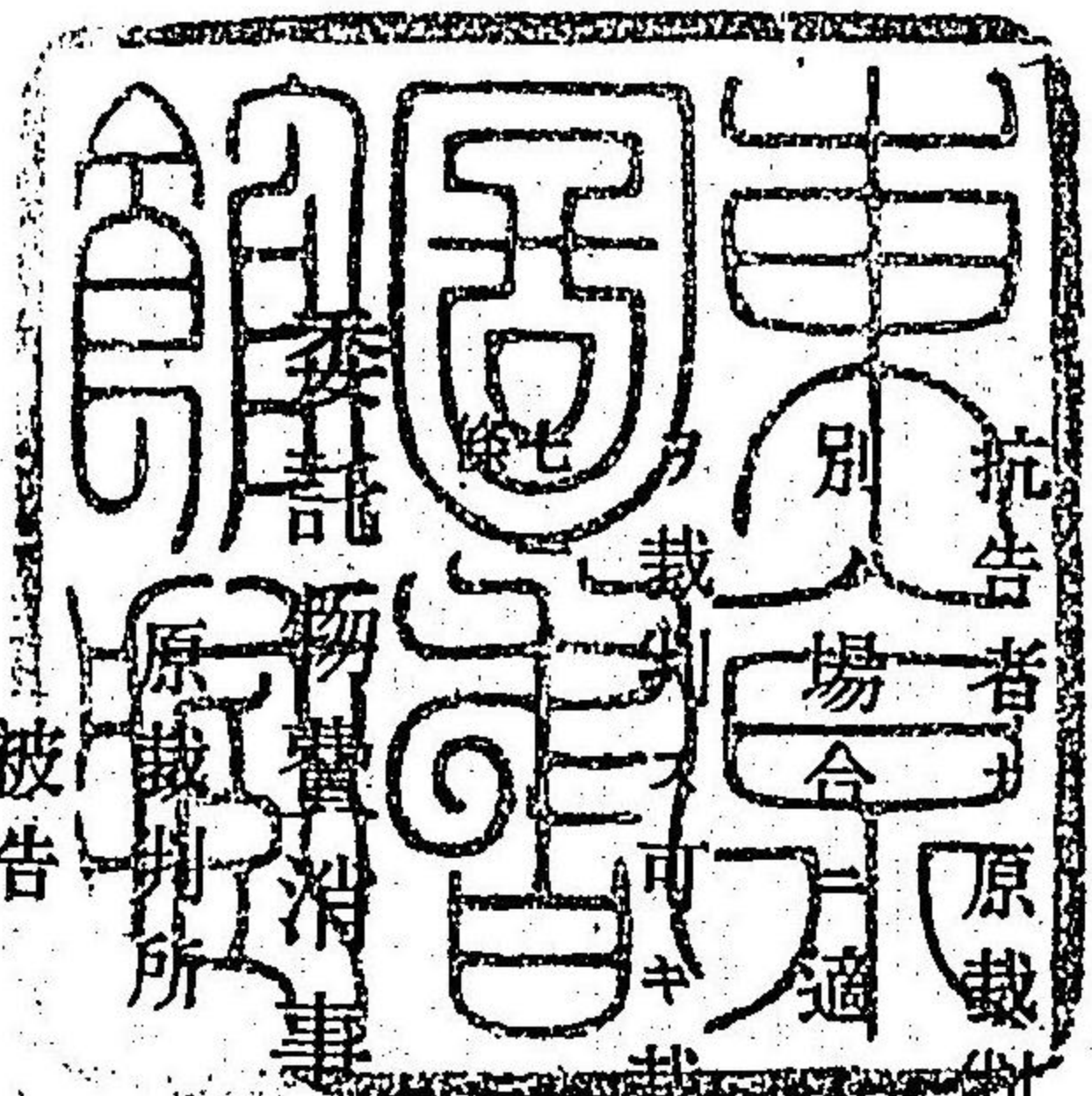
法文表



火藥取締規則第二十五條……………三二  
 衆議院選舉法第八十二條……………三九  
 公證人規則……………五六  
 明治十年布告第四十三號……………六四  
 明治八年布告第六號……………一〇五  
 登記法第一條……………一二六

大審院判決錄 明治廿五年  
 一月二分

● 抗告者 原裁判所 上告申立 尋常期間 期間  
 ノ特別 決定



抗告者原裁判所へ爲シタル上告申立ハ尋常期間ヲ經過スルモ特別  
 場合ニ適スルトキハ原裁判所ハ之ヲ決定スル權ヲ有セス上訴  
 裁判所ニ於テ之ヲ決定スヘキモノトス 刑訴一七條二  
 四八條二項ニ

件附帶私訴ノ件 明治廿五年刑第四十六號  
 東京控訴院 明治廿五年一月四日決定  
 被告 尾崎正利 辯護人 中村剛

右委託物費消被告事件附帶私訴ノ控訴判決ニ對スル上告申立ニ對シ  
 明治廿五年一月廿一日東京控訴院ニ於テ右ノ上告申立ハ刑事訴訟法  
 第二百七十一條ニ規定スル期間ヲ經過シタルヲ以テ之ヲ棄却ストノ



決定ニ對シ正利ハ抗告ヲ爲シタリ其要旨ハ刑事訴訟法第二百四十八條ニ前條申立アリタルキハ云々トアリテ上告人カ刑事訴訟法第二百四十七條ニ依リ期間ノ經過ヲ疏明シテ上告申立ヲ爲シタル場合ニ於テハ其上告ヲ許スヘキト否トハ上訴ヲ裁判スヘキ裁判所ノ權限ニ屬スヘキモノニシテ原裁判所ハ之ヲ決定スヘキ權ナキ事明カナリ本件ノ如キハ明白ニ上告期間ノ經過シタル事實ヲ疏明シアル事ハ上告申立書ニ明瞭ナルニモ拘ラス東京控訴院ニ於テ刑事訴訟法第二百七十一條ニ規定スル期限ヲ經過シタリト云ヘル理由ノミヲ以テ棄却ノ決定ヲ下サレタルハ違犯ナリト云フニ在リ

大審院ニ於テ刑事訴訟法第二百九十七條ノ定式ヲ履行シ裁判スルノ左ノ如シ

抗告者カ原裁判所へ提出シタル上告申立書ヲ閱スルニ(尤モ本件上告申立ノ期日ヲ遲延シタルハ左ノ不得已事實アリタルカ爲メナレハ略中

正誤

百	丁	十一行	際ハ對ノ誤
百	一丁	四行	ホハホノ誤
百	二丁	六行	トハドノ誤
百	十六丁	九行	ルハ書ノ誤
同	丁	十行	書ハルノ誤
百	十七丁	二行	法方ハ方ノ誤
百	二十四丁	六行	送移ハ移送ノ誤



刑事訴訟法第十七條ニ所謂特別ノ場合トハ本件ノ場合ノ如キモ算入セラレテ相當ナラント思量仕候依テ本日ヲ以テ上告申立書ヲ提出スル儀ニ有之候トアリ是ニ由テ之ヲ觀レハ抗告者カ原裁判所ヘ爲シタル上告申立ハ尋常期間ヲ經過シタル特別ノ場合ニ適スルモノト思量シ之ヲ爲シタルモノナリ然ラハ則チ右申立ノ當否ハ刑事訴訟法第二百四十八條第二項ニ依リ本院ニ於テ之ヲ決定スヘキモノニシテ原裁判所ノ裁判スヘキニ非ス然ルニ原裁判所ハ右申立ハ同法第二百四十七條ノ場合ニ恰當セサルモノナリトノ意見ヲ以テ右上告申立ヲ棄却シタルハ違法ノ裁判ニシテ抗告ハ其理由アルモノトス依テ同法第三百條ニ從ヒ原裁判ヲ取消ス者也

● 檢事ノ立會 絶交 親族ノ關係

民事訴訟法第四十二條ノ場合ニ於テ檢事ノ立會ナキモ單ニ是レノ



ミヲ以テ上告適法ノ理由ト爲スヲ得ス民訴四條  
私交上絶交スルコアルモ親族ノ關係ニ至テハ法理上之ヲ斷絶スル  
コトヲ得ス既ニ之ヲ斷絶スルコトヲ得サルモハ親族ノ關係ヨリ生スル  
權利ヲ行用スルコトヲ得ヘシ

後見人解任請求ノ件明治廿四年民第二百五十四號  
明治廿五年一月八日判決

第一審 東京地方裁判所 第二審 東京控訴院

上告人 沖 銀次郎 訴訟代理人 三坂 亥吉

被上告人 月岡勝三郎外二人

右當事者間ノ後見人解任請求事件ニ付東京控訴院カ明治廿四年十月  
七日言渡タル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタ  
リ

立會檢事近藤鎮三ハ意見ヲ陳述シタリ

判決主文

本件ノ上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告第一論旨ハ本件ハ後見人解任請求ト題スル詞訴ニシテ被上告人  
ニ於テ上告人カ幼者月岡勝三郎ノ後見人タル資格ヲ解除セント訟求  
スルモノナレハ即チ後見人ナル分限ニ關スル而已ナラス無能力者幼  
者ニ關スル訴訟ナルコトハ多辯ヲ要セサル所ナリ左レハ民事訴訟法  
第四十二條ノ規定ニ依リ本件ノ口頭辯論ニハ必ラス檢事ノ立會ヲ要  
スルハ勿論ナリトス然ルニ原院カ檢事ノ立會ナクシテ本件ノ口頭辯  
論ヲ開キ且ツ其裁判ヲ言渡シタルハ民事訴訟法第四十二條ニ違背セ  
ル不法ノ裁判ナリト云フニ在ルモ抑モ民事訴訟法第四十二條ニ檢事  
ハ左ノ訴訟ニ付意見ヲ述フル爲メ其口頭辯論ニ立會フ可シトアリ而  
シテ第一乃至第九ノ訴訟ノ目ヲ列記スルノミニシテ其檢事ノ立會ハ固  
ヨリ裁判構成ニ關セサルノミナラス亦同法中別ニ其制裁ニ規定ナケ



レハ則チ本件口頭辯論及ヒ裁判言渡ニ檢事ノ立會ナキモ單ニ之レノ  
 ミヲ以テ上告適法ノ理由ト爲スコトヲ得サルモノトス  
 同第二論旨ハ原院ニ於テ被上告人才助カ絶交ノ事實ヲ認メナカラ尙  
 ホ本訴ヲ提起スルノ權アルモノト判決セラレタルハ法理ヲ誤リタル  
 不當ノ裁判ト云ハサルヲ得ス何トナレハ被上告人ニ於テ苟モ後見人  
 タル上告人沖銀次郎及ヒ最近親族タル月岡新兵衛ト絶交セシ以上ハ  
 被上告人ハ親戚タルノ縁故ヲ絶ツニ由ナカルヘキモ親族權ノ行用ヲ  
 拋棄シタルモノナレハ月岡家ノ家事ニ容喙シ得ヘキモノニアラサル  
 ヲ以テナリト云フニ在ルモ原判文ヲ閱スルニ假令後見人沖銀次郎月  
 岡新兵衛等ト絶交シタル事實アリトスルモ之レカ爲メニ月岡家ト親  
 戚タルノ縁故ヲ絶チシニアラス故ニ同家ノ安危ニ關スル場合ニ臨ミ  
 幼者ヲ從ヘ救濟ヲ求ムルハ固ヨリ正當ノ所爲ニシテ必シモ他ノ親屬  
 ノ協賛ヲ得ルコトヲ要セストアレハ原院カ認メタル事實ハ被上告人

月岡才助ト沖銀次郎及ヒ月岡新兵衛等トノ間ニ止マリ而シテ其才助ト  
 月岡勝三郎トノ間ニ於ケル交際ニ及ハサルモノ、如シ果シテ然ラハ  
 才助カ幼者勝三郎ノ爲メニ本訴ヲ提起シ得ヘキ權利アルコトハ言フ  
 俟タサルヘシ假令ヒ上告人言フ如ク原裁判ノ趣旨タル獨リ才助ト銀  
 次郎及ヒ新兵衛等トノ間ニ止マラスシテ才助ト勝三郎トノ間ニ於ケ  
 ル交際ヲモ亦斷絶シタリト事實ヲ認メタルモノトスルモ是レ唯平素  
 私交上ノ關係ニ過キスシテ合意ヲ以テ親族ノ關係ヲ斷絶シ得ヘカラ  
 サルコトハ固ヨリ法理ノ然ラシムル所ナリ既ニ合意ヲ以テ親族ノ關  
 係ヲ斷絶シ得ヘカラサルモノトスル以上ハ即チ其親族ノ關係ヨリ生  
 スル權利ヲ行用シ得ヘキコトハ亦辯ヲ俟タサルナリ故ニ原院ニ於テ  
 月岡家ノ安危ニ關スル場合ニ臨ミ才助カ幼者ヲ從ヘ救濟ヲ求ムルハ  
 固ヨリ正當ノ所爲ニシテ必シモ其他ノ親屬ノ協賛ヲ得ルコトヲ要セ  
 スト判定シタルハ適法ノ判決ニシテ決シテ法理ヲ誤リタル不當ノ裁



判ト云フヲ得ス

上來説明スル如クナルヲ以テ本件上告ハ民事訴訟法第四百三十九條ニ依リ棄却ス可キモノトス

●荷爲替 既濟ニ屬スル利子 利息制限法 附帶

控訴 金額ノ權限

通常荷爲替ナルモノハ其證文ノ明文ニ依リ債主タル者ノ隨意處分  
スルヲ得ヘキモノナレハ其處分上ニ付負債主ノ承諾ヲ經サルモ荷  
爲替代金ニ不足ヲ生スル時ハ負債主ニ於テ之ヲ償却スル義務アル  
モノトス

既濟ニ屬スル利子ハ利息制限法ニ據リ引直スヘキモノニ非ス  
明治十年  
布告第六  
十六號

控訴ヲ不適法トシテ判決ヲ以テ棄却シタルキハ附帶控訴ノ効力ヲ

失フ○民訴四條

控訴院ハ金額ノ權限如何ニ拘ハラヌ訴訟ヲ受理シテ判決スルモ不  
法ニ非ス

貸金催促ノ件

明治二十四年民第十六號  
明治廿五年一月九日判決

第一審 水戸地方裁判所 第二審 東京控訴院

上告人 鈴木嘉一郎 訴訟代理人 木村格之助

被上告人 中島重雄 訴訟代理人 小川與吉

鈴木嘉一郎ヨリ中島重雄ニ係ル貸金催促事件ニ付明治廿四年五月廿  
日東京控訴院カ言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル  
申立ヲ爲シ被上告人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

判決主文

原裁判所ノ一部ヲ破毀シ本院ニ於テ直ニ判決スル左ノ如シ  
附帶控訴ハ之ヲ棄却ス



但上告ノ訴費ハ被上告人ノ負擔タルヘシ

理由

上告ノ第一ハ甲第一號證ハ上告人被上告人並ニ川崎德之助ト三名ノ合意ニ依リ成立チタルモノニ付乙第三號證ノ如ク元利金ノ内ヘ金三百圓受取トアルニ依リ既ニ三井銀行爲換金三百圓ノ受授ハ以上三名ノ合意ニ出テ實行セラレタリ然レハ爾後被上告人カ該三百圓ノ内五拾圓ヲ德之助ヘ返還センニハ宜シク當事者三名ノ合意ヲ要スヘキニ否ラス即チ上告人ノ承諾ナキモノナレハ無効ノ取引ナル事明白ナルヲ以テ原裁判ハ契約上合意ノ何物タルヲ遺忘シタル不法ノ裁判ナリト云フニ在レトモ甲第一號證ノ如キ特約ニ非サル通常荷爲換ナルモノハ其證文ノ明文ニ依リ債主タル被上告人ノ隨意處分スルヲ得ヘキニ付該荷賣代金ニ不足ヲ生スル時ハ負債主タル上告人ハ之ヲ償却スヘキ義務アルヲ論ヲ俟タサルヲ以テ該上告論旨ハ事實及ヒ採證上ノ非

難ニ歸スルニ依リ其理由ナキモノトス

上告ノ第二ハ被上告人訴狀第二項ノ金七圓七拾貳錢八厘ハ元金三百三拾六圓ニ對スル四拾六日分ノ利息ナレハ年壹割八分ニ該當スルニ付明治十年第六十六號布告ニ背戾シタルヲ以テ原院ハ之ヲ年壹割五分ニ引直サシムヘキモノナルニ該法則ヲ適用セラレサリシハ民事訴訟法第四百三十五條ニ相當スル不法ノ判決ナリト云フニ在レトモ右七圓七拾貳錢八厘ハ元金三百三拾六圓ノ利息トシテ被上告人カ受取リタリシ計算ナルヲハ訴狀ニ記載セルカ如クナルニ依リ既濟ニ屬セル利子ナルヲ以テ裁判上引直スヘキモノニ非ス

上告ノ第三ハ本件第一審ノ判決正本ヲ被上告人ヘ送達セラレタルハ明治廿四年三月十二日ニシテ被上告人カ附帶ノ控訴ヲ爲シタルハ其年五月十一日ナレハ上訴期限ヲ失シタルモノナルニ原院ハ控訴ヲ棄却シナカラ附帶ノ控訴ヲ有効ト判決セラレタルハ民事訴訟法第四百



六條ニ違背シタル不法ノ裁判ナリト云フニ在リテ上告其理アルモノトス何者トナレハ本件ハ民事訴訟法第四百六條ニ所謂左ノ場合ニ於テハ附帶控訴ハ其効力ヲ失フトアリ同條第一項ニ控訴ヲ不適法トシテ判決ヲ以テ棄却シタルトキトアルニ違背シタル不法ノ裁判ナルモノニシテ而シテ其事件カ裁判ヲ爲スニ熟シタルヲ以テ同法第四百五十一條ニ依リ本院ニ於テ直ニ判決スヘキモノトス

上告ノ第四ハ原控訴院ハ元金百圓以下ノ訴訟ニ付第二審トシテ覆審スヘキ權限ニアラサルヲハ裁判所構成法ノ定ムル所ナリ然ルニ原院ハ本按元金九拾參圓七拾貳錢八厘ノ控訴ヲ受理審判セラレタルハ不法ノ裁判ナリト云フニ在レト既ニ第一審ノ裁判ヲ受ケ不服ナル時ハ更ニ上訴シテ第二審ノ裁判ヲ受ケ得ヘキハ民事訴訟法ノ規定ナルヲ以テ金額ノ權限加何ニ拘ハラヌ原控訴院カ之ヲ受理シテ判決セシハ敢テ不法ト爲スヲ得ス

●郵便局ノ通帳變造 官文書偽造 行使既遂

郵便局ヨリ交付シタル通帳ヲ變造スルモ官文書偽造ヲ以テ論スルヲ得ヌ何ントナレハ郵便局ノ通帳ハ人民ヨリ寄託シタル金圓ヲ預リタルヲ證スルカ爲メ人民ニ交付シタルニ過キサレハナリ故ニ本罪ハ刑法第二百十條第一項ヲ以テ論スヘキモノトス刑二一〇條一項

貯金通帳ノ文字ヲ改竄シ既ニ他人ニ交付シタル以上ハ文書變造行使既遂ノ罪便チ組成ス

官文書變造ノ件 明治廿四年刑第三百四十一號 明治廿五年一月十四日宣告

第一審 長崎地方裁判所 第二審 長崎控訴院

被告 末次友三 辯護人 西川莊六

明治廿四年十一月四日長崎控訴院ニ於テ右末次友三カ官文書變造被告事件ニ付長崎地方裁判所ノ判決ニ對スル同裁判所檢事ノ控訴ヲ審



理シ被告人ハ長崎市十善寺郷林田眞治方ニ止宿中屢宿料ノ督促ヲ受ケタルヨリ一時延期ヲ得ルノ手段ニ供スル爲メ豫テ所持スル郵便貯金通帳ニ五拾錢ト記載アリシ錢ノ一字ヲ削リ圓ニ改メ五拾圓ト變造シタル通帳ニ内金六圓貳拾五錢ノ拂戻請求委任狀ヲ添付シ之ヲ右眞治ニ交付シタル所爲アリト判定シ刑法第二百十條一項第二百十二條ニ該當スルヲ以テ第一審裁判所カ右法條ヲ適用シ被告人友三ヲ重禁錮一年罰金拾圓監視七月ニ處シ云々ト言渡シタルハ相當ニシテ取消スヘキ筋ナキニ因リ刑事訴訟法第二百六十一條ニ則リ本控訴ヲ棄却スト言渡シタル第二審判決ヲ不法ナリトシ長崎控訴院檢察長林誠一及被告人友三ニ於テ各上告ヲ爲シタリ檢察長上告ノ要旨ハ文書偽造罪ハ公益ニ對スルモノニテ財産ニ對スルモノニ非レハ苟クモ官署ノ名稱ヲ冒シ官署ヲ利用シ信用ヲ害スルモノ皆官文書偽造罪ヲ構成スルヤ論ヲ俟タス本案通帳ノ如キハ被告ノ所有ニ歸セスシテ拂戻ノ上

ハ官廳ニ返付セサルヲ得サルノ規定アルモノナレハ官文書タル一目瞭然一點ノ疑ヲ容ルヘカラサルニ被告ノ所有ニ歸シタルトノ單一ナル理由ニ基キ私文書トシテ法條ヲ適用シタルハ擬律錯誤アル不當ノ判決ナリト云フニアリ被告友三ハ原判決正當ニシテ上告趣意ハ不當ナリト答辯書ヲ差出シタリ又被告人ノ上告ノ要旨ハ第一林田眞治方止宿中宿料ニ差間ヘ金調ニ困シ居ル折柄會テ中ノ島炭坑業務ニ從事セシ節高島郵便局ニ金五拾錢貯蓄シタル通帳ヲ見出シタルヲ以テ隣室書生某ノ所持スル「コム」付キ鉛筆ヲ借受ケ何心ナク「錢」ノ字ヲ磨シ「圓」ノ字ニ改メ置キ其後他出シ間モナク歸宿セシニ所持ノ懷中時計紛失シ居タルニ因リ時計紛失外ニ五拾圓貯金通帳ノ傍ラニ置キタル金圓モ見受ケスト宿主ニ告ケタル處宿主甚々憤怒シ探偵巡查ニ密告シタルヨリ宮永巡查カ出張ノ上種々訊問ヲ受ケタルニ付金圓紛失ノ點ハ全ク虚誕ナルヲ以テ自白シタルモ巡查ハ警察署ニ拘引スヘシト逼リ



宿主ハ宿料ヲ辨償スヘシ左ナクハ貯金通帳ニ委任狀ヲ添ヘ相渡スヘシトテ自ラ委任狀ヲ認メ之ニ捺印セヨト嚴促セラレ止ムヲ得ス姓名ノミヲ記シ捺印ノ上相渡シタリ而シテ被告ハ棋ヶ崎警察署ニ拘引セラレ警留ノ際何故ニ五拾圓ノ貯金ヲナシナカラ僅カノ宿料ヲ今日迄仕拂ハサルヤ通帳ハ一應取戻シ無効ニ屬セシモノニナキヤト訊問アリタルニ付彼ノ通帳ハ故アリテ五拾錢トアル錢ノ字ヲ圓ト改メ宿主林田眞治ニ交付シ置キタル旨ヲ自首シタル事實ナリ第二前項ノ事實理由ナルニ第一審判文ニ曾テ六月三十日前ヨリ食料催促ノ延期ヲ得ル手段ニ供スル爲メ變造シ置キ云々其督促ヲ免カレンコトヲ企圖シ云々ト掲ケアルモ全ク宿料ノ延期ヲ得ルノ手段ニ供スル精神ニアラスシテ所謂其豫備ニ供スルニ止マリタルモノナリ何トナレハ若シ宿主林田眞治ヲ瞞着シテ欺クヘキノ意ナリトセハ斯ク強制ニ遇ハサルモ自ラ委任狀ヲ書シ眞治ヲ欺罔シ其望ニ應スルハ容易ノコトナレハナリ

然ルニ文書變造行使既遂ナリトノ理由ニ基キ刑法第二百十條一項第百十二條ヲ適用處斷シタルハ擬律ニ錯誤アル不法ノ判決ナリ第三假リニ通帳變造行使既遂ノ所爲アリトスルモ犯罪發覺前ニ自首ナシタレハ刑法第八十五條ヲ適行スヘキニ何等ノ證左アリテ前項法條ヲ適用處斷シタルカ實ニ審理不盡ナリ然ルニ原院ハ如斯不法ナル第一審判決ヲ認可セラレタルヲ以テ服從スル能ハサルニ付速ニ之ヲ破毀シ公明ノ判決ヲ仰クト云フニアリ長崎控訴院檢察長林誠一ハ被告人ノ上告ハ適法ノ原由ナシト思料スル旨答辯書ヲ差出シタリ被告友三八附帶上告辯明書ヲ呈出シタリ其要旨ハ第一文書ヲ偽造シ又ハ變造シテ行使スルノ罪ヲ組織スルニハ眞實ヲ變換スルコト人ヲ害スルノ惡意思アルコト變換證書ヲ行使スルコト損害ヲ實際ニ生シ得ヘキコトノ四條件ヲ具備スルニアラサレハ構成セサル者ナルコトハ論ヲ俟タス然ルニ被告カ行爲タルヤ擅ニ貯金通帳中ノ一文字ヲ改竄セシハ眞實ヲ變換



シタルモノニテ素ヨリ善良ノ所爲ニアラサルモ其目的タルヤ何ノ用ニ供スル手段モナク又通帳ヲ郵便局ニ提出シ不正ノ金ヲ騙取シタルニアラス又林田眞治ニ對シ直接間接トニ係ラス損害ヲ加ヘタルニモアラス而シテ木筆等ノ「コム」ニテ磨擦セシメ故日光ニ照セハ容易ニ變造ノ點ヲ檢顯シ得ヘキハ瞭然タレハ所謂相對的ノ不能犯ナリ然ルニ文書變造罪ニ問擬セラレタルハ審理不盡ナリ第二假リニ文書變造罪ヲ構成スヘキモノトスルモ未タ其目的ヲ達セス其効用ヲ奏セサル以上ハ法律上行使既遂ヲ以テ論スルヲ得サルヤ明白ナリ然ルニ上告人カ貯金通帳ニ委任狀ヲ添付シテ交付シタルノミヲ以テ行使既遂ニ問擬セラレシハ擬律ノ錯誤ナリ第三原院判文ニ右末次友三カ官文書變造ノ被告事件ニ付長崎地方裁判所カ言渡シタル裁判ニ對シ檢事ノ控訴アリタルヲ以テ之ヲ審理云々トアリ被告モ明治廿四年八月廿八日付ニテ控訴申立ヲ爲シタレハ檢事正ノ控訴ト被告ノ控訴ニ付孰レカ

附帶控訴ナルカヲ明記セサルハ如何ナル理由ナルカ解スルヲ得ス第四本件ニ付公廷辯論ニ先立テ辯護人ヨリ證人林田眞治ノ再召喚ヲ請フモ許容セスシテ裁判言渡シアリタルハ越權ノ處分ナリト云フニアリ其他ハ上告旨趣ヲ敷衍シタルニ過キス大審院ニ於テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ式ヲ履行シタルニ立會檢事應當融ハ長崎控訴院檢事長ノ上告旨趣ノ如ク原判決ハ破毀ノ原由アリト思料スル旨ノ意見ヲ述ヘ代言人西川莊六ハ檢察官ノ上告ハ不當ナリト逐一辯駁シ且被告ノ上告論旨ヲ敷衍シ被告ノ所爲ハ無罪ナリト陳述シタリ依テ判決ヲ爲スコト左ノ如シ

檢察官ノ上告論旨ヲ審按スルニ人民ヨリ郵便局ニ貯金ヲ爲スハ自己ノ便益ノ爲メ其金圓ヲ官署ニ寄託スルモノナレハ郵便局カ之ヲ預リタル事ヲ證スル爲メ人民ニ交付シタル通帳ナル者ハ他ノ行政事務ヲ以テ官署ヨリ下付セシ文書ト同視スヘキモノニ非スシテ要スルニ權



利義務ニ關スルノ證書タルニ過キス故ニ原控訴院ニ於テ本件被告ノ所爲ニ對シ刑法第二百十條一項第二百十二條ヲ適用ス可キ犯罪ナリト判決シタルハ相當ニシテ擬律ノ錯誤ト謂フコトヲ得サルナリ被告人ノ上告第一第二論旨ハ被告ニ於テ文書變造行使ノ所爲ナシ原判文ニ認メタル事實ハ真正ニ非スト陳辯シテ裁判官カ事實判定ノ當否ヲ非難スルニ過キサレハ上告適法ノ理由ト爲スヲ得ス第三被告ハ警察官ノ訊問ニ對シ犯罪ヲ自白シタルモノニシテ發覺前自首シタルニ非サルヲ以テ刑法第八十五條ヲ適用セサルハ當然ナリ其辨明書第一第二被告カ宿料ノ督促ヲ免カレンカ爲メ貯金通帳ノ文字ヲ改竄シ林田眞治ニ交付シタル事實ハ原判文ニ明示スル所ナレハ文書變造罪ヲ組成セスト云フヲ得ス已ニ其文書ヲ眞治ニ交付シタル上ハ行使既遂ノ所爲タルヤ論ヲ俟タス第三本件ハ第一審裁判ニ對シ原裁判所檢事正ヨリ控訴ヲ爲シタルモノニシテ被告ヨリ控訴ヲ爲シタルノ事跡アル

コトナシ假令之レアリトスルモ其附帶控訴ナルヤ否ヲ明記スルノ必要ナキモノトス第四公庭ニ於テ證人喚問ノ請求ヲ許否スルハ裁判官ノ職權ニ任從スル所ナレハ其召喚ヲ必要ナラスト爲シ之ヲ許可セザリシハ相當ノ處分ナリ以上辨明スル如クナルニ因リ檢察官及ヒ被告人ノ上告論旨ハ總テ其理由ナキモノト判定シ刑事訴訟法第二百八十五條ニ從ヒ本案上告ハ共ニ之ヲ棄却スルモノナリ

### ● 爆發物 擬律 破毀 審判

既ニ爆發スヘキ性質ヲ具備セル諸原料ヲ自己ノ手ニ取集メ必要アルトキハ自由ニ使用シ爆發セシムルヲ得ヘキモノトナシタル以上ハ假令ヒ其藥品其他ノ物品ヲ調合シ一物體ト爲サ、ルモ爆發物ヲ所持シタルニ外ナラサルヲ以テ爆發物取締規則第三條ニ據リ重懲役ニ處スヘキモノニシテ火藥取締規則第二十五條ニ據リ二圓以



上二十圓以下ノ罰金ニ處スヘキモノニ非ス爆發物取締規則三條  
火藥取締規則二五條

原判決ニ其事實ノ認定ナキトキハ大審院モ其擬律ノ如何ヲ判定ス  
ルニ由シナキヲ以テ之ヲ破毀シ更ニ審判セシム刑訴二  
八六條

爆發物取締罰則違犯ノ件明治廿四年刑第三百五十一號  
明治廿五年一月十四日宣告

第一審 東京地方裁判所 第二審 東京控訴院

被告 梅原賢藏、渡邊逸作、池上文夫 辯護人 中島又五郎

右爆發物取締罰則違犯被告事件東京地方裁判所ノ裁判ニ服セス檢事  
ヨリ控訴ヲ爲シタルニ付明治廿四年十月廿一日東京控訴院ニ於テ審  
理ノ未被告梅原賢藏ノ所爲ハ爆發物ノ原料トナルヘキモノヲ所持シ  
タルニ過キスト雖モ其内鹽酸加里、硫黃、炭末ノ混和シタルモノハ普通  
火藥ト均シキ發火力ヲ有スルモノナルカ故ニ其所爲ハ軍用品ニアラ  
サル火藥ヲ私カニ所持シタルモノ被告渡邊逸作、池上文夫ノ所爲ハ罪  
ト爲ラサルモノト認メ之ヲ法律ニ照スニ被告梅原賢藏ノ所爲ハ火藥

取締規則第二十五條及刑法第六十條ニ當ルヲ以テ原裁判所カ前掲  
ノ事實法條ニ依リ罰金十五圓ニ處シ配合シタル藥品ハ禁制物ナルニ  
付刑法第四十三條第四十四條ニ依リ官ニ沒收シ被告渡邊逸作、池上文  
夫ハ刑事訴訟法第二百二十四條ニ依リ無罪ト言渡シタルハ相當ニシ  
テ檢事ノ控訴ハ其理由ナキニ付刑事訴訟法第二百六十一條前段ニ依  
リ該控訴ヲ棄却スト言渡シタリ

東京控訴院檢事石渡敏一ハ右裁判ヲ不當ナリトシ上告ヲ爲シタリ其  
趣旨ハ第一被告梅原賢藏ハ機會ヲ待テ人ヲ害セントスル目的ヲ以テ  
兼テ貯藏セル爆發物ノ原料タル鹽酸加里、金硫黃、雜冠石ヲ明治廿二年  
七月中淡路政太郎ヲシテ静岡縣伊豆國君澤郡川西村字長岡杉山彌平  
ニ情ヲ明カサスシテ預ケシメタリ然ルニ其以來條約改正ニ付梅原賢  
藏ハ時ノ大臣ト意見ヲ異ニシ條約改正ノ談判ヲ中止セシムルニハ尋  
常ノ手段ニテハ其目的ヲ達スルヲ能ハサルヲ以テ爆發物ヲ以テ大臣



ヲ倒スヨリ外ナシト思量シ同年九月中静岡縣駿東郡沼津町ニ至リ相被告渡邊逸作ニ情ヲ明カシ杉山彌兵衛方ヨリ右三種ノ藥品ヲ取出サシメ沼津ニテ渡邊ヨリ之ヲ受取り東京ニ出テ右ノ藥品ヲ調合シ爆發物トシ時ノ大臣黒田大隈ノ二伯ヲ倒サントシタル事實ハ當控訴院ノ認ムル事實ナリ又右ノ三種ノ藥品調合セハ完全ナル爆發物トナルコトハ細井修吾ノ鑑定書ニヨリ明カナリ之ヲ爆發物取締規則ニ照セハ人ヲ害セントスルノ目的ヲ以テ爆發物ヲ製造シタルモノト云ハサルヲ得ス然ルニ當院ニテハ不法ニモ右ノ所爲ヲ以テ爆發物ノ原料ヲ所持シタルニ過キサルヲ以テ此點ニ付被告梅原賢藏ニ對シ無罪ノ裁判ヲ言渡シタルハ不當ナリト云ハサルヲ得ス何トナレハ爆發物取締罰則第三條ニ第一條ノ目的ヲ以テ爆發物ヲ云々製造輸入所持シ又注文ヲ爲シタルモノハ重懲役ニ處ストアリ又第五條ニ第一條ニ記載シタル犯罪者ノ爲メ情ヲ知テ爆發物云々ヲ製造輸入販賣讓與寄藏シ及ヒ其

約束ヲ爲シタルモノハ重懲役ニ處ストアリ之ニ依テ見レハ爆發物ヲ製造シタルノミナラス製造ノ端緒トモ云フヘキ約束注文ノ如キ口約束ニ止ルモノヲモ罰スルヲ以テ製造ト口約束トノ中間ニアル爆發物製造ノ爲メ原料取集并ニ現ニ製造ニ着手シタルモノハ元ヨリ同罪ヲラサルヲ得ス若シ然ラストセハ輕キ口約束ハ重懲役ニ處セラレ一歩進メタル爆發物ノ製造ノ爲メ原料取集シタルコトハ罪ナキニ至ラン豈如斯不都合アラシヤ是等ノ論ハ取締罰則ノ製造ナル文字ヲ誤解シタルモノト云ハサルヲ得ス何トナレハ同則ノ所謂製造トハ製造ノ所爲ヨリ見タルモノナルヲ以テ爆發物ノ原料取集ヨリ之ヲ製造シ終ル迄ノ總テノ所爲ヲ云フ然ルニ最終ノ手段ノミヲ製造トシ最初ノ手段即チ原料取集ヲ製造ト見做サス從テ原料ヲ取集シタルモノハ法律ニ罰則ナシ故ニ無罪ナリト云フハ畢竟爆發物取締罰則製造ノ解釋ヲ誤リタルモノト云ハサルヲ得ス被告梅原賢藏カ二十年中巽數馬ト共謀シ



時ノ大臣伊藤井上兩伯ヲ倒サントシ爆發物ノ原料ヲ取集シタルヲハ明治廿二年二月ノ大赦ニ依リ免罪トナリタルヲ以テ爆發物ノ原料ヲ只所持スル點ハ免罪トナリタル所爲ノ結果ナルヲ以テ罰スヘキ廉ナシト雖モ二十二年九月中兼テ右所持セル爆發物ノ原料ヲ二度ヒ調合シ爆發物トシ人ヲ害セントスルノ目的ヲ以テ渡邊逸作ヲシテ杉山彌兵衛方ヨリ取出サシメタルハ新タニ爆發物ノ原料ヲ取集シタルモノナルヲ以テ爆發物取締罰則第三條ノ爆發物ヲ製造シタルモノナリト云ハサルヲ得ス然ルニ被告人ニ對シ無罪ノ言渡ヲ爲シタルハ不當ナリ第二被告人渡邊逸作ハ明治廿二年九月中梅原賢藏ノ依託ヲ受ケ爆發物ノ原料ナルヲ并ニ其使用方法ヲ知テ静岡縣伊豆國君澤郡川西村字長岡杉山彌兵衛方ヨリ取出シ沼津ニ於テ梅原賢藏ニ之ヲ渡シタル事實ハ當控訴院ノ認メタル事實ナリ然ルニ爆發物原量トナルヘキモノ、受授取次シタルモノニ過キサルヲ以テ無罪ナリト言渡シタルハ

不當ナリ被告人ハ爆發物製造ノ幫助ヲ爲シタルモノナリ第三池山文夫ハ明治廿二年九月中渡邊逸作カ梅原賢藏ノ依頼ヲ受ケ伊豆國杉山彌兵衛方ヨリ取出シタル爆發物ノ原料トナルヘキ藥品ヲ池山文夫ハ偶然沼津寓居ニ於テ見出シ鹽酸加里金硫黃雞冠石ノ幾部ヲ取出シ其殘リヲ渡邊逸作ト共ニ沼津ニ於テ梅原ニ渡シタル事實ハ當控訴院ノ認メタル事實ナリ然ルニ爆發物ノ原料ヲ所持シ又ハ渡シタルニ過キヌトシ之等ノ所爲ニ對シ無罪ノ裁判ヲ言渡シタルハ不當ナリ何トナレハ第一被告人ハ梅原賢藏ノ爆發物製造ノ幫助ヲ爲シ第二人ヲ殺スノ目的ニ非サルヲ證明スルヲ能ハスシテ爆發物ノ原料ヲ取集シタルモノ即チ製造シタルモノナレハ爆發物取締罰則第六條ヲ以テ處分スヘキモノナレハナリ右ハ法律ヲ相當ニ適用セサルモノト思料シ破毀ヲ求ムト云フニ在リ對手人被告三名ハ原院ノ判決相當ニシテ檢事ノ上告ハ適法ノ理由ナキ旨答辯セリ



大審院ニ於テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ立會檢事川目亨一ハ被告カ本按ノ藥品ヲ所持シタルノ目的ハ原判決ノ認定シタル事實ニ因リ爆發物取締罰則第一條ニ相當スルヲ明ナリ而シテ爆發物ヲ製造シタルモノナリト論シタル原院檢事ノ説ニハ同意ヲ表セサルモ該罰則第三條ノ精神ハ假令ヒ原料ヲ調合装置セス爆發スヘキ藥品ヲ分離シテ所持スルモ之ヲ罰スルニ在ルモノナレハ賢藏ニ對シテハ爆發物ヲ所持シタルノ罪アリ又々逸作ハ爆發物ヲ預リタルモノナレハ其所爲ハ同則第五條ニ該リ文夫ハ之ヲ預リ且爆發物ヲ取出シタルモノナレハ寄藏及ヒ所持ノ罪アリト論辯セリ代言人中島又五郎ハ原料ヲ所持シタルマテニシテ爆發物ヲ所持シタルニアラサル旨ヲ詳述シ且ツ罰則ノ解釋ニ付檢事ノ意見ヲ辯駁シ上告ノ理由ナキヲ論シタリ右雙方ノ陳述ヲ聽キ判決スルヲ左ノ如シ

原判決ノ認定シタル事實ニ依レハ被告賢藏ノ所爲ハ明治二十二年七

八月頃ヨリ爆發物ヲ以テ黒田内閣總理大臣若クハ大隈外務大臣ヲ要撃シ強テ條約改正談判ノ中止ノ目的ヲ達セント企テ其以前ヨリ他人ノ家ニ差置キシ本按ノ問題タル藥品及ヒ物品ヲ同年九月中自カラ之ヲ携ヘテ寓居ニ持テ歸リ置キ同年十月中大隈外務大臣ノ遭難黒田總理大臣ノ辭職アリテ尋テ條約改正談判モ亦々延期トナルヲ以テ其使用ノ目的ヲ失ヒ隨テ右藥品ノ必要ナキニ至リタルモノナレハ其藥品及ヒ物品ヲ所持シタルノ目的ハ人ノ身體ヲ害セントスルニ在リシヤ明瞭ナリトス而シテ該藥品ハ爆發スヘキ原料タルヲモ亦々原判決ノ認定シタル所ナリ既ニ其爆發スヘキ性質ヲ具備セル諸原料ヲ自己ノ手ニ取集メ必要アルキハ自由ニ使用シ爆發セシムルヲ得ヘキモノトナシタル以上ハ假令ヒ其藥品其他ノ物品ヲ調合シ一物體ト爲サハルモ爆發物ヲ所持シタルニ外ナラサルモノトス依テ上告論旨ノ如ク被告ノ所爲ハ爆發物取締罰則第三條ニ因リ處斷スヘキニ原裁判所ニ



於テ火藥取締規則第二十五條刑法第六十條ヲ適用シタルハ擬律ノ錯誤アル裁判ナリトス被告渡邊逸作ノ所爲ニ付テハ原判決ノ認定シタル事實ニ依レハ爆發物在中ノ罐ナルコトヲ知リナカラ之ヲ預リ置キタリト雖モ始メ杉山彌平方ヨリ物品ノ何タルヲ知ラスシテ鐵葉罐三個ノ風呂敷包ヲ受取り後チ偶然其風呂敷ヲ開キタルヨリ爆發物タルコトヲ知リタルモノナリ然ラハ製造ヲ幫助シタルニアラス一時寄藏ノ所爲アルモ爆發物取締罰則第五條ヲ按スルニ第一條ニ記載シタル犯罪者ノ爲メ情ヲ知リテ爆發物ヲ寄藏シタル者云々トアリテ其情ヲ知リテ寄藏シタル場合ニ非サレハ本條ヲ適用スルヲ得ス然ルニ一モ被告カ其情ヲ知リタルノ事實ナキヲ以テ上告論旨ハ其理由ナキモノトス被告池山文夫ノ所爲ニ付テハ爆發物ヲ預リ置タルノ點ハ逸作ニ於ケルト同一ニシテ爆發物取締罰則ノ制裁ヲ受クルノ限リニアラス而シテ鹽酸加里金硫黃雞冠石ノ幾部ヲ取出シ其儘所持シタルノ所爲ニ

至リテハ該則第六條ニ依リ第一條ニ記載シタル犯罪ノ目的ニアラサルコトヲ證明スルコトヲ得タルヤ否ニ依リテ罪ノ有無ヲ決スヘキモノトス然レモ原判決ニ其事實ノ認定ナキヲ以テ擬律ノ如何ヲ判定スルニ由ナシ依テ文夫ニ對スル原裁判ハ之ヲ破毀シ更ニ審判セシメサルヲ得ス

右ノ理由ナルヲ以テ渡邊逸作ニ對スル本按上告ハ刑事訴訟法第二百八十五條ニ依リ之ヲ棄却シ池山文夫ニ對スル原裁判ハ同法第二百八十六條ニ依リ之ヲ破毀シ宮城控訴院ニ移シテ審判セシメ梅原賢藏ニ對シテハ同法第二百八十七條ニ依リ原判決ヲ破毀シ本院ニ於テ判決スル左ノ如シ

## 梅原賢藏

原裁判ノ認定シタル事實ニ依リ被告ノ所爲ハ爆發物取締罰則第三條ニ該リ重懲役ニ處スヘキノ處情狀原諒スヘキヲ以テ刑法第八十



九條同第九十條ニ照シ本刑ニ二等ヲ減シ二年六月ノ重禁錮ニ處ス所持シタル爆發藥品ハ刑法第四十三條第四十四條ニ依リ沒收ス

●利息制限法 請求以外ノ判決

利息制限法ハ利息ヲ元金ニ結ヒ證書ヲ改正セシモノヲモ引戻ノ旨意ニアラス明治十年布告第六十六號

請求以外ニ涉リタル判決ハ不法ナリ

貸金請求ノ件 明治廿四年民第二部第五十六號  
明治廿五年一月十四日判決

第一審 松山始審裁判所高松支廳 第二審 大阪控訴院

上告人 太田順三郎

被上告人 半田宗三郎

半田宗三郎ヨリ太田順三郎ニ係ル貸金請求事件ニ付大阪控訴院カ明治廿三年十二月二十四日言渡シタル判決ニ對シ上告人ハ全部破毀ノ

申立ヲ爲シ被上告人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

判決主文

原裁判ノ一部ヲ破毀シ本院ニ於テ判決スルヲ左ノ如シ

上告人ハ被上告人請求ノ金額七百貳拾五圓九拾錢ヲ拂フヘシ

但シ上告ニ係ル訴訟費用ハ各自辨タルヘシ

理由

上告第一點ヲ案スルニ原院カ利息制限法ニ超過スル利息ニシテ既済ノモノハ云々假令ヒ其利息ヲ當初ニ引去ルモ法律ニ抵觸セザルモノナリト判定シタルハ明治十年第六十六號布告ヲ不當ニ適用シタル不法アリト云フニ在レモ本件ノ如キ甲第一號證ヨリ起リテ甲第四號證ト歴改シテ利息ハ其都度承諾上受授シタル者ナレハ之ヲ引戻ヲ得サル者トス何トナレハ十年第六十六號布告ハ利息ヲ元金ニ結ヒ證書ヲ改正セシモノヲモ引戻サシムルノ主意ニアラザレハナリ



同第二點ヲ案スルニ明治十七年入金百八拾五圓及ヒ同十八年入金四百圓ハ全部本件ヘ入金シタルモノナルコトハ始審第五十二號事件ノ判決騰本ト被上告人ヨリ差出シタル計算書トニ依リ一目瞭然タルニ原院カ百八拾五圓ノ内百五拾三圓七錢五厘及ヒ四百圓ノ内三拾五圓壹錢四厘ハ始審第五十二號事件ノ入金ナリト判定シタルハ法則ニ違背シテ事實ヲ認定シタル不法アリト云フニ在レモ原控訴院ハ甲第九號證ノ計算ヲ採用シテ上告人ノ申分ヲ斥ケタリ然レハ上告人ト原裁判ト意見ヲ異ニスルニ止テ被上告人ノ口頭ノ陳述ヲ妄信シタルモノニ非ス前文示スカ如ク甲第九號證ノ計算ニ依タル者ナリ故ニ法則ニ違背シテ事實ヲ定メタリト云フヲ得ス

同第三點ヲ案スルニ被上告人ノ請求高ハ七百貳拾圓ナリシニモ拘ハラス原院カ被控訴人ハ甲四號證ノ元金ニ甲四號證ハ元金九百八拾圓  
 明治十八年一月ヨリ制限法ノ利息ヲ附シ控訴人ニ辨償スヘシト判定

シタルハ請求以外ニ涉リ判決シタル不法アリト云フニ在リ此論告ハ道理アル者トス何トナレハ控訴狀ノ冒頭ニ金七百貳拾五圓九拾錢ト記載アリ又被上告人モ上告人ト同意ニシテ原判決ノ誤認ナルコトヲ申立タリ即チ請求以外ノ判決ナルヲ以テ不法ナリトス依テ此部分ヲ破毀シ更ニ主文ノ如ク判決スル者ナリ

● 關席裁判 故障申立

關席裁判ニ付故障申立アリタルキハ裁判所ハ職權ヲ以テ故障ヲ許ス可キヤ否ヤ又法律上ノ方式ニ從ヒ若クハ其期間ニ於テ故障ヲ申立テタルヤ否ヤヲ調査シ此三要件ヲ缺カサルキハ之ヲ受理シ關席前ノ程度ニ復スヘキモノトス  
民訴二五九條二六〇條

鑛山借區持歩高讓渡契約排斥ノ件  
 明治廿四年民第一〇部第百四十三號  
 明治廿五年一月十五日判決



第一審 金澤始審裁判所

第二審 大阪控訴院

上告人

水島庄兵衛

訴訟代理人

金丸鐵、中村一興

被上告人

吉田與三松

訴訟代理人

高野榮次郎

同

今川甚三郎、寶島太三郎

右當事者間ノ鑛山借區持歩高讓渡契約排斥事件ニ付大阪控訴院カ明治廿四年二月十六日言渡シタル故障ノ判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告人吉田喜作ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

又上告人ハ被上告人今川甚三郎及ヒ寶島太三郎ニ對シテハ闕席ノ儘判決アラントノ申立ヲ爲シタリ

立會檢事磯部四郎ハ意見ヲ陳述シタリ

判決主文

原判決ヲ破毀シ更ニ辯論及ヒ判決ヲ爲サシムル爲メ本件ヲ大阪控訴

院ニ差戻ス

理由

上告第三論旨ハ上告人カ闕席判決ニ對シ故障ノ申立ヲ爲シタルハ理ノ當然ニシテ固ヨリ法律ノ禁セサル處ナルノミナラス却テ之ヲ容レサルヲ得サルモノナリ而シテ其申立ハ法律上方式ニ違ヒ若クハ期間外ニ渉ル等ノ事ナシ故ニ原院ハ之ヲ見認メテ本案事實ヲ審判ス可ク却下ス可キモノニ非サルコト明カナルニ原判決茲ニ出テス既ニ民事訴訟法第二百五十八條ヲ適用シテ審理スルニ至リナカラ本案事實ヲ審判セヌ闕席及ヒ延期ノ是非ヲ論シ以テ該故障却下ノ判決ヲ爲シタルハ即チ違法ノ裁判ナリト云フニ在リ依テ按スルニ凡ソ故障ノ申立ニ對シテハ民事訴訟法第二百五十九條ニ法式期間等三箇ノ要件規定アリテ裁判所ハ此要件ニ缺クル所ナキヤ否ヤヲ調査スルニ止マリ其故障ニシテ要件ニ缺クル所ナケレハ即チ適法トシテ受理セラレ訴訟ハ



當然闕席前ノ程度ニ復ス可キモノトス今ヤ上告人カ原院ニ於テ爲シタル故障ノ申立ヲ見ルニ法式期間等三要件中一モ缺クル所ナシ左レハ其故障ハ適法トシテ受理セラレ訴訟ハ闕席前ノ程度ニ復ス可キハ當然ノコトナリトス然ルニ原院ハ訴訟ノ本案ニ付審判ヲ爲サスシテ徒ニ故障申立ニ付理由ノ有無ヲ調査シ而シテ上告人ノ故障ハ其理由ト爲スヘキニ非サルヲ以テ民事訴訟法第二百五十九條ヲ準用シ不適法トシテ之ヲ棄却スト言渡シタルハ即チ法律ノ誤解ニ出テタル不當ノ裁判ニシテ原判決ハ到底其全部ノ破毀ヲ免カレサルモノトス此他尙ホ第二及ヒ第四ノ上告點アリト雖モ前陳ノ如ク既ニ原判決ノ要部ニ違法ノ點アリテ其全部ヲ破毀シ更ニ辯論及ヒ判決ヲ爲サシムル爲メ本件ヲ原院ニ差戻スヘキモノト決スル以上ハ爾餘ノ論告ニ對シ逐一説明ヲ與フルノ要ナキモノトス

● 不知ノ答述 理由不付 破毀ノ原由 衆議院議員當選訴訟

不知ノ答述ヲ採用シ且ツ判決ノ要點ニ理由ヲ付セサル裁判ハ破毀ノ原由アルモノトス 民訴一一一號 四三六條二號

衆議院議員當選訴訟ハ原判決破毀ノ理由アルモ審判中衆議院解散ノ命アルキハ之ヲ他ニ移送セス破毀ノ上直ニ棄却ス 衆議院選舉法第八十二條  
 衆議院議員當選無効ノ件 明治廿四年民第二百四十六號 明治廿五年一月十九日判決

原裁判所 東京控訴院

上告人 木暮武太夫 訴訟代理人 岡村輝彦  
 被上告人 島田音七 訴訟代理人 山田喜之助

島田音七ヨリ木暮武太夫ニ係ル衆議院議員當選無効事件ニ付東京控訴院カ明治廿四年九月十七日言渡シタル判決ニ對シ上告人ハ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告人ハ訴訟棄却ノ申立ヲ爲シタリ



判決主文

四十一

東京控訴院カ本件ニ付言渡シタル判決ハ之ヲ破毀ス  
本件ノ訴訟ハ之ヲ棄却ス  
訴訟費用ハ總テ雙方自辨タル可シ

理由

上告及擴張論旨中上告人ハ原法廷ニ於テ岡田鍋八黒崎常吉二名ノ投票ハ其自筆ニ非ストノ被告人カ主張ニ對シ是レ第三者タル鍋八等ノ筆跡ナルニ付上告人ハ之ヲ知ラスト答ヘタルモノナルヲ以テ即チ之ヲ争ヒタルモノト看做ス可キハ民事訴訟法第百十一條末項ニ規定スル所ナルニ原裁判所カ(被告ハ之ヲ争ハサルニ依リ各其自筆ト認ムルヲ得ス)ト判定シタルハ違法ナリトノ論點及ヒ直稅分署ノ帳簿ニ依レハ被上告人ニ投票シタル宮澤安吉横山磯吉小谷野佐五平青山末吉永井菊太郎ノ五名ハ納稅資格ナキモノナレハ此五名ヲモ差引相成ル様

申立置タルニ原裁判所カ右五名ノ内四名ノ投票ハ無効ナリトシテ控除セシモ佐五平ノ資格有無ニ付判決セサルハ違法ナリトノ論點ニ付之ヲ審按スルニ上告人カ右不知ノ答述及ヒ次ノ申立アリタルコトハ原法廷ニ於ケル明治廿四年八月十日ノ辯論調書ニ照シテ明瞭ナリ然ルニ原裁判所カ上告人ハ前二名ノ投票ニ付其自筆ニアラストノコトヲ争ハサルモノト爲シテ上告人ノ得票數ヨリ之ヲ除却シ而シテ結局上告人ノ有効得票ヲ四百十五票ト爲シ又小谷野佐五平ノ一票ニ付其有効無効ヲ判定セスシテ結局被上告人有効得票ヲ四百十八票ト爲シ以テ被上告人ヲ三票ノ多數者ナリト判決シタルハ法則ニ違テ答述ヲ採用シ且ツ判決ノ要點ニ理由ヲ付セサル裁判ナルヲ以テ破毀ヲ免レサルモノト又然レモ本件ハ衆議院議員當選訴訟ニシテ審理中既ニ明治廿四年十二月廿五日衆議院ヲ解散セラレタルヲ以テ他ニ移送シ更ニ本案事實ノ辯論ヲ爲サシムル必要ナキニ依リ本院ニ於テ破毀ノ上直ニ

四十二



衆議院議員選舉法第八十二條同第八十八條ヲ準用シ本件ノ訴訟ヲ棄却シ且本案ノ曲直ニ付判決ヲ與ヘサルモノナルニ依リ訴訟費用ハ總テ雙方自辨ヲ以テ相當ナリトス

●債權差押 事實上不當ノ確定 法則上不當ノ適用

甲カ乙ニ對スル權利ノ爲メ丙ノ乙ニ負フ所ノ義務即チ乙ノ債權ヲ差押フル場合ニ於テ丙ヨリ金圓ヲ受取ル能ハサル事實即チ再ヒ金圓ヲ返辨シタルコアルニモ拘ハラヌ甲カ當然乙ヨリ得ヘキ權利ヲ有シ、如ク乙ノ權利ヲ行ヒタルモノトシテ判決シタルハ事實ヲ不當ニ確定シ法則ヲ不當ニ適用シタルモノナリ

不當辨濟金取戻ノ件 明治廿四年民第百七十二號 明治廿五年一月十九日判決

第一審 橫濱地方裁判所

第二審 東京控訴院

上告人 飯田 字七

訴訟代理人

矢野 祐成 義吉

被上告人 松村 清吉

訴訟代理人

岡村 輝太郎

飯田字七ヨリ松村清吉ニ係ル不當辨濟金取戻シ事件ニ付東京控訴院カ明治廿四年四月八日言渡シタル判決ニ對シ上告代理人ヨリ全部破毀ノ申立ヲ爲シ被上告代理人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

判決主文

東京控訴院カ言渡シタル判決ヲ破毀シ更ニ辯論及ヒ判決ヲ爲サシメシ爲メ本件ヲ同院ニ差戻ス

理由

上告論旨ハ之レヲ要スルニ被上告人カ受取リタル金千拾圓ハ上告人ヨリ受取リタルモノニテ原院判決ノ如ク新泉常右衛門ヨリ受取リタルモノニアラス被上告人ハ當時新泉常右衛門ヨリ金圓ヲ受取リ得ヘキ權利ヲ有セサリシヤ甲第二號證判決ノ如クナルニ係ハラヌ徒ラニ



結果ノミヲ見テ原因ヲ究メス事實ヲ不當ニ定メ法則ヲ不當ニ適用シタル裁判ナリト云フニ在リ依テ按スルニ被上告人カ常右衛門ニ對スル權利ノ爲メ上告人ノ常右衛門ニ負フ所ノ義務即チ常右衛門ノ債權ヲ差押フルヤ當時未タ被上告人ニ於テ其權利ヲ有セス常右衛門ニ代リ上告人ヨリ金圓ヲ受取ルヲ能ハサリシハ常右衛門ノ異議申立執行事件ノ控訴判決ニ依リ確定シタルモノナリ故ニ現時ニ在リテハ其債權差押ハ解除セラレタル筋合ナルヲ以テ被上告人カ上告人ヨリ受取リタル金千拾圓ハ被上告人ノ當然返還セサルヲ得サルニ歸スヘシ果シテ然リ常右衛門ハ被上告人カ受取ル可ラサル金圓上告人カ爲スヲ要セサル辨濟ナリシト云フヲ以テ上告人ニ返金ヲ促カシ東京地方裁判所ノ執行命令書ニ依リ上告人ハ遂ニ再ヒ之レヲ返辨セリト陳供スル所ナリ然ルヲ原控訴院ハ被上告人カ當然常右衛門ヨリ得ヘキ權利ヲ有セシカ如ク被上告人ハ常右衛門ノ權利ヲ行ヒタルモノトシテ上

告人ハ常右衛門ニ對シ金圓ヲ支拂ヒタルモノナリト説示シ不當ノ辨濟ニアラスト判決シタルハ上告人所論ノ如ク事實ヲ不當ニ確定シ法則ヲ不當ニ適用シタル不法アルモノトス

● 契約證書ノ無効 契約證書ノ羈束 理由ナキ裁

判 保證人 債權者 保證義務ノ免除 普通ノ

法理

一ノ契約證書ヲ無効ナラシメテ他ノ契約證書ニ羈束セラルヘキモノト爲サンニハ必ス其理由ヲ示サ、ル可ラス之ヲ示サ、ルハ理由ナキ不法ノ裁判ナリ

二人以上ノ保證人アル場合ニ於テ債權者カ其一人ニ對シ保證義務ヲ免除シタルハ他ノ保證人ハ免除セラレタル者ノ部分ニ付テハ其義務ヲ免ル、ヲ普通ノ法理ナリトス



辨償金請求ノ件 明治廿四年民第百貳號  
明治廿五年一月廿一日判決

第一審 福井地方裁判所 第二審 大阪控訴院

上告人 長谷川字左衛門 訴訟代理人 山口 憲

被上告人 長谷川喜兵衛 訴訟代理人 井田 勵

長谷川喜兵衛ヨリ長谷川字左衛門外一名ニ係ル辨償金請求事件ニ付  
大阪控訴院カ明治廿四年六月五日言渡シタル判決ニ對シ上告代理人  
ヨリ全部破毀ノ申立ヲ爲シ被上告代理人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタ  
リ

判決主文

大阪控訴院カ言渡シタル判決ヲ破毀シ更ニ辯論及ヒ判決ヲ爲サシメ  
ン爲メ本件ヲ同院ニ差戻ス

理由

上告第二點ハ原控訴院カ追加甲第五號證ノ契約ヲ爲シ云々被控訴人

等ニ差入レタル約定證書ハ總テ反古ト爲シ即チ無効ナラシメ云々ト  
判定セラレタレトモ該證ハ上告人ノ調印モナク上告人ノ毫モ關預シ  
タルモノニアラサルニ何カ爲メ之レカ羈束ヲ受サルヘカラサルカ之  
レヲ採用セラル、理由ヲモ示サル、トナク爭ヒナキ甲第一號證ノ債  
權者長谷川四郎左衛門ヨリ領受セル乙第一二號證殊ニ被上告人ノ與  
書アル乙第三號證ノ契約ヲ無効ナラシムルノ材料ニ供セラレシハ判  
定ノ當否ヲ知ルニ由ナキ理由不備ノ裁判ナリト云フニ在リ依テ按ス  
ルニ乙第一號乃至第三號證ハ本案甲第一號證ナル上告人ノ保證義務  
ノ釋放ヲ受ケタル確證ナリトシテ上告人ノ提出シ以テ爭點ト爲シタ  
ルモノニ係リ之ニ反シ追加甲第五號證ハ乙號各證ヲ無効ニ屬セシム  
ヘキ被上告人ノ舉證ニシテ上告人ハ其調印ナク毫モ關預セスト爭ヒ  
タルモノナリ故ニ若シ原裁判所カ追加甲第五號證ヲ採用シ甲第一號  
證ノ眞ノ債權者ナリト言フ長谷川四郎左衛門カ爲シタル契約乙第一



二號證殊ニ被上告人ノ與書アル第三號證ノ契約ヲシテ無効ナラシメタル契約證ナリト爲シ上告人ヲシテ此契約ニ羈束セラルヘキモノト爲サンニハ須ク其理由ヲ示サ、ル可ラサルニ原裁判茲ニ出ス漫然追加甲第五號證ノ契約ヲ爲シ云々被控訴人即チ上告人等ニ差入レタル約定證書ハ總テ反古ト爲シ云々ト判示セシハ裁判理由ナキ不法アルモノトス

上告第三點ハ甲第一號證ナル上告人ノ保證義務ハ其釋放ヲ受ケサルモノトスルモ上告人ト共ニ保證ノ一人ナル笹島九郎左衛門カ釋放ヲ受ケタル部分即チ本件請求額ノ一半ハ減額セラレサルヲ得サルニ原控訴院ハ被上告人カ九郎左衛門ノ保證義務ヲ釋放シタルモノト判定シナカラ其部分迄ヲモ上告人ニ負擔セシメラレタルハ法理ニ反シタル裁判ナリト云フニ在リ依テ按スルニ二人以上ノ保證人アル場合ニ於テ價權者カ其一人若クハ數人ノ保證義務ヲ免除セハ他ノ保證人ハ其免除セラレタル一人又ハ數人ノ部分ニ付其義務ヲ免カル、ハ普通ノ法理ナルニ原裁判カ被上告人ノ免除セシ笹島九郎左衛門ノ保證義務ノ部分ヲモ上告人ニ命シタルハ法則ヲ不當ニ適用シタル不法アルモノトス

● 贓物牙保 賣主買主

贓物牙保ノ罪ハ其賣主買主雙方ノ間ニ介立シテ賣買ヲ遂ケシムルニ因テ成立スルモノナレハ牙保罪ノ成立ニ付テハ果シテ其賣買ヲ遂ケタルヲ明示セサル可カラヌ刑三九

盜賊牙保ノ件 明治二十四年刑第四百七十號  
明治二十五年一月廿一日宣告

第一審 名古屋地方裁判所 第二審 名古屋控訴院

被告 野田光之助 辯護人 高木祖來

右光之助カ盜賊牙保被告事件名古屋地方裁判所ノ裁判ニ對シ檢察官



ヨリ控訴ナシタルニ付明治二十四年十一月廿一日名古屋控訴院ニ於テ審理ノ未被告ハ井田兼太郎ヨリ生絲九貫百目ノ賣捌方周旋ヲ依頼セラレ贓品タルノ情ヲ知リナカラ賣買ノ目的ヲ以テ其周旋ニ盡力シタルノ事實アリト爲シ其所爲刑法第三百九十九條同第四百條輕罪再犯ナルヲ以テ同第九十二條ニ依リ本刑ニ一等ヲ加ヘ處スヘキモノトス然ルニ第一審ニ於テ無罪ヲ言渡シタルハ失當ノ判決ナルヲ以テ刑事訴訟法第二百六十一條後段ニ則リ原裁判ヲ取消シ前掲ノ事實及法律ニ照シ更ニ重禁錮六月罰金五圓監視六月ニ付スト言渡シタリ被告光之助ハ右ノ裁判ヲ不當ナリトシ上告ヲ爲スノ要領原判文ヲ閱スルニ被告ハ該贓品ニ關係セサルヲ著明ノ事實ナルニモ拘ハラヌ以上ノ如ク處罰セラレタルハ刑事訴訟法第二百六十九條第九第十號ニ該當スト云フニ在リ

原控訴院檢察長加納謙ハ上告ノ趣旨ニ於ケル其原由ナシト答辯セリ

大審院ニ於テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シタル處被告人高木祖來ハ上告趣旨ヲ擴張シ被告光之助ハ本件犯罪ヲ自白シタルヲナキニ原判文中被告兩名ノ警察調書云々トアリテ恰モ被告カ自白シタルカ如ク之ヲ證據ト爲シタルハ不法ナリ又被告ハ贓物賣買ノ爲メ氏名知レサル者ヲ連レ來リタル而已ニテ其賣買成立セサレハ贓物牙保ノ罪ヲ構成セサルニ其罪アリト判定セシハ擬律錯誤ノ裁判ナリト論辯セリ依テ立會檢察令井良一ノ意見ヲ聽キ之ヲ判決スルヲ左ノ如シ

被告代言人カ上告擴張論旨後段ニ付キ原判文ヲ査閱スルニ被告光之助ハ云々專ラ買主ヲ搜索シ住所氏名不詳ノ買客二人ヲ兼太郎方ヘ連レ行キ引合サシメタルモノニシテ即チ該贓品賣買ノ目的ヲ以テ其周旋ニ盡力シタルモノト認定スルアリテ果シテ被告カ周旋ニ依リ賣買結了セシヤ否明瞭ナラス抑々贓物牙保ノ罪ハ其賣主買主雙方ノ間ニ



介立シテ賣買ヲ遂ケシムルニ因テ成立スルモノナレハ被告ニ對シ犯罪ノ責ヲ歸スルニ付テハ其賣買ノ遂ケタルヲ明示セサル可カラス然ルニ原判文ハ前掲ノ如ク明瞭ヲ欠クヲ以テ被告ノ犯罪ハ果シテ成立シタルヤ否ヲ判スルヲ能ハス原判決ハ即チ事實理由ノ不備タルヲ免カレス因テ此上告論旨ハ其理由アルモノトス已ニ此點ニ付キ原判決破毀ヲ免カレサル上ハ他ノ論旨ニ付キ一々辯明スルノ必要ナシ右ノ理由ナルヲ以テ刑事訴訟法第二百八十六條ニ則リ被告光之助ニ對スル原判決ヲ破毀シ更ニ適法ノ審判ヲ爲サシムル爲メ本件ヲ大阪控訴院ニ移スモノナリ

● 會社ノ責任 有限責任 地方廳指令 舉證ノ責

會社ノ責任ヲシテ有限ト爲サンニハ格段ナル條件ヲ要ス否ラサルキハ他人ニ對シテ有限責任ヲ主張スルコトヲ得ス

地方廳カ與ヘタル會社條例制定施行迄相對自營ニ任ストノ指令ハ有限責任ナル會社ノ設立ヲ認可シタルモノトハ論シ難シ  
明示ヲ受ケサルモノハ舉證ノ責ナシ

預ケ金取戻ノ件 明治廿四年民部第百七十三號  
明治廿五年一月二十三日判決

第一審 東京地方裁判所 第二審 東京控訴院

上告人 中村 良春 訴訟代理人 今村 力三郎  
橋本 好正

被上告人 早矢仕有的外十五名

訴訟代理人 角田 眞次  
久貝 義次

中村良春ヨリ早矢仕有的外十五名ニ係ル預ケ金取戻事件ニ付東京控訴院カ明治廿四年三月廿六日言渡シタル判決ニ對シ上告代理人ヨリ全部破毀ノ申立ヲ爲シ被上告代理人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ  
判決主文

東京控訴院カ言渡シタル判決ヲ破毀シ更ニ辯論及ヒ判決ヲ爲サシメ



ン爲メ本件ヲ同院ニ差戻ス

理由

上告論旨ハ之レヲ要スルニ横濱丸善爲替店ナルモノハ現ニ株主丸屋善七丸屋善八ノ氏名ヲ其商號ニ用ヒアルノミナラス該爲替店ノ責任カ有限ナルト無限ナルトハ法律上ノ決定タルヘキニ之レカ明示ヲ受ケサル上告人ヲシテ無限ナリトノ舉證ヲ責メタルハ不法ナリ又神奈川縣廳ノ認可ノ如キハ追テ一般會社條例制定施行迄相對自營ニ任ストアリテ唯或ル名義ヲ以テ或ル商業ヲ營ムヲ聽キ置キタルノミ假令其爲替店規約中ニ有限責任ナル條項アリテ其條項ヲモ併テ認可セラレタリトスルモ地方廳カ法人ノ組織ヲ認可シ其責任ヲ定ムルノ職權ナキヤ勿論ナレハ一ノ越權ナル處分トシ無効ニ屬ス可キモノナルヲ原裁判所カ其認可ヲ以テ有限責任ヲ判スル理由ト爲シタルハ不法ナリト云フニ在リ依テ按スルニ凡ソ會社ノ責任ヲシテ有限ナリト爲サ

ンニハ格段ナル條件ヲ要スヘキヤ言フ俟タス若シ其事ナキニ於テハ他人ニ對シ責任ノ有限ヲ主張スルヲ得サルヤ普通ノ法理ナリトス今本件爲替店設立ニ對スル神奈川縣廳ノ指令ヲ視ルニ追テ一般會社條例制定施行迄相對自營ニ任ストノミアリテ神奈川縣廳カ有限責任ナル會社ノ設立ヲ認可シタリトハ論シ難キニ拘ハラス原裁判ハ株式ヲ以テ組織スルヲ定メ神奈川縣廳ノ認可ヲ得テ云々依テ右商店ハ有限責任會社ノ事實ナリト認定スト說明シ又原裁判モ他人ナル上告人カ本訴預ケ金ヲ爲スニ當リテ丸善爲替店カ自ラ有限責任ナルヲ明示シタリト見ルヘキ證據ナシト說明シナカラ縣廳ノ認可ヲ受ケタル上ハ社中私ニ申合セタル規約ニアラス云々其共同組織ヲ認メテ之レト契約スル上ハ隨テ右規約ヲモ承認シテ取引シタルモノト爲サハルヲ得スト判定シ且明示ヲ受ケサル他人ニ對シ却テ本會社ノ有限責任ニアラスシテ無限責任ノ立證ヲ爲サハルヘカラサル責アルカ如ク被



控訴人即チ上告人ハ一モ其無限責任ナリトノ證據ヲ提出セスト論定シタルハ法則ヲ不當ニ適用シ舉證ノ責任ヲ顛倒シタル不法アルモトス

●公正證書 證據ノ効力

公正證書ハ擅ニ調製シ得ヘキモノニ非ルヲ以テ一方カ認メサレハ

トテ證據ノ効力ヲ失ハス 明治十九年法律第二號公證人規則

賴母子講掛金請求ノ件

明治廿四年民第九號  
明治廿五年一月廿三日判決

第一審 浦和地方裁判所

第二審 東京控訴院

上告人

日出間五兵衛

訴訟代理人 鹽入太輔

被上告人

大河内善三

訴訟代理人 三家重三郎

日出間五兵衛ヨリ大河内善三ニ係ル賴母子講掛金請求事件ニ付明治廿四年五月廿日東京控訴院カ言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部

破毀ノ申立ヲ爲シ被上告人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

判決主文

東京控訴院カ本件ニ付言渡シタル判決ヲ破毀シ更ニ辯論及ヒ判決ヲ爲サシムル爲メ東京控訴院ニ差戻ス

理由

上告第二論旨タルヤ原裁判所カ控訴人ハ甲第二號以下ノ證明書ヲ提供シテ其主張スル所ヲ貫徹セントスルモ此等ノ證據ハ被控訴人カ認メサルノミナラス實ニ控訴人ニ於テ本訴ノ爲メ作爲シ得ルモノナレハ採用スヘキモノニアラストノ理由ニ依リ甲第三號證タル一乃至八ノ公正證書ヲ卻ケシハ證據法ニ背ク不法ノモノト云フニ在リ仍テ審案スルニ原裁判ハ法律ニ違背シテ事實ヲ確定セシ不法アルモノトス何トナレハ公正證書ノ如キハ一方カ認メサレハトテ證據ノ効力ヲ失フヘキモノニアラス亦タ擅ニ調製シ得ヘキモノニモアラサルニ右等



ノ理由ニ依リ右公正證書ヲ卻ケ以テ本案講會ハ進行シ了ラサルモノト判定シタレハナリ依テ原裁判破毀スヘキ原由アリトス  
但本文ノ如ク原裁判ノ要部ニ不法アリ破毀スル上ハ他ノ論告ニ對シテハ別ニ辯明ヲ要セス

●檢眞 私署證書 舉證者

相手方ニ於テ私署證書ヲ認メサル場合ニハ必ス民事訴訟法ノ謂ユル檢眞ノ申立ヲ爲サ、ル可ラス只對照スヘキ書類ヲ提出シテ本證書ノ眞正ナルヲ陳辯スルヲ以テ檢眞ノ申立ヲ爲シタルモノトハ云フ可ラス民訴三五二條  
相手方ニ於テ證書ヲ認メサルニ舉證者ニ於テ檢眞ノ申立ヲ爲サ、ル以上ハ法律上其證書ハ證據ノ効力ナキモノトス民訴三五二條  
舉證者ニ於テ檢眞ノ申立ヲ爲サ、レハ對照ノ書類ヲ提出セシトテ

裁判所ハ進ンテ檢眞スヘキモノニ非ス民訴三五二條

貸金請求ノ件 明治廿四年民第百廿九號  
明治廿五年一月廿六日判決

第一審 名古屋地方裁判所 第二審 名古屋控訴院

上告人 小山 佐吉 訴訟代理人 伊東 旭

被上告人 太田九左衛門

小山佐吉ヨリ太田九左衛門ニ係ル貸金請求事件ニ付名古屋控訴院カ  
明治廿四年六月十九日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ノ  
申立ヲ爲シタリ

判決主文

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告第一論旨タルヤ上告人カ乙第一二號證ノ眞否如何ノ判定ヲ請フ  
爲メ被上告人ニ於テ確認セシ乙第三四號證ヲ對照ノ材料トシテ提出



シ乙第一二號證ノ真正ナルコトヲ申立且ツ之レヲ論辯セシハ即チ民事訴訟法ノ所謂檢眞ノ申立ニ外ナラサルナリ然ルニ原裁判所カ宜ク先ツ之レカ檢眞ノ申立ヲ爲サ、ル可カラズ然ルニ事茲ニ出テスシテ證據方法ヲ拋棄シタル者ナレハ個ハ採テ用テ甲第一二號證ノ反證ト爲スニ足ラスト判定セシハ申立タル檢眞ノ事實ト法意ヲ誤認シテ檢眞ヲ爲サス又受ケタル訴旨ノ判定ヲ爲サ、リシ不法アリト云フニ在リ依テ訴訟記録ヲ審査スルニ乙第一二號證ハ乙第三四號證ト同筆同印ナルコト一目瞭然ナリト論辯セシニ止リ印影ノ如キハ第一審ニ於テ已ニ鑑定ニ附セラレ確實ノモノトナリアルニ付鑑定ヲ要セストノ申立アルアリテ檢眞ノ申立ヲ爲シタル事蹟ナシ蓋シ訴訟法ノ規定スル檢眞ノ申立ハ一種ノ特法ナルニ付私署證書ノ如キハ相手方ニ於テ認めサル場合舉證者ニ於テ尙ホ之レヲ以テ有効ノモノニ爲サントスルニハ特ニ檢眞ノ申立ヲ爲サ、ルヘカラサルナリ然ラハ對照スヘキ書類

ヲ提出シテ本證書ノ真正ナルコトヲ陳辯スルモ檢眞ノ申立ヲ爲シタルモノトハナラサルナリ依テ原裁判所カ檢眞ノ申立ナキニ付右乙第一二號證ヲ甲第一二號證ノ反證ト爲スニ足ラストシテ之レヲ卻ケシハ固ヨリ不法ニアラストス  
同第二論旨タルヤ原裁判所カ乙第一二號證ニ付テハ第一審裁判所ニ於テ鑑定ヲ爲サシメタルコトアルモ未タ其筆蹟ニ付鑑定ヲ爲サシメサル者ナレハ果シテ真正ノ證書ナリト看認め得ヘカラスト判定セシハ理由ノ不備ナリ何トナレハ未定ノ筆蹟ヲ以テ既定ノ印影ヲ何故無効ト爲スカ是レ其理由ヲ明示セサレハナリ又縦シ筆蹟カ自筆ニアラサルモ印影カ同一ナル以上ハ之レカ盜用若クハ偽造ノ證據ナケレハ真正ノモノト見ルヘキモノニテ上告人ハ第一審以來自筆ナルコトヲ論争セシニモ拘ラス原裁判所カ筆蹟ノ眞否如何ヲ判定セスシテ右等不當ノ理由ヲ附シ以テ乙第一二號證ヲ卻ケシハ緊要ナル理由ヲ附セサル



モノト云フニ在レト下級審ニ於テ印影ノ鑑定ヲ爲サシメ之レヲ真正ノモノト判定セシトテ上級審ハ之レニ羈束セラルヘキモノニアラサルニ付相手方ニ於テ之レヲ認メス亦タ舉證者ニ於テ檢眞ノ申立ヲ爲サハル以上ハ法律上證據ノ効驗ナキニ付縱シ印影カ同一ナリトスモ原裁判所カ之レヲ反證トシテ採ラサリシハ固ヨリ當然ナリトス同第三論旨タルヤ乙第三四號證ハ對照ノ爲メ提出セシモノナルニ付必要トスル場合ニ於テハ之レト對照シテ本證ノ筆跡ヲ鑑定ナサシムヘキ筋合ナルニ原裁判所ハ之レカ對照モナサス亦タ鑑定ヲ必要トセサルヤ否ヤヲモ審究セサリシハ提出セシ證據ヲ不問ニ措キタル不法アルノミナラス要點ノ審理ヲ盡サハル不法アリト云フニ在レト對照ノ書類ヲ提出セシトテ裁判所カ進ンテ檢眞スヘキモノニアラサルニ付舉證者ニ於テ檢眞ノ申立ヲ爲サハレハ提出セシ書類ハ何等ノ効力ナク提出セサリシト敢テ異ナルヲナシ仍テ右乙第三四號證ヲ不問ニ

附セシハ固ヨリ當然ナリトス

同第四論旨タルヤ原裁判所カ乙第三四號證ヲ不問ニ附シ判文前段ニ於テ第一審裁判所ノ鑑定ヲ卻ケ乙第一二號證ヲ真正ノモノト看認メ得ヘカラスト判定シ同後段ニ於テ證據方法ヲ拋棄シタルモノト判定セシハ事實理由ニ齟齬アル不法ノ裁判ナリト云フニ在レト本論告ハ畢竟原判文ノ一部ヲ摘ミ強テ事實理由ニ齟齬アリト云フニ過キサルモノトス何トナレハ原判文全体ノ趣旨ハ之レヲ要スルニ第一審ニ於テ乙第一二號證ノ印判ハ鑑定ナサシメシアルモ之レカ筆蹟ノ鑑定ハ爲サシメタルニモアラサレハ未タ真正ノモノト定リシニモアラサレ被上告人ニ於テ之レヲ認メス上告人ハ之レカ檢眞ノ申立ヲ爲サハルニ付證據トナスノ効驗ナシト判定セシニ外ナラサレハナリ同第五論旨タルヤ原裁判所カ乙第一二號證ニ付證據ノ方法ヲ拋棄シタルモノト判定セシナレト證據方法ノ拋棄ハ民事訴訟法第三百五十



條ノ明文ニ於ケルカ如ク相手方ノ承諾アルニアラサレハ之レヲ拋棄スルヲ能ハサルモノニテ上告人ハ之レカ承諾ヲ求メタルヲナク却テ右乙第一二號證ニ依リ始終論争セシナリ然ラハ原裁判所カ輒ク之レヲ拋棄シタルモノト判定セシハ事實ニ反シ法律ニ違背シタル不法ノモノト云ハサルヲ得スト云フニ在レト原裁判所カ證據方法ヲ拋棄シタリト云シハ固ヨリ穩當ナラサルモ其趣旨ハ訴訟法ノ第三百五十條ニ云フ拋棄ニアラス即チ上告人カ進ンテ檢眞ノ申立ヲ爲スヘキ處之レヲ爲サ、リシトノコニ外ナラサルナリ依テ本論告ハ上告ノ理由ト爲スニ足ラサルモノトス

●社寺 要式 請求ノ目的 一事再理

社寺ノ爲メニ金穀ノ借入等ヲ爲スルハ必ス氏子檀家ト協議シ總代二名以上ノ連署ヲ要ス此等ノ要式ヲ缺キタルモノハ無効ナリ

明治十年

布告第四十三號

同一事件ニテモ請求ノ目的ヲ異ニスレハ一事再理ニアラス

貸金請求ノ件

明治廿四年民部第百九十六號  
明治廿五年一月二十八日判決

第一審 金澤地方裁判所 第二審 大阪控訴院

上告人 野口孝二郎 訴訟代理人 朝倉外茂鐵

被上告人 淺田 順證 訴訟代理人 横田 虎彦

野口孝二郎ヨリ本願寺金澤別院知堂淺田順證ニ係ル貸金請求事件ニ付大阪控訴院カ明治廿四年四月廿九日言渡シタル判決ニ對シ上告代理人ヨリ全部破毀ノ申立ヲ爲シ被上告代理人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

判決主文

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由



上告第一點ハ明治十年第四十三號ノ布告タル寺院ヲ保護スルノ精神ニ出タルモノニシテ僧侶ノ所業ノ爲メ寺院ヲシテ不測ノ義務ヲ負ハシメ遂ニ寺院ノ衰頽ヲ來タスアラントテ慮リ特ニ該布告ニ依リ實ニ寺院ノ負債タルコトノ明カナルトキニ於テノミ寺院ヲシテ其責ヲ負ハシムルモノナリ本件貸金ノ如キ寺院ノ用ニ供シ寺院ハ其借金ニヨリ現ニ其所有ニ屬スル廟所等ヲ建築シタル場合ニ於テハ該布告ヲ適用スヘキ必要ナク若シ之レヲシテ僧侶ノ私借トシ寺院カ返金ノ義務ヲ免カレ得ヘシトセハ寺院ハ不當ノ利益ヲ得ルニ至ルヘシ然ルニ原控訴院ハ本案ヲ寺院ノ負債ト認メナカラ尙ホ四十三號布告ニ依リ僧侶ノ私借ト見做シタルハ法則ヲ不當ニ適用シタル不法アリト云フニ在レトモ原判文ニハ唯當時ノ知堂幡山教圓於テ講中等ト謀リ廟所建築ノ費用ニ充當セシ借金ナルヤ稍認メ得ヘシト雖モ云々トアリテ當時ノ知堂ト講中トカ協議シ別院内ニ一ノ廟所ヲ建築シタル借金ナルハ

稍認メタルモ本願寺別院カ之レヲ借用シ其院ノ爲メニ費用シタル借金ナリトハ明認セサルノミナラヌ明治十年第四十三號ノ布告ヲ閱メルニ神社并ニ寺院ニ於テ其社寺ノ爲メ云々必ス氏子檀家ト協議シ總代二名以上ノ連署ヲ要スヘシ若シ此連署ナキトキハ云々其効ナキモノト爲スヘシ即チ寺院ノ爲メニセサルモノハ言ヲ俟タヌ寺院ノ爲メ借入ル、モ檀家總代二名以上連署ノ要式ヲ缺クトキハ無効タルコトヲ規定セラレタルニ在レハ原裁判所カ判文上半ニ於テ金澤別院カ檀家ヲ有シ其總代三名ヲ選ミ所轄廳ニ届出アルコトヲ判定シ甲號證ニハ其連署ナク十年四十三號布告ノ要式ヲ缺クモノナリトシテ上告人カ金澤別院即チ被上告人ニ對スル請求ヲ斥ケタルハ法則ヲ不當ニ適用シタルモノニアラストス

上告第二點ハ原裁判所ハ本件貸金ヲ金澤別院ノ事業ニ充當セシヲ認メシニモ拘ハラヌ知堂ノ私借ト爲シタルハ前後矛盾ノ認定ナリト云



フニ在レトモ甲號證カ十年第四十三號ノ要式ヲ缺キ寺院ニ對シ得ヘ  
 ヤモニアラサル等ハ前條ノ辯明ヲ以テ理會スヘシ已ニ寺院ニ對シ  
 請求スルヲ得サル以上ハ該布告ノ明文即チ僧侶ノ私債ト看做ストア  
 ルヲ以テ原裁判カ之レヲ援キ所謂僧侶ノ私債ト看做スヘキモノニシ  
 テ云々ト説明シタルハ前後矛盾ニアラス

上告第三點ハ甲號附屬返濟方法書ニ教圓ノ後任即チ被上告人ノ前知  
 堂中野實玄カ連署シテ甲號負債ヲ承認シ又甲第六號證ノ如ク講中總  
 代ヨリ本願寺ニ對シ該負債返却方法ニ付差出シタル書面ニ指令ヲ與  
 ヘタルハ本山モ亦甲號負債ヲ承認シタル次第ニ付本山ノ承諾及ヒ前  
 知堂ノ承認ハ本案必要ノ爭點ナルニ何等ノ判決ナキハ不法ナリト云  
 フニ在レトモ前知堂中野實玄ノ爲シタル返濟方法書ノ調印モ當時ノ  
 本願寺別院知堂幡山教圓ノ甲號證調印ト同シク檀家總代ノ承諾アル  
 ニアラサル以上ハ共ニ是レ十年第四十三號布告ナル要式ノ缺ヲ補ヒ

得ヘキニアラスシテ唯後職ノ僧侶カ之レヲ承認シタリト云フニ過キス  
 又甲第六號證ノ如キモ廟所建築負債ニ付債主ノ催促甚シク諸講協議  
 スルモ云々負債總額六分ノ一貸下云々ノ請願ニ對スル書面伺ノ趣知  
 堂中野實玄歸院ノ上處理可爲致義ト心得ヘシトノ指令ニ外ナラスシ  
 テ本山カ甲號證ノ義務ヲ承認シタリトハ言フヲ得可カラサルノミナ  
 ラス原裁判ハ甲號證ハ有効ナル寺院ノ貸借ナリヤ否ヲ判示シ十年第  
 四十三號ノ要式ヲ缺クヲ以テ寺院ニ對シテハ無効ナリト判決シタル  
 ニ在レハ後職知堂ノ返濟方法書調印及ヒ本山ノ指令等迄ヲモ説明ス  
 ヘキ要ナキナリ要スルニ本論告ハ己レ先ツ必要ナリト決シ以テ證據  
 ノ説明ナキヲ非議スル上告適法ノ理由ナキモノトス  
 上告第四點ハ甲號證ニ入江佐兵衛外三名ノ連署シタルハ講中總代ノ  
 資格アルニ依ルノミナラス入江佐兵衛外二名ハ廟所建築ニ付建築係  
 出納係ノ任ニ當リタルモノニシテ該係ハ甲第八號證ノ如ク知堂并ニ



檀家總代協議ノ上命シタルモノナレハ是レ等ノ連署ハ結局檀家總代ヲ代表シ委任中ノ行爲ヲナシタルモノト云フ可シ故ニ知堂ト共ニ入江佐兵衛等ノ連署シタル甲號證ハ其功力檀家總代ノ連署ニ等シキヤ否ハ尤必要ノ争點ナルニ何等ノ判決ナキハ不法ナリト云フニ在レトモ果シテ檀家總代ノ協議ニ出タル建築ニシテ金圓ヲ貸與スルトセハ上告人ハ何カ故ニ十年第四十三號ノ布告ニ從ヒ其檀家總代ノ連署ヲ求メサリシヤ又建築係等ノ命シ方ニ付檀家總代カ其協議ニ預リタリトスル之レヲ以テ寺院ノ爲メ他ヨリ借金スルコトモ承認シタリトハ視ルヲ得サルヘシ要スルニ原裁判ハ該布告ノ要式ヲ缺キタル甲號證ハ寺院ニ對スル有効ノモノニアラストノ相當ノ判定ヲ與ヘタル以上其連署人カ檀家中總代ノ協議ニ依リタル建築係出納係ナルヤ否ヲ判スヘキノ要ナキナリ是レ亦前條ト同シク已レ先ツ必要ノ争點ナリト決シ以テ原裁判ノ説明ナキヲ非議スル上告適法ノ理由ナキモノトス

トス  
上告第五點ハ本件甲號證貸金ノ利子支拂ニ付争論ヲ生シ甲第八號證ノ如ク裁判ヲ受ケ即チ甲號證ノ義務ハ金澤別院ノ負擔スヘキモノナリトノ裁判確定シタルニ拘ハラス原裁判ハ同一事件ニ對シ再ヒ前裁判ノ主旨ニ背反シタル判決ヲ與ヘタルハ一事再理ノ原則ニ反スル不法アリト云フニ在レトモ前裁判ト本件トハ請求ノ目的ヲ異ニセリ即チ前訴訟ハ利子ノ請求ニシテ本件ハ元金ノ請求ナレハ目的同一ナリト言フヲ得ス果シテ前裁判ヲ確定シタリトシテ再ヒ訴求スルヲ得ストセンカ前裁判ハ以テ元金償還ノ執行ヲ爲シ得サル論ヲ俟タサレハ本件元金ノ償還ハ何レノ道ニ依リテ求メ得可キヤ一事再理ナリトノ論告ハ採用スルヲ得サルモノトス

●實家復歸 戶籍上父子ノ關係 親屬 不論罪



實父實家ニ復皈シ戸籍上父子ノ關係消滅スルモ父子ハ天然上消滅シ得ヘキ道理ナキヲ以テ其父ニ對シ詐欺取財ノ所爲アルモ親屬ニ係ルトシテ其罪ヲ論セス刑一四條三九條三九八條

拐帶ノ件 明治廿五年刑第二十二號  
明治廿五年二月一日宣告

第一審 長崎地方裁判所平戸支部 第二審 長崎控訴院

被告 野島邦治

右邦治カ拐帶被告事件長崎地方裁判所平戸支部ノ裁判ニ對シ檢事ヨリ控訴ヲ爲シタルニ付明治廿四年十一月三十日長崎控訴院ニ於テ審理ノ未被告ハ曾テ自家ノ養子トナリ後チ離縁シテ實家ニ復皈シタル村上磯治ハ自己ノ實父ナルヲ以テ同人ニ便リ蟬行商ノ爲メ磯治ニ從ヒ長崎縣北松浦郡御厨村ヨリ東彼杵郡早岐村ニ立越シ磯治ノ申付ニ依リ賣掛金取立ノ爲メ明治廿四年九月三十日同郡崎針尾村ニ於テ磯治ニ別レ同人所有ノ支那革盤外三十九品ヲ携ヘ蟬行商ヲ爲シ居ル中

鳴原小鯛等ニ於テ取集メタル賣掛金六圓并ニ右品々ヲ携ヘタル儘逃走シタルノ事實アリト爲シ其所爲刑法第三百九十五條第三百九十條第三百九十四條ニ該當スルモ畢竟實父子間ノ所爲ニ係ルヲ以テ同第三百九十八條第三百七十七條ニ依リ其罪ヲ論セサルモノトス因テ原裁判所カ前掲第三百九十八條第三百七十七條ニ依リ其罪ヲ論セスト言渡シタルハ相當ニシテ更ニ取消スヘキ筋ナキヲ以テ刑事訴訟法第二百六十一條ニ基キ本控訴ハ之ヲ棄却スト言渡シタリ  
原控訴院檢事長林誠一ハ右ノ裁判ヲ不當ナリトシ上告ヲ爲スノ要領ハ被告ノ父村上磯治ハ今ヲ距ルコト二十五六年以前被告方野島家ノ養子ト爲リ被告ノ母ト配偶シ被告ヲ擧ケタルモ故アリテ野島家ヲ去リ村上家ニ復籍シタルヲ以テ其當時ヨリ戸籍上父子ノ關係ハ消滅シタルモノナレハ法律上認ムル處ノ父子ニアラサルナリ然ルニ原院ニ於テハ自然上父子ノ關係アリトノ理由ヲ以テ刑法第三百九十八條第三百



七十七條ヲ適用シ其罪ヲ論セサルモノト言渡シタルハ擬律ノ錯誤ナ  
リト云フニ在リ

被告邦治ハ之ニ答辯セス

大審院ニ於テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スル  
左ノ如シ

被告ノ實父磯治ハ其實家ニ復歸シタルノ故ヲ以テ戶籍上父子ノ關係  
ハ消滅シタルカ如ク云フト雖モ其父タリ子タル天然上ノ關係ニ至テ  
ハ爲メニ消滅スヘキ道理アルコトナシ既ニ其關係ノ存スル以上ハ戶籍  
上親屬ノ關係ヲ絶チタルニ拘ハラヌ原院ニ於テ被告カ以上ノ所爲ニ  
對シ刑法第三百九十八條第三百七十七條ヲ適用シ其罪ヲ論スヘキモ  
ノニアラスト爲シタルハ相當ノ判決ニシテ毫モ不法ノ點ナシトス  
以上ノ理由ナルヲ以テ刑事訴訟法第二百八十五條ニ法リ本案上告ハ  
之ヲ棄却スルモノ也

●代人 證書 本人ノ名義 無効

代人ノ作リタル證書ニシテ本人ノ名義ヲ用ヒサルキハ必ス無効ナ  
リトノ規定ナシ

損害要償ノ件 明治廿四年民第二部第二百一號  
明治廿五年二月二日判決

第一審 京都地方裁判所 第二審 大阪控訴院

上告人 伯爵板垣退助 訴訟代理人 野澤雞一

被上告人 深見彦左衛門外一名

訴訟代理人 田村 中正 幸

板垣退助ヨリ深見彦左衛門等ニ係ル損害要償事件ニ付大阪控訴院カ  
明治廿四年四月廿四日言渡シタル判決ニ對シ上告人ハ全部破毀ヲ求  
ムル申立ヲ爲シ被上告人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

判決主文



本件ノ上告ハ之ヲ棄却ス

上告費用ハ上告人之ヲ負擔ス可シ

理由

上告第一要旨ハ被上告人ノ内深見彦左衛門ハ本訴株券ノ保管者ニシテ其返還ノ義務者ナルコトハ甲第一號證文詞ニ依リ明瞭ナルヲ以テ原法廷ニ於テ殊ニ此點ヲ主張シ辯論シタルニ原裁判所カ此點ニ對シ判決ヲ爲サ、ルハ違法ナリト云ニ在リ然レモ原判文理理由第一及ヒ第二ヲ見レハ畢竟甲第一號證ノ地所賣買ハ假粧ニ屬シ本訴株券ハ其實金圓貸借ノ抵當ニ供シタルコト及ヒ深見彦左衛門ハ唯地所賣買ノ假粧ニ干涉シタルニ止マリ金圓貸借ニ與ラサルコトヲ認定シタリ然則其假粧賣買契約中ニ隨伴シ彦左衛門カ本訴株券ノ保管等ニ關スル如キ文詞モ亦其假粧ト認定セシ中ニ包含シタル判旨ナルヲ知ルニ足レリ故ニ原裁判ハ違法ノ判決ニアラス

上告第二要旨ハ内深見彦左衛門ハ實ニ本訴株券ノ受託契約者ナルヲ以テ即チ之レニ受託義務者ノ法則ヲ適用スヘキモノナルニ原判決茲ニ出テサルハ違法ナリト云ニ在レモ原裁判所カ之ヲ眞實ノ受託者ト認メサルコトハ既ニ前項説明ノ如クナルヲ以テ此上告モ亦理由ナキモノトス

上告第三要旨ハ凡ソ代理委任ノ權内ニ包含スヘキ事柄ハ其目的ノ行爲ト相隨伴シテ分離シ得ヘカラサル附屬事項ニ止ルノミ本件島本仲道ノ權限タル株券ニ間違ヲ生シタルニ付其間違ノ引合ヲ爲スト云ニ在リテ即チ其間違ヲ詰責シ其辯疏ヲ聽取スルノ外尙回復ノ方案ヲ講スルニ止マリ決シテ終決ノ處置ヲ斷行シ又ハ若干ノ勘辨ヲ加ヘ若クハ委任者ノ利益ヲ減殺スルノ權限アラサルコト明白ナリトス然ルニ原裁判所カ引合ノ語タル極テ汎ク臨機事ヲ處スルカ如キモ亦當然之ヲ包含シ得ヘカラサルモノニアラスト説キ去リ仲道カ爲シタル終結ノ



處置示談勘辨及ヒ免除改約等ノ一ハ其受任權内ニ包含スト判定シタルハ違法ナリト云ニ在リ然レモ原裁判所ハ其判文ノ如ク乙第一號證ノ文詞ニ依リ其意義ヲ解釋シ尙且ツ當時ノ事實ニ考ヘ既ニ株券ヲ賣却シ去ラレ現物存在セサル場合島本仲道其人ヲ引合人ニ選任シタル狀況等ヲ斟酌シ以テ乙第二號證乙第三號證ノ行爲ハ其受任權内ニ屬セサルヲ判定シタルモノニシテ要スルニ證書ノ解釋及ヒ事實ノ斷定ニ歸シ毫モ違法ノ判決ニアラストス

上告第四要旨ハ島本仲道ノ所爲タル二人ノ義務者ヲ無資力者一人ニ減シ而テ確實ナル物件ハ不確實ナル貸金證文ニ變更シ且其金額ハ物件ノ價直ヨリ減下シタルヲ以テ委任者タル上告人ニ莫大ノ損失ヲ與ヘタルモノナルニ原裁判所カ此ノ如キ不利益ノ一ヲモ其受任權内ニ屬セリト判定シタルハ違法ナリト云ニ在リ然レモ原裁判所ハ元來義務者ハ被上告人ノ内深見彦四郎一人ニシテ彦左衛門ハ義務者ニアラ

スト認メタルモノニシテ此ノ斷斷カナル以上ハ仲道カ引合上告四郎一人ヲ義務者トシタルハ固ヨリ當然ノ筋合ニシテ更ニ上告人ニ不利益ヲ生セシモノト謂ヘカラス且ツ原法廷ノ辯論調書ヲ見ルニ貸金證書ニ變更シタルニ依リ特ニ損失不利益ヲ受ケタリトノ論争ヲ提出シタリト認ムヘキ所ナシ而シテ不利益ナルヤ否ハ要スルニ事實問題ナルヲ以テ今更之ヲ依據トシテ原判決ヲ攻撃スルヲ得サルモノトス上告第五要旨ハ乙號數證ニ委任者ノ名義ヲ用ヒサルハ成規ニ違ヒタルモノナルニ原裁判所カ之ヲ以テ上告人ニ對抗スヘキ證書ナリト判定シタルハ違法ナリト云ニ在レモ代人ノ作リタル證書ニシテ本人ノ名義ヲ用ヒサルハ必スシモ無効ナリトノ現行規定アルヲナシ而シテ原裁判ハ他ノ理由ニ依リ上告人ニ對シ有効ナリト認定シタルモノナルヲ以テ毫モ違法ノ判決ニアラス

以上ノ理由ナルヲ以テ本件ノ上告ハ棄却スヘキモノトス但上告人ノ



住居ニ關シ被上告人ヨリ上告期間經過ノ抗辯アリト雖モ既ニ上告ノ理由ナキ上ハ此點ニ付論究ヲ要セス

● 姦通罪

姦通者ノ一方死去スト雖モ殘リノ一人ハ爲メニ其罪體及ヒ公訴權消滅セス乃チ姦通罪ハ二者相須テ一罪ヲ構成スト云フト雖モ其罪ノ成否ハ必スシモ二者ノ同存ヲ要セス

姦通ノ件 明治廿四年刑第四百七十八號  
明治廿五年二月四日宣告

第一審 和歌山地方裁判所 第二審 大阪控訴院

被告

南方 喜代楠

明治廿四年十一月十二日大阪控訴院ニ於テ右喜代楠カ姦通被告事件ニ付和歌山地方裁判所ノ判決ニ對スル同裁判所檢事ノ控訴ヲ審理シ被告人ハ辻庄次郎妻トクノ有夫ノ婦タルヲ知リナカラ之ト姦通シ

タル所爲アリト判定シ其所爲ハ刑法第三百五十三條ヲ適用シ六月以上二年以下ノ重禁錮範圍内ニテ處斷スヘキモノナリ然ルニ第一審裁判所ニ於テ姦婦トクノカ和歌山縣監獄ニテ死去シタルヲ以テ公訴權消滅シタルモノト認メタレモ姦通罪ハ相姦者一方ノ死去ニ依テ公訴權消滅スルモノニアラス故ニ刑事訴訟法第二百六十一條ニ從ヒ第一審裁判ヲ取消シ被告人ヲ重禁錮六月ニ處スト言渡シタル第二審ノ判決ヲ不法ナリトシ大阪控訴院檢事豊原基臣及ヒ被告人喜代楠ハ各上告ヲ爲シタリ檢事上告ノ要旨ハ原判文ニ認メタル姦婦トクノカ死去セシ際本案審理ノ進行ハ豫審中ニテ未タ終結決定ニ至ラサル場合ナレハ犯姦ノ實否ハ最モ不明瞭ナル時期ナリトス而シテ姦通罪ハ其性質他罪ト異ナリ二者相俟テ一罪ヲ構成スルモノナレハ裁判確定前被疑姦婦死去シタルトキハ即チ姦通罪ノ元素ヲ缺キ其罪體消滅シタルモノナリ若シ此場合ト雖モ被疑姦夫ヲ罰センカ確的ノ罪證ナク且



被疑姦婦タル死者カ生存中裁判前ニ辯護スルヲ得サリシニ拘ラス其罪ヲ犯シタルモノトシ不洗ノ汚辱ヲ被ラシムルモノナリ故ニ本案姦通罪ハ全ク成立セス公訴權ノ消滅スルモノナルニ有罪ノ判定ヲ爲シ處罰シタルハ擬律錯誤ノ裁判ト思料シ破毀更正ヲ求ムト云フニアリ

被告人喜代楠カ上告ノ要旨ハ本案犯姦罪ノ如キハ二人以上ニアラサレハ構成スル能ハサルモノナリ而シテ被告ノ一人タル辻トクノハ和歌山地方裁判所豫審廷ニテ姦通罪ヲ犯セシコトナキ旨ヲ主張辯明シタル後死去セシモノニテ被告モ未タ曾テ犯罪ヲ自白セシコトナキニ不適當ナル證人ノ陳述ヲ採テ罪ヲ斷定シタルハ違法ノ裁判ナリト云フニアリ

大審院ニ於テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ式ヲ履行シ檢事上告ノ要旨凡ソ姦通罪ハ其性質他罪ト同シカラス二者相須テ始メテ一罪ヲ構成スル者ナレハ裁判確定前被疑姦婦死去スルニ於テハ即チ姦通罪ノ

要素ヲ缺キ罪體消滅シ隨テ公訴權モ亦消滅スト云フニ在リ之ヲ審按スルニ刑法第三百五十二條犯姦罪ノ法章中二者生存ニアラサレハ一方ヲ罰スルヲ得サルノ意義アルコトナシ然ラハ則相姦者一方ノ死亡ニ由リ罪體若クハ公訴權ノ消滅セサルヤ太々分明ナリ且ツ犯姦罪ノ二者相須テ一罪ヲ構成スルハ檢事上告論旨ノ如シト雖モ其成否如何ヲ判斷スルニ方リテハ必ラスシモ二者同存ヲ要セサルナリ設令一人死亡セシトテ他ノ一人ニ對スル公訴權消滅ニ歸セサルニ由リ他ニ充分ナル證憑アラハ當然之ヲ處斷ス可キモノトス仍テ上告適法ノ理由ト爲ス能ハサルナリ

被告人上告ノ要旨ヲ按スルニ前段ハ檢事上告ノ趣意ニ異ラサレハ茲ニ再ヒ説明ノ要ナク後段ハ事實認定ノ批難ナレハ是亦適法上告ノ理由トナラス

右ノ理由ナルヲ以テ刑事訴訟法第二百八十五條ニ從ヒ本上告ハ之ヲ



棄却スル者也

●期日 無効 戸籍ノ移動 辨償ノ義務 新ナル

請求 不利益ノ變更

民事訴訟法第二百三十三條ノ但書ニ其期日ハ七日ヲ過ルコトヲ得  
ス「トアルハ畢竟裁判所ヲシテ之ヲ守ラシムル規定タルニ過キサレ  
ハ七日以後ニ裁判ヲ言渡シタレハトテ其裁判ヲ無効ナラシムヘキ  
法條ニアラサルカ故ニ上告ノ理由トナラス 民訴第二  
三三條  
債務ヲ負ヒシ後退隱シテ戸籍ヲ移動スルモ依然其地ニ在テ從前ノ  
業務ニ從事スルキハ爲メニ辨償ノ義務ヲ免ルハ「ヲ得ス  
新ナル請求アルキハ民事訴訟法第四百十六條同法第九十六條第  
二號ニ據テ採用セサル可ラス而シテ其申立印紙貼用等ノ法式ヲ缺  
キタルモノヲ採用シ前審ノ判決ヲ對手人ノ不利益ニ變更シタルハ

不法ノ裁判ナリ

貸金請求ノ件

明治廿四年民第九十一號  
明治廿五年二月四日判決

第一審 函館地方裁判所

第二審 函館控訴院

上告人

柿本作之助

訴訟代理人 武藤浪重

被上告人

松岡讓

松岡讓ヨリ柿本作之助ニ係ル貸金請求事件ニ付函館控訴院カ明治廿  
四年五月廿六日言渡シタル裁判ニ對シ上告代理人ヨリ全部破毀ノ申  
立ヲ爲シ且被上告人ハ期日ニ出頭セサルヲ以テ欠席ノ儘裁判アリタ  
キ旨ヲ申立タリ

判決主文

原裁判ノ一部ヲ破毀シ其他ノ上告ハ之レヲ棄却ス  
上告人ハ被上告人ニ對シ金千百六拾六圓ヲ返還スヘシ  
上告ニ係ル訴訟費用ハ被上告人ノ負擔タルヘシ



棄却ノ理由

八十六

上告第一點ハ原裁判所カ本件口頭辯論ヲ終結セラレタルハ明治廿四年五月十四日ナルニ十二日間ヲ經過シタル其廿六日ヲ以テ判決ノ言渡ヲナシタルハ民事訴訟法第二百三十三條ニ判決ハ云々但シ其期日ハ七日ヲ過ルコトヲ得ストノ規定ニ背キタル違法ノ裁判ナリト云フニ在レトモ該但書ハ裁判所ヲシテ守ラシムヘキ規定タルニ過サレハ原裁判所カ口頭辯論終結以後該法ノ定メタル七日以内ニ判決ヲ言渡サス又ハ七日ヲ經過シ口頭辯論ノ再開ヲモ爲サスシテ判決ヲ言渡シタリトセハ或ル場合其職務トシテ責ヲ負フコトアルヘキモ七日以内ニ言渡ヲ爲サレハ裁判ヲ無効ナラシムヘキ法條ニアラサルカ故本論告ハ上告ノ理由ナキモノトス

上告第二三點ハ之レヲ要スルニ上告人ハ本件負債後隱居シテ柿本家ノ家名ト財産トハ長女ヨシニ相續セシメ柿本作右衛門ノ死跡相續ヲ

爲シタルモノナレハ戸主中ノ權利義務ハ其相續人即チヨシニ移ルヘキハ民法上ノ習慣ナルノミナラス原判文ニ單ニ退隱云々ノ事ノミヲ以テ其義務ヲ免ル、ヲ得可ラストアレトモ何故戸主中ノ負債ヲ相續人ヨシカ負擔スヘキモノニアラサルカ何故別戸異産ノ他家ヲ相續シタル上告人ニ其義務アリヤ是レ等主要ノ點ニ對シ理由ヲ示サル、コトナキハ一ハ民法上ノ習慣ニ悖リ一ハ裁判ノ理由ヲ欠キタル不法アリト云フニ在レトモ原裁判ハ上告人カ本件ノ負債ハ商業ノ引負ヒナルヲ認メ而シテ現時ニ至ルモ尙ホ函館ニ在留シ依然仲買商ニ従事スルヲ以テ本籍和歌山縣下ノ戸籍ノ移動即チ退隱云々ノ事ノミニ依リ其自身カ設定シタル負債辨償ノ義務ヲ免カル、ヲ得ストノ判旨即チ事實上甲第一二號證ノ義務ハ上告人ノ負擔ヲ免カル、ヲ得ストノ裁判ニ外ナラサレハ理由ヲ欠クト云フヘカラサルハ勿論民法ノ習慣ニ悖ルトノ論告ハ其當ヲ得タルモノニアラストス

八十七



破毀ノ理由

上告第四五點ハ之レヲ要スルニ被上告人ハ甲第二號證金額中明治廿四年三月ヨリ六月迄即チ月賦ノ到達セサル八拾四圓ヲ除キ甲第一號證ト併セテ一千百六十六圓ヲ請求シタルヤ訴狀ニ明記シタル如ク又第一審ノ裁判モ一千百六拾六圓ノ辨償ヲ命シタルヤ其判決ノ如シ而シテ上告人カ控訴スルヤ曾テ被上告人ハ附帶ノ控訴ヲ爲シタルナキニ原裁判所カ第一審ノ判決ヲ上告人ノ不利益ニ變更シ一千二百五拾圓ヲ返濟スヘシト判決セシハ不法ナリ良シ新タナル請求ナリトセシカ第一審ニ提出シ能ハサルモノニアラサルノミナラス之レカ請求ヲ爲スヤ適法ノ申立ニ出サルヘカラサルヲ其事ナキニ採用セラレタルハ不法ナリト云フニ在リ依テ按スルニ被上告人カ第一審ニ提起シタル請求ハ金一千百六拾六圓ナルヤ其訴狀及ヒ調書上明カナル所ニシテ第二審ニ至リ甲第二號證ノ明文ニ基キ一千二百五拾圓ヲ請求シ

タル其調書ニ記載アル所ナリ故ニ新ナル請求即チ本案又ハ附帶請求ニ付訴ノ申立ヲ擴張スルモノトセハ民事訴訟法第四百十六條同法第四百九十六條第二號ニ依リ第一審ニ於テ提出シ能ハサルコトヲ説明スヘキ限リニアラサルモ其訴ノ申立ハ印紙ノ貼用即チ適法ノ申立ニ出サル可ラサルニ原訴訟記録中其之レアルヲ見ス左レハ原裁判所ハ被控訴人カ爲シタル無効ノ申立ヲ採用シ第一審ノ判決ヲ上告人ノ不利益ニ變更シタル不法ヲ免カレサルモノトス而シテ右ノ事實ハ以上ノ如ク確定シアリ事件ハ裁判ヲ爲スニ熟スルヲ以テ民事訴訟法第四百五十一條第一ニ照シ本院ニ於テ裁判ヲ爲スモノナリ

●立證 排斥ノ理由 違法ノ裁判

凡ソ立證ヲ斥クルニハ必ス排斥ノ理由ヲ付セサル可ラス若シ之ヲ付セサルハ違法ノ裁判ナリ



抵當附預ケ時計并ニ過剩金取戻ノ件 明治廿四年民第七月五號明治廿五年二月

四日判決

第一審 東京地方裁判所 第二審 東京控訴院

上告人 川添眞政 訴訟代理人 飯田孝平 助

被上告人 大野徳太郎後見人小松保

全 大野清光 訴訟代理人 今井千代松

川添眞政ヨリ大野徳太郎後見人小松保外一名ニ係ル抵當附預ケ時計并ニ過剩金取戻事件ニ付東京控訴院カ明治廿四年六月十六日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告人大野清光ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シ又上告人ハ被上告人小松保ニ對スル判決モ同人闕席ノ儘言渡シアランコトヲ請求シタリ

判決主文

東京控訴院カ本件ニ付言渡シタル判決ヲ破毀シ更ニ辯論及判決ヲ爲

サシムル爲メ同院ニ差戻ス

理由

上告論旨中甲第二號及第三號證ノ明文ニ據リ本訴ノ時計ハ上告人ノ所有ニシテ被上告人ハ其預リ人ナルコトヲ論證シタルニ原裁判所ハ單ニ其證左ナキ事ノミ説去リ右ノ明文ニ對シテ何等ノ理由ヲ付セス且ツ本訴ノ過剩金ハ手數料及ヒ車賃等ニ支辨シタリトノ斷定ニ付其證據理由ヲ示サ、ルハ共ニ違法ノ裁判ナリトノ攻撃點ニ付審案スルニ甲第二號證ニハ上告人ノ依頼ニヨリ時計拂下ノ爲メ其代金ヲ上告人ヨリ受取タル旨ノ明文アリ又甲第三號證ニハ上告人ノ所有ナル時計ヲ其改造修覆ノ爲メ預リタル旨ノ明文アリ然ルニ原判文ニハ其實被控訴人<sup>上告</sup>一己ニテ遞信省ヨリ拂下ヲ受ケタリトノ證左ナキコトノ一語ヲ以テ右ノ明文アル立證ヲ斥ケ而シテ排斥ノ理由ヲ明示セサルハ違法ノ裁判ナリトス何トナレハ右明文ノ効力如何ニ付本訴物件



所有權ノ歸着ニ關シ大影響ヲ生スヘキ筋合ナルニ原裁判所ハ曾テ何等ノ立證モナカリシモノ、如ク説キ去リ而テ其證左ナキ點ヲ以テ所有ノ歸着ヲ判決スルノ一理由ニ供シタルヲ以テナリ又手數料及車賃等ノ斷定ニ付テモ全ク上告論旨ノ如ク理由ヲ付セサル違法ノ判決ナリトス且ツ既ニ此點ヲ以テ滋毀ノ理由アル以上ハ餘ノ論旨ニ付一々審究ヲ要セス

●連續犯 繼續犯

連續犯ハ繼續犯ト同シク前後ノ所爲ヲ通シテ一罪ト爲シ處斷スヘキモノナレハ其犯罪未タ終了ヲ告ケサルニ其幾分ヲ切斷シテ一罪ト爲シ處罰スルヲ得ス

徵兵忌避ノ件 明治廿四年刑第四百十號  
明治廿五年二月四日宣告

第一審 福井地方裁判所 第二審 大阪控訴院

被告

山岡利作

右被告事件ニ付明治廿四年九月三十日大阪控訴院ニ於テ檢事ヨリノ控訴ヲ審理シ未被告カ明治十八年度ニ逃走シ徵兵忌避ノ罪アリトシテ處斷セラレ又明治廿四年度ニ徵兵検査ニ出頭セサリシ事實ハ右逃走ノ結果ニ外ナラス法律上罪トナラサル者ナルヲ以テ刑事訴訟法第二百二十四條ニ從ヒ無罪ヲ言渡スヘキ者トス依テ同法第二百六十一條ニ從ヒ原裁判ヲ取消シ同法第二百二十四條ニ從ヒ被告ヲ無罪トストノ言渡ニ對シ原裁判所檢事野村鈴吉ハ上告ヲ爲シタリ其要領ハ被告カ明治十八年來兵役ヲ免カレンカ爲メ逃走シ今日ニ至ルモ未タ復明セサルモノナリ而シテ明治廿年十二月廿八日徵兵忌避被告事件ニテ關席裁判ヲ受タリ然ルニ該關席裁判タルヤ被告カ該判決ノ時マテ逃走シテ兵役ヲ忌避シ居タル所爲ヲ罰スルニ止リ將來ヲ處罰スルノ効カナキハ言ヲ俟タスシテ明カナルヘシ然ルニ被告ニ在テハ爾後仍ホ



兵役ヲ免カレンカ爲メ逃走シテ今日ニ至ルモ復明セサルモノニシテ  
該闕席裁判以後兵役ヲ忌避セル所爲ハ新ニ犯罪ヲ組成スルモノト思  
考スルヲ以テ更ニ徵兵令第三十一條ヲ適用處罰セサル可カラス然ル  
ニ大阪控訴院カ爲シタル第二審裁判ハ檢査出頭セサリシ所爲ハ其逃  
走ノ結果ニ外ナラスト齟齬ノ理由ヲ付シ法律上罪ト爲ラサルモノト  
爲セシハ擬律錯誤ノ裁判ナリト云フニ在リ  
對手人被告ハ答辯書ヲ差出サス

大審院ニ於テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スルヲ  
左ノ如シ

凡ソ兵役ヲ免レンカ爲メ逃亡シ數年徵兵檢査ニ出頭セサル者ハ連續  
犯ナリトス連續犯ナルモノハ繼續犯ト同シク前後ノ所爲通シテ之ヲ  
一罪ト爲シ處斷スヘキモノナレハ其犯罪未タ終了ヲ告ケサルノ中間  
其幾分ヲ切斷シ之ヲ一罪ト爲シ處罰スルヲ得ス故ニ本件ノ如キ今尙

本現ニ繼續シツ、アル被告カ犯罪ノ幾部ニ對シ之カ處罰ヲ爲スヘシ  
トノ上告論旨ハ其當ヲ得サルモ元來本件ハ前辯明ノ理由ナルヲ以テ  
目下未タ之ヲ受理ス可ラサルモノナルニ原裁判所カ之ヲ受理セシハ  
刑事訴訟法第二百六十九條第五ニ適スル破毀ノ原由アルモノトス依  
テ同法第二百八十七條ニ從ヒ原裁判ヲ破毀シ本院ニ於テ直ニ判決ス  
ルヲ左ノ如シ

右

山岡利作

原裁判所カ認メタル事實ニ據レハ前條辯明ノ理由ナルヲ以テ本件  
ノ公訴ハ之ヲ受理セス

●被告所在地 管轄

刑事訴訟法第二十六條ノ被告人所在地トハ被告人ノ現在スル所ノ



地ヲ云フモノニシテ其本籍地ト雖モ被告人現在セサルトキハ之ヲ所在地ト云フヲ得ス刑訴二六條

竊盜ノ件明治廿五年刑第二十九號  
明治廿五年二月四日宣告

第一審 岡山地方裁判所 第二審 大阪控訴院

被告 深川ツル

右ツルカ竊盜被告事件ニ付明治廿四年十月三十日大阪控訴院ニ於テ岡山地方裁判所カ刑事訴訟法第二十六條第二百三十六條第二百二十二條ニ依リ管轄違ヲ言渡セシ裁判ニ對スル檢事ヨリノ控訴ヲ審理シ本件犯罪地ハ香川縣讚岐國鶴足郡宇多津村ニシテ被告人ハ岡山地方裁判所ニ於テ裁判スル當時其管轄地内ニ現在セシ者ニアラス又原裁判所ハ刑事訴訟法第八十六條ノ規定ニ從ヒ處分ヲ爲スヲ得ルモノニ付前顯被告人ニ對シ言渡シタル裁判ハ相當ニシテ檢事ノ控訴ハ其理由無キモノトス依テ刑事訴訟法第二百六十一條ニ基キ該控訴ヲ棄

却スト言渡シタル判決ヲ不當トシ同院檢事山下雄太郎ハ上告ヲ爲シタリ其趣旨ハ元來本件ハ被告カ犯罪地ナル高松地方裁判所丸龜支部檢事ヨリ被告所在不明ニ付其本籍地ナル岡山地方裁判所檢事ニ移送シ同裁判所檢事之ヲ受ケ公訴ヲ提起シ同裁判所モ亦之ヲ受理シ闕席ノ儘裁判ヲ言渡シタルモノニシテ被告カ其管轄内ニ不在ナルヲ問ハス現ニ岡山地方裁判所ハ第一着ニ本件公判ニ着手シタルモノナレハ刑事訴訟法第二十七條ノ規定ニ從ヒ同裁判所カ被告ニ對シ管轄ヲ有スルヲハ勿論ナルノミナラス被告ノ本籍地ハ同裁判所ノ管轄内ニアル上ハ岡山地方裁判所ハ同法第二十六條ノ被告所在地ノ裁判所ナリト言フヲ得ヘケレハ原院カ本件ニ付管轄違ヲ言渡シタルハ不當ニシテ刑事訴訟法第二百六十九條第四項ニ該當スルモノト思量スルニ付原判決破毀ノ上更ニ相當ノ裁判ヲ求ムト云ニ在リ相手方深川ツルハ答辯書ヲ差出タサス



大審院ニ於テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スル左ノ如シ

上告論旨ニ因リ審案スルニ刑事訴訟法第二十六條ニ同等ノ裁判所ニ於テハ犯罪ノ地又ハ被告人所在ノ地ノ裁判所ヲ以テ豫審及ヒ公判ノ管轄ナリトストアリ所謂被告人所在ノ地トハ被告人ノ現在スル所ノ地ヲ云フモノニシテ其本籍地ト雖モ被告人現在セサルトキハ之ヲ所在地ト云フヲ得ス本案被告ノ犯罪ノ地ハ高松地方裁判所丸龜支部ノ管轄ニシテ被告ノ所在不明ナルニ付其本籍地ナル岡山地方裁判所檢事ニ移送シ同檢事ヨリ起訴シタルモノナレハ該裁判所ニ於テ之ヲ受理シ公判ニ着手シタルモ被告ハ開廷期日ニ出頭セサルニ因リ其地ニ現在セサルモノト認メ前顯法條ニ適合セサルヲ以テ同法第二百二十二條等ニ依リ管轄違ナリト判決シタルモノナリ又同法第二十七條ハ數箇ノ裁判所ノ管轄ナル場合本件ノ如キハ犯罪ノ地ト所在ノ地ト

二箇ノ裁判所ノ管轄アリニ於ケル裁判管轄ヲ規定シタルモノナリト雖モ本件岡山地方裁判所ノ如キハ犯罪ノ地ニアラス單ニ其本籍地ト云フノミニシテ被告人所在ノ地ニアラサルヲ以テ最初其公判ニ着手シタルモ素ヨリ本條ノ規定ヲ適用スヘキ限ニアラス然ラハ則該裁判所カ被告ニ對シ管轄權ヲ有セサルヤ明ラカナリ故ニ原判決岡山地方裁判所ノ裁判ヲ相當ト爲シ檢事ノ控訴ヲ棄却シタルハ適法ニシテ上告論旨ハ其理由ナキモノトス  
右ノ理由ナルヲ以テ刑事訴訟法第二百八十五條ニ依リ本案上告ハ之ヲ棄却スルモノナリ

●誹毀 有形人 無形人

刑法第三百五十八條ノ人ヲ誹毀シタル者ハ云々トアル人トハ唯有形人ヲ指スノミナラス無形人ヲモ包含スルモノトス故ニ各人ノ集



合ヨリ團結スル所ノ會社等ヲ誹毀スルニ於テハ同條ノ制裁ヲ受ケ  
サル可ラス刑三五  
八條

誹毀ノ件 明治廿四年刑第四百八十九號  
明治廿五年二月四日宣告

第一審 東京地方裁判所 第二審 東京控訴院

被告 山口重次 辯護人 大岡育造

右重次カ誹毀被告事件東京地方裁判所ノ裁判ニ對シ被告ヨリ控訴ヲ  
爲シタルニ付明治二十四年十一月廿八日東京控訴院ニ於テ審理ノ末  
被告ハ編輯人ニテ明治廿四年六月廿三日發兌セル東京中新聞第二千  
五百七十八號雜報欄内ニグラントホテルノ内幕ト題シ横濱居留地二十  
番館グラントホテルノ名譽ヲ毀損シタルモデーキンブラザー商會ニ  
際シテノ誹毀罪ヲ構成セサルモノトス其所爲刑法第三百五十八條第  
二ニ該當スルモノニシテ原裁判ハ其當ヲ得サルニ依リ刑事訴訟法第  
二百六十一條ニ從ヒ原裁判ヲ取消シ更ニ前掲ノ事實ト法條トニ依リ

被告ヲ重禁錮一月ニ處シ罰金十圓ヲ附加スト言渡シタリ  
被告重次及代言人大岡育造ハ右ノ裁判ヲ不當ナリトシ上告ヲ爲スノ  
要領原判文ヲ按スルニ被告ハ明治廿四年六月廿三日發兌セル東京中  
新聞第二千五百七十八號雜報欄内ニグラントホテルノ内幕ト題シ其  
項中ニ云々該グラントホテルノ名譽ヲ毀損シタルモノト判定ストア  
リ然シテ彼ノグラントホテルナルモノ、代表者タル民事原告人カ第  
一審公庭ニ於テノ陳述ニ依ルモ株式ヲ以テ組織サレタル一會社即チ  
一ノ無形人ナルコトハ爭フヘカラサルノ事實ナリ然ルヲ原判官ハ尙ホ  
其所爲刑法第三百五十八條第二項ニ該當スト判決サレタルハ果テ正  
當ニ法律ヲ適用シタルモノト云フヲ得ヘキカ抑刑法學上見テ以テ人  
ト爲ス者ハ必ス肉體ヲ具ヘタル自然的ノ人間ノミニ限ルモノニシテ  
彼ノ民法上或ル便宜ヲ得ンカ爲メニ法律ノ假想シタル所謂無形人即  
チ法人ナル者ハ刑法上ニ於テ人タルノ資格アルヘキ理ナキモノナリ



殊ニ刑法第三百五十八條ノ罪ハ親告罪ノ一ニシテ而モ必ス被害者本人ノ告訴ヲ要スルハ法文ノ明示スル處ナレハ性質上代表者ニ依ルニアラサレハ運動スル能ハサル無形人モ該條ニ云フ處ノ人字中ニ包含セラレタリト解釋スルハ論理上服シ能ハサル處ナリ如此一般ノ法理ヨリ觀ルモ法文ノ解釋ヨリ推ズモ刑法第三百五十八條ノ人ナル文字中ニハ無形人ヲ意味セサルト彼ノグラントホテルハ無形人ナルコトノ二點ニ於テ毫モ疑ノ存セサルニモ拘ハラヌ尙ホ刑法第三百五十八條第二項ニ該當セリト判決セラレタルハ擬律ノ錯誤ナリト云フニ在リ

原院檢事ハ之レニ答辯セス

大審院ニ於テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シタルニ上告代言人大岡育造ハ前上告趣旨ヲ敷衍シ且原裁判被告ヲ有罪トシ處斷シタルハ第一グラントホテルノ内幕ト題シ云々又第二ハ同館別閣萬

邦雜貨品陳列場云々ト記載シ以テ該グラントホテルノ名譽ヲ毀損シタルモノト判定ストアリ然ルニ其後段ニ至リ又同館別閣萬邦雜貨品陳列場云々以下ハデーキャンブラザ一商會ヲ誹毀シタリトイナルモ被告ニ於テ該陳列場ハグラントホテルニ屬スルモノト思考シ專ラグラントホテルヲ誹毀スル爲メニ記載シタルマテニテ更ニデーキャンブラザ一商會ヲ誹毀スルノ意アリシモノト認メ難キヲ以テ該商會ニ對シテ誹毀ノ罪構成セサルモノトストアレト既ニ前段ニ於テハ二個ノ所爲トモ併テ記載シ有罪トシナカラ後段ニ至リ斯ク無罪ト判定セラレタルハ理由ノ齟齬ナリト擴張シタリ因テ立會檢事應當融ノ意見ヲ聽キ判決スルコト左ノ如シ

凡ソ一種ノ團結體ナル銀行或ハ會社等ノ如キ各人ノ集合ヨリ成立ツ所ノ者ハ固ヨリ權利アリ義務アリ名譽アルモノニテ法律モ亦之ヲ保護スル毫モ尋常人ト異ナル處ナシ而シテ刑法第三百五十八條ノ人ト



ハ有形人無形人共ニ包含スルモノニ付若シ各人ノ集合ヨリ成立所ノ  
 會社等ヲ誹毀シタルニ於テハ同條ノ制裁ヲ受クヘキハ勿論ナリト  
 ス本件ノ被害タルグラントホテルハ各人集合ヨリ成立タル無形人ニ  
 付之レヲ代表スル役員ヨリ告訴シタルハ即チ被害者其者ノ親告シタ  
 ルモノナリ故ニ被告カグラントホテルノ名譽ヲ毀損シタル事實ニ對  
 シ刑法第三百五十八條ヲ適用處斷シタルハ相當ニシテ擬律錯誤ナリ  
 トノ上告ハ其理由ナキモノトス又原判文前段ニグラントホテルハ云  
 云又同館別閣萬邦雜貨品陳列場ニハ云々ト掲載シタルハ惣テگران  
 ドホテルノ名譽ヲ毀損シタルモノト認メタルモノニテ二個ノ誹毀罪  
 ヲ認メタルニアラサルナリ故ニ其後段ニ於テデーキンブラザー商會  
 ヲ誹毀スルノ意アリシモノト認メ難キヲ以テ特ニ一ノ誹毀罪ヲ構成  
 セスト説明シタルモノナレハ前後ノ理由毫モ齟齬アルコトナシ因テ代  
 言人カ擴張論旨モ亦相立タヌ右ノ理由ナルヲ以テ刑事訴訟法第二百

八十五條ニ則リ本按上告ハ之レヲ棄却スル者也

●連帶義務 失踪者 分身一體 現在債務者 普  
 通ノ法理

連帶義務ノ契約ハ縱令連帶者中ニ失踪者アリテ三十六ヶ月ノ期間  
 ヲ經過セサルモ素ヨリ分身一體ノ實ヲ負フヘキ性質ノモノナレハ  
 現在債務者カ其義務ヲ負擔スルハ普通ノ法理ナリ而シテ明治八年  
 第六號布告ハ他ニ連帶債務者ノナキ場合ノ失踪者ニ關スル處分法  
 ニシテ連帶契約ノ場合ニモ準用スヘキ規則ニ非ス明治八年布告  
 第六號

無抵當貸金催促ノ件 明治廿四年民第二百六十四號  
 明治廿五年二月九日判決

第一審 東京地方裁判所 第二審 東京控訴院

上告人 佃 與次郎 訴訟代理人 小林 清藏  
 被上告人 平野 和親



平野和親ヨリ佃與次郎ニ係ル無抵當貸金催促事件ニ付東京控訴院カ  
明治廿四年十月十二日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ  
求ムル申立ヲ爲シタリ

## 判決主文

本件ノ上告ハ之ヲ棄却ス

## 理由

上告第一要旨ハ原判決ニ表示スル明治八年第六十三號布告ニ所謂連  
名中死亡失踪ナル文詞ハ確定ノ意即チ公正文書ヲ以テ身分ノ異動ヲ  
證スヘキ場合ヲ規定シタルモノニシテ其相續人有之時又ハ失踪ノ確  
定セサル間ハ直ニ該布告ヲ適用ス可ラサルナリ明治八年第六號布告  
ノ精神ニヨリ明白ナリ本件ハ第一審ノ始メヨリ被上告人ハ獨リ上告  
人ノミヲ訴ヘ他二名ノ共同義務者ノ存在スルモ共同義務者ハ失踪シ  
タリトテ其失踪ノ確定シタルヲ及ヒ其相續人ナキヲ證明セサルモ

ノナレハ上告人ハ被上告人ノ追求ニ應スルノ義務ナシ加之失踪ハ民  
法上身分ノ異動ナレハ公正證書ニ依リ之ヲ證明シ且明治八年第六號  
布告ノ趣旨ニ基キ訴ヲ爲シテヨリ三十六ヶ月ヲ經過シ而シテ相續人  
ナキ場合ニ非レハ明治八年第六十三號布告ヲ適用シ得サルモノナリ  
然ルニ原控訴院ハ法律ヲ不當ニ適用シ上告人ニ全部ノ義務履行ヲ命  
シタルハ不法ナリト云フニ在リ然レトモ連帶義務ノ契約ハ縱ヒ連帶者  
中失踪シ三十六ヶ月ノ期間ヲ經過セサルモ素ヨリ分身一體ノ實メヲ  
負フヘキ性質ノモノナレハ現在債務者カ其義務ヲ負擔スヘキハ普通ノ  
法理トス而シテ本訴ハ提起ノ當時連借者ノ踪跡不分明ニシテ知ルニ  
由ナカリシ論點ニ對シテハ上告人於テ爭フタル事跡ナキナリ辯論調  
書ニ參照シテ明カナル所ナレハ公正證書ニ據リ其失踪ヲ證明セサル  
モ明治八年第六十三號布告ヲ適用シ處分スルヲ相當ナリトス又明治  
八年第六號布告ハ他ニ連帶債務者ノアラサル失踪者ニ關スル處分法



ニシテ連帶契約ノ場合モ尙ホ準用スヘキ規則ニ非ルヲ以テ原院カ之ニ拘泥セス上告人ニ全部ノ義務履行ヲ命シタルハ適法ノ裁判ナリトス  
同第二項失踪者ニ付舉證責任ノ事同第三項訴訟記録ノ事同第四項相續人ナキヲニ付テハ上告ノ理由ト爲スニ足ラス其理由ハ第一項辯明ニテ理會スヘキ筋合ナルヲ以テ茲ニ贅セス

●習慣法 當事者 證明 職權 取調 判決ノ說明

習慣法ニ違背スト云フコトハ當事者ニ於テ之ヲ證明スルカ若クハ職權ヲ以テ之レカ取調ヲ爲シタル場合ニ非レハ之ヲ以テ上告ノ理由ト爲スヲ得ス民訴第二一九條  
判決ノ說明前段後段同一ノ理由ニ歸スル場合ニ於テ既ニ之ヲ前段

ニ說明シタルトハ再ヒ之ヲ後段ニ證明スルヲ要セス

約定金請求ノ件 明治廿四年民第二百八十七號  
明治廿五年二月十三日判決

第一審 東京地方裁判所 第二審 東京控訴院

上告人 柳川清助、柳川繁 訴訟代理人 黒岩鐵之助  
被上告人 林 有 幸

柳川清助外一名ヨリ林有幸ニ係ル約定金請求詞訟事件ニ付明治廿四年十月廿三日東京控訴院カ言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ノ申立ヲ爲シタリ

判決主文

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告第一點ハ原控訴院ニ於テ會社成立ノ前ニ於ケル發起人ハ會社ノ代表者ナリト云フ能ハス隨テ該契約ノ當事者ハ第三者ト發起人ニシ



テ發起人ノ負擔シタル義務ノ履行ヲ爲サシメント欲セハ宜シク株主惣會ノ追認ヲ爲サシメサル可カラサルナリトノ理由ヲ以テ上告人ニ甲第二號證約定金ヲ請求スルノ權ナシト判決セラレタレト被上告會社ハ明治廿年六月十日ヲ以テ創立屆ヲ爲シ同七月二十三日其認可ヲ得同十一月十八日株主總會ヲ開キ同十一月廿一日甲第一號及第二號證ノ契約ヲ爲シ二十一年六月六日創業總會ヲ開キ茲ニ火災保險會社ヲ設立シ頭取唯武連ヲ撰任シタルモノニシテ即チ公然被上告會社ヲ成立シタルモノナリ而シテ同日甲第三號證ノ如ク曾テ發起人ト上告人ノ間ニ於テ取結ヒタル甲第一、二號證ノ約定金ハ會社ニ於テ負擔ス可キコトヲ結約シ之レニ社名ヲ記シ社印ヲ押捺シ尙此契約ハ社業開始ノ際ニ於テ其頭取ヨリ後任社長ニ引繼キタルコトハ甲第四號證ニ依テ明白ナル所ニシテ斯ノ如キハ我國現行ノ習慣法ニ依テ會社カ契約ノ義務ヲ負擔ス可キモノナリ然ルニ原院ニ於テ此習慣法ニ依ラヌ

シテ判決シタルハ明治八年第百三號布告第三條ヲ適用セサルモノニシテ即チ違法ノ裁判ナリト云フニ在リ依テ原判文ノ主旨ヲ案スルニ原院ニ於テハ甲第一、二、三號證ハ何レモ發起人ノ爲シタル契約ニシテ株主總會ニ於テ之ヲ追認シタルノ證ナク又此數證ヲ會社ニ引繼タルコトハ甲第四號證ニ依テ之ヲ認メタルモ此引繼ハ其契約ノ義務ヲ認メタルノ證タラサル而已ナラス乙第一號證但書ニ依レハ株主總會ハ却テ其義務ノ消滅シタルコトノ報告ヲ受ケテ之レヲ認メタルモノト斷定シタルモノニシテ之レカ事實ヲ確定スルニ就テ法律ニ違背シタル所ナシ又上告人ハ現行習慣法ニ違背シタリト云フト雖ト民事訴訟法第二百十九條ニ依リ當事者ニ於テ之レヲ證明スルカ若クハ職權ヲ以テ其取調ヲ爲シタル場合ニ非レハ習慣法ニ違背シタリト云フヲ以テ上告ノ理由ト爲スコトヲ得ス

上告第二點ハ原判決ニ於テ甲第六號證ノ事項ハ之ヲ株主總會へ報告



シタル證ナク從テ會社ハ同證ニ對シテ義務ナシト判定シ會社成立ノ後ニ於テ社名ヲ用ヒ社印ヲ押捺シタル證書ヲ排斥シテ之レヲ無効トナスニ際リ特ニ其理由ヲ付セサルハ不法ナリト云フニ在レモ既ニ前段ニ於テ説明シタル所ノ如ク原院ニ於テハ社名社印ノ如何ニ拘ハラズ該契約ハ發起人若クハ創業委員間ニ於テ其名義ヲ以テ爲シタル契約ナレハ株主總會ニ於テ之レヲ追認シタルノ證ナキ限りハ會社ニ對シテ其効ナシトノ趣旨ヲ以テ判定シタルモノニシテ畢竟第一點ノ理由ト同一ニ歸スルモノナレハ別段ノ證明ヲ與フル必要ナキキノトス上告第三點ハ甲第一號證ノ株券ハ現金ヲ以テ會社カ授受スヘキ約アルコトハ原院モ之レヲ認メ而シテ乙第一號證但書ノ株券ニ變更セシモノト認ムルコトハ上告人ニ於テ陳述セサル所ナリ然ルニ原院ハ結約者ノ一方タル上告人ニ於テ承諾ナキモ其一方タル會社ノ代表者株主ニ報告ヲ爲シタル點而已ヲ以テ甲第二號證ノ契約ヲ變更シタルモノ

ト判定シタルハ不法ナリト云フニ在レモ原判決ハ之レヲ以テ果シテ甲第二號證ノ契約ヲ變更シタルモノナリトノ判定ヲ下シタルニ非ス畢竟會社カ如斯報告ヲ受ケタリトノ事實ヲ確定シタルニ過キサルコトハ判文中其報告シタル事實ノ信ナルト否トヲ問ハス云々又被控訴人ハ該報告ノ虚ナルヲ證シ發起人ニ對シ甲第一、二號證ノ契約履行ヲ請求スルハ格別會社ヲシテ該契約履行ノ責ヲ負ハシムルコト能ハスト判示シタルヲ以テ明カナレハ之レヲ以テ爭點以外ノ判決ヲ爲シタルモノト爲スヲ得ス

●債務ノ時効 保證義務 戸主 家資分散 債權者 保證人

債務ノ時効ハ人ニ對スルモノニ非スシテ債務其者ニ對スルモノナルヲ以テ時効ノ中斷セラル、場合ニ在テモ保證義務ハ其債務ニ隨



伴スルモノトス

戸主カ前戸主ノ債務ノ爲メニ家資分散ノ處分ヲ受ケ其債務ヲ盡シ能ハサル場合ニ於テ債權者ハ其保證人ヲ措キ前戸主ニ係リ復更ニ之レカ償還ヲ求ムヘキモノニアラス

貸金辨償請求ノ件 明治廿四年民第二百九十六號  
明治廿五年二月十六日判決

第一審 浦和地方裁判所熊谷支部 第二審 東京控訴院

上告人 正田一太郎 訴訟代理人 丸山文司

被上告人 新倉榮三郎

新倉榮三郎ヨリ正田一太郎ニ係ル貸金辨償請求事件ニ付東京控訴院カ明治廿四年十一月四日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ノ申立ヲ爲シタリ

判決主文

本件ノ上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告第一論旨タルヤ甲第二號證ハ負債主正田寅吉一己ニテ交付シタルモノニ付寅吉ニ對シテハ甲第一號證債務ノ時効ヲ中斷スヘキモ保證人タル上告人ハ右甲第二號證ニ關與セサリシニ付己ニ時効ヲ得タルモノナリ然ルニ原裁判所カ時効ノ中斷ハ保證人ニ對シテモ同一ノ効力ヲ生スヘキ筋合ナレハ期限經過ノ論趣ハ相立タスト言渡シタリ果シテ然ラハ其理由ヲ明示セサルヲ得サルニ原裁判所ハ之レカ理由ノ明示ヲ欠キシナリ依テ原裁判ハ訴訟法第四百三十六條第七號ニ該當スル不法アリト云フニ在レハ債務ノ時効ハ人ニ對スルモノニアラス即チ債務其者ニ對スルモノニ付時効ノ中斷セラル、場合保證義務カ其債務ニ自ラ隨伴スヘキハ論ヲ俟タサルナリ左レハ原裁判所カ時効ノ中斷ハ保證人ニ對シテモ同一ノ効力ヲ生スヘキ筋合ナリト説明セシハ即チ上告人カ時効ヲ得ル能ハサリシ理由ニ外ナラサルナリ依テ



原裁判ハ理由ヲ付セサルモノト云フヲ得ストス  
 同第二論旨タルヤ甲第二號證ハ寅吉カ退隱後交付シ以テ寅吉カ其時  
 効ヲ中斷セシニ付主タル義務者ハ寅吉ニシテ相續人タル廣吉ハ法律  
 上ノ繼承人タル義務ヲ負擔スヘキモノニアラサルナリ然ラハ廣吉カ  
 隨意ニ本案ノ債務ヲ認諾シ家資分散者タルノ宣告ヲ受ケタレハトテ  
 未タ主タル債務者ノ隱居寅吉カ家資分散ノ處分ヲ受ケサル以上債主  
 カ其負債主ヲ捨テ、直チニ保證人ニ係リテ本案ノ金額ヲ請求スルノ  
 權ナシ然ルニ原裁判所カ甲第二號證ハ寅吉カ隱居後ニ交付シタル證  
 ルナルモ戸主廣吉ハ已ニ甲第一二號證ノ債務ヲ認諾シ家資分散者タ  
 書ノ宣告ヲ受ケタルモノナレハ控訴人ハ甲第一號證借金ノ保證ナル  
 ヲ以テ主タル義務者廣吉カ辨濟スル能ハサルニ決シタル上ハ其元利  
 金ハ勿論訴訟費用ヲモ併セテ金三百七拾八圓拾五錢被控訴人ニ辨償  
 スヘキ義務アルモノト言渡シタリ仍テ原裁判ハ前後矛盾法律ニ違背

シタル不法ノモノト云フニ在レト訴訟記録ヲ審査スルニ右等防禦ノ  
 法方ヲ提起セシ痕跡アルナシ左レハ被上告人ニ於テ寅吉ヲ措キ直  
 チニ上告人ニ係リシ點ニアリテハ上告人ノ争ヒナカリシモノト云ハ  
 サルヲ得サルナリ縱シ假リニ右等申立ヲ爲シ之レヲ防禦セシトスル  
 モ本案ノ如キ場合ニ在テハ債權者ニ於テ戸主廣吉ニ係リシ上同人ニ  
 於テ家資分散ノ處分ヲ受ケ其債務ヲ盡了シ能ハサレハトテ債權者ニ  
 於テ復タ更ニ隱居寅吉ニ係リ之レカ償還ヲ求ムルハ法理ノ許サ、ル  
 所ナリ仍テ原裁判所カ被上告人ノ請求ヲ聽ルシ上告人ニ對シ本案金  
 額ノ償還ヲ命セシハ敢テ不當ニアラストス

●時効ノ經過 相當印紙ノ貼用 不受理 法則不  
 當ノ適用 檢眞ノ申立 證據方法 違法ノ裁判

證券印稅違犯者時効ノ年月ヲ經過シ公訴權消滅ニ屬シ處罰ノ責任



ヲ免ル、場合ニ於テ其證書ニ相當印紙ヲ貼用シ之ヲ提出シタルキ  
其時効ノ如何ヲ論究セスシテ直チニ不受理ノ判決ヲ爲シタルハ法  
則ヲ不當ニ適用シタルモノナリ 民訴第四三五條  
檢眞ノ申立ヲ爲サ、リシ一事ヲ以テ證據方法ヲ拋棄シタルモノト  
シ他ノ理由及ヒ證據ノ有無如何ヲ問ハスシテ直ニ排斥スルハ違法  
ノ裁判ナリ

證書偽造行使公訴附帶私訴ノ件 明治廿四年民第一〇部第百五十二號明治廿五年二月

廿五日  
判決

第一審 富山輕罪裁判所 第二審 名古屋控訴院

上告人 熊本作右衛門 訴訟代理人 大橋樹太郎

被上告人 麻生覺平 訴訟代理人 嶋山和夫 澁谷健爾

麻生覺平ヨリ熊本作右衛門ニ係ル證書偽造行使公訴附帶私訴事件ニ  
付名古屋控訴院カ明治廿四年四月八日言渡シタル判決ニ對シ上告人

ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シ  
タリ

判決主文

名古屋控訴院カ本件ニ付言渡シタル判決ヲ破毀シ更ニ辯論及ヒ判決  
ヲ爲サシムル爲メ同院ヘ差戻ス

理由

上告第一要旨ハ甲第一號即チ乙第二號證ハ既ニ公訴ノ時効ヲ得タル  
モノナルニ原裁判所カ證券印稅規則違犯ノ處罰ヲ受ケサルヲ以テ之  
ヲ受理ス可カラサルモノトシタルハ違法ノ裁判ナリト云ニ在リ依テ  
之ヲ審案スルニ全證書ヲ以テ果シテ真正ノモノトスレハ地所ノ賣買  
ニ關スル金額記載ノ契約書ニシテ明治十八年六月十三日附ナレハ即  
チ同日ヲ以テ其印稅規則違犯ノ成立セシモノト看做サ、ル可カラス  
而シテ其犯罪ハ違警罪若クハ輕罪ニ止マルヲ以テ原裁判所カ判決言渡



シタル明治廿四年四月八日ニ至ルマテモ此犯罪ニ對シ曾テ公訴ノ提起アラサリシ限りハ法律上既ニ全ク時効ノ年月ヲ經過シ公訴權ノ消滅ニ屬スルヲ以テ其當事者ハ處罰ヲ受クヘキ責任ヲ免レタルモノトス故ニ此場合ニ於テ相當印紙ヲ貼用シ之ヲ提出シタルキハ其處罰ヲ受ケサルノ責任ヲ以テ之ヲ當事者ニ歸スルヲ得サルモノトス然ルニ原裁判所カ其時効ノ如何ヲ論究セスシテ直チニ不受理ノ判決ヲ爲シタルハ法則ヲ不當ニ適用シタル裁判ナリトス

上告第三第四要旨ハ證書ノ檢眞ヲ申立ルト否トハ舉證者ノ隨意ニシテ且ツ上告人ハ第一號ノ外尙乙號數證ヲ提出シ第一號ノ眞正ナルヲ證明シタルニ原裁判所カ檢眞ノ申立ヲ爲サ、リシ一事ヲ以テ直チニ證據方法ヲ拋棄シタルモノトシテ排斥シタルハ違法ナリト云ニ在リ依テ審案スルニ舉證者ヨリ其申立ヲ爲サ、ルニ因リ原裁判所ハ特ニ檢眞ノ手續ヲ爲シ能ハサルヘシト雖モ是ノミヲ以テ直チニ該證不採

用ノ理由トシタルハ是亦違法ノ裁判ナリトス何トナレハ假令特ニ檢眞ノ手續ヲ爲サル、モ若シ他ニ相當理由ノアルアラハ尙ホ該證ヲ信用スルニ妨ケナク又他ニ信用ス可カラサル相當理由ノアルアラハ之ヲ示シテ採用セサルモ亦其自由權内ナルニ他ノ理由及證據ノ有無如何ヲ問ハス單ニ右ノ一點ニ拘ハリ其排斥ヲ爲シタルヲ以テナリ以上ノ理由ヲ以テ原判決ヲ破毀スルニ依リ餘ノ上告論旨ハ監査ヲ要セス

●事實ノ摘示 前審ノ判決 著シキ誤謬 更正ノ請求

判決ノ事實ノ摘示ハ前審ノ判決ヲ引用スルコトヲ得民訴第二三六條  
二號及ヒ四三〇條著シキ誤謬ハ法律ノ規定ニ則リ原裁判所ニ對シ更正ヲ求メ得ヘキ



モノナレハ之ヲ以テ上告ノ理由ト爲スヲ得ス

辨償金請求ノ件 明治廿四年民第三百廿三號  
明治廿五年二月廿七日判決

第一審 橫濱地方裁判所八王子支部 第二審 東京控訴院

上告人 栗原宗八 訴訟代理人 依田銑次郎

被上告人 寺田茂右衛門秋山常吉

栗原宗八ヨリ寺田茂右衛門等ニ係ル辨償金請求事件ニ付東京控訴院  
カ明治廿四年十月廿九日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀  
ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判決主文

本件ノ上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告第一ノ要旨原控訴院カ事實及ヒ爭點ニ對シ何等一點ノ摘示ヲ爲  
サス只々當事者雙方陳述スル所第一審裁判ニ摘録スル事實ト同一ナ

リト漫然判定シタルハ民事訴訟法第二百三十六條第二項ニ違背セル  
ノミナラス被上告人ハ第二審ニ於テ其申立ヲ變更シタルニモ拘ラス  
尙同一ノ事實ナリト判定シタルハ不法ナリト云フニ在レモ判決ノ事  
實ノ摘示ニ付テハ前審ノ判決ヲ引用スルヲ得ヘキハ民事訴訟法第  
四百三十條ノ規定ニ依リ明ナル所ナレハ原控訴院カ第一審判決ノ事  
實ヲ引用シタルハ違法ノ裁判ニ非ス而シテ被上告人カ申立ヲ變更セ  
シ場合ニ之ヲ揭示セサルハ允當ナラスト雖モ既ニ裁判ノ理由ニ於テ  
其變更ニ係ル六百三十拾圓ノ點ニ付相當ノ判定ヲ與ヘタルヲ明瞭ナレ  
ハ僅ニ事實中ニ掲ケサル瑕疵ヲ以テ本案ノ裁判ヲ傷クル材料ト爲ス  
ニ足ラス仍テ上告ノ理由ナシ  
同第二ノ要旨被上告人ハ上告第二三號證ヲ認メ原控訴院モ亦該證ハ  
被上告人ノ差入タルヲ認メタリ而シテ上告第二三號證ニ依レハ本  
按取引生絲ノ一口ニ止ラサルヲ明白ニシテ被上告人ニ於テモ抵當ニ



差入レタル生絲ハ一口ナラサルヲ自認セシニモ拘ラス判決ノ理由ヲ付スルニ當リ控訴人ハ提絲ヲ抵當トシテ借入レタル六百三拾圓ノ一口ハ之ヲ認ムト雖モ其他ハ之ヲ認メス云々ト判定シタルハ事實ト理由ニ錯誤アル裁判ナリ又甲第一號證ニ據リ申立タル上告人ノ論點ヲ排斥シタルハ商業ノ習慣ニ背キタル不法ノ裁判ナリト云フニ在レモ原告第一項ニ於テ上告第二三號證ヲ被上告人ノ認メタルモノト判定セシハ即チ判決主文ニ明示スル六百三拾圓ノ取引ニシテ其他ノ取引ニ影響ヲ及ホス判意ニ非ス又訴訟記録ニ照スモ被上告人カ二口ノ取引ニ係ル抵當ナルヲ自認セシ事跡アルヲ視ス左レハ上告第二三號證ハ一部ノ取引ニ止ラスト云フハ獨リ上告人ノ見解ニ過キサレハ原告第二項ニ於テ六百三拾圓ノ他ハ被上告人カ之ヲ認メスト判定シ上告人ノ論旨ヲ斥ケタルハ理由ニ錯誤アル裁判ト爲スヲ得ス其他ノ論告ハ承審官ノ權内ナル證書ノ解釋事實判定ノ批難タルニ過キ

スシテ上告ノ理由ナシ  
同第三ノ要旨原告ニ控訴人ハ其二口ノ中提絲ヲ抵當トシテ借入タル六百三拾圓ノ一口ハ之ヲ認ムトアレモ提絲ノ抵當ハ事實之ナキノミナラス從テ被上告人ニ於テモ斯ル申立ヲ爲スヘキ筈ナシ而シテ被上告人カ抵當ニ差入レタリト云フ提絲ハ四百九拾圓ノ一口ニ對シ坐繰絲若干ヲ取合セ差入タル事實ナルニモ拘ラス前段ノ如ク判定シタルハ理由ニ錯誤アル裁判ナリト云フニ在リ按スルニ本訴六百三拾圓ノ抵當ト爲シタル生絲ハ甲第一號證及ヒ當事者間ノ論辯等ニ參照シ其名稱ノ坐繰絲ナルヲ推知スルニ足レハ原告ニ於テ提絲トアルハ坐繰絲ノ誤記ニ外ナラスシテ如斯著シキ誤謬ハ法律ノ規定ニ則リ何時ニテモ原告裁判所ニ對シ更正ヲ求メ得ヘキ筋合ナレハ之ヲ以テ原告ノ理由ト爲スヲ得サルモノトス



● 解釋 爭點 判旨 公示セサル契約 第三者 羈束 公示ノ方法 秘密契約 登記法ノ賣買 買戻條件付賣買

法律ノ解釋ニ關スル單純ノ問題ハ假令一個ノ爭點トナルモ其解釋ニ就キ判文上自ラ判旨ノアル所明カナル上ハ特ニ其爭點ニ對シ判決ヲ爲サ、ルモ爲メニ本案ノ結果ニ影響ヲ及ホサ、ルモノトス 公示セサル契約ハ第三者ヲ羈束スル効力ナシ 公示ノ方法ハ第三者ヲシテ安全ニ其權利ヲ取得セシムルモノナルニ依リ秘密契約ヲ以テ公示ヲ經テ取得シタル第三者ノ權利ヲ失ハシムルコトヲ得ス

登記法第一條ノ所謂賣買中ニハ條件付即チ買戻條件付ノ賣買モ包含スルモノトス 登記法第一條

地所取戻ノ件 明治廿四年民第三百十一號 明治廿五年二月廿九日判決

第一審 新潟地方裁判所新發田支部 第二審 東京控訴院

上告人 水本 忠次 訴訟代理人 杉山誠一郎

被上告人 小川五郎次

右當事者間ノ地所取戻事件ニ付東京控訴院カ明治廿四年十月廿七日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判決主文

本件ノ上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告第一論旨ハ要スルニ我カ國現行ノ登記法ハ買戻ノ如キ解除條件付ノ契約ヲ登記ス可シトノ規定ナキヲ以テ之ヲ登記セサルモ爲メニ其買戻權ニ消長ヲ來タスノ理ナキヲ論シ殊ニ此點ニ對スル判決ヲ求ムル爲メ民事訴訟法第二百二十二條ニ從ヒ之ヲ控訴ノ要旨トシテ控訴狀中ニ明記シ置キタリ左スレハ原院ハ我カ登記法ニ於テ買戻契約



ハ之ヲ登記ス可キモノナルヤ否若シ其登記ヲ爲サ、レハ第三者ニ對抗スルノ力ナキヤ否ヤ宜シク之ヲ審判ス可キ筈ナルニ原院カ只々自己ノ想像ヲ畫キ(公示ノ方法ナキ契約ハ概シテ第三者ニ對抗シ得スト)ト説明シ登記ス可キモノナルヤ否ヤノ要點ニ對シテ判決ヲ爲サ、ルハ民事訴訟法第四百三十四條第四百三十五條ニ該當スル違法ノ裁判ナリト云フニ在ルモ既ニ原院カ説明ノ理由中ニ(凡ソ公示ノ方法ナキ契約ハ概シテ第三者ニ對抗スルヲ得サルコト勿論云々)ト説明シタル以上ハ之ヲ以テ買戻條件付ノ契約ハ現行法ニ於テ登記スルノ手續方法ナシトノ判旨ヲ見ルニ充分ナリ本論ノ如キ法律ノ解釋ニ關スル單純ノ問題ハ假令一個ノ爭點トナルモ其解釋ニ就キ判文上自ラ判旨ノアル所明カナル上ハ特ニ其爭點ニ對シ判決ヲ爲サ、ルモ爲メニ本案ノ結果ニ影響ヲ及ホサ、ルヲ以テ右上告論旨ハ適法ノ理由トスルニ足ラス

同第二論旨ハ要スルニ本件ノ論旨ハ甲第一號證ノ契約ニ依リ上告人ハ第三者タル被上告人ニ對シ買戻シ權ヲ行ヒ得可キヤ否ヤト云フニ在テ被上告人カ伊藤宇一郎ヨリ係争地ヲ買受ケタル其所有權獲得ノ手續ニ瑕疵アルヤ否ヤハ更ニ當事者ノ争ハサル所ナリ然ルニ原判決ノ理由ニ(被控訴人ハ正當ノ手續ヲ以テ伊藤宇一郎ヨリ係争地ヲ買受ケタルモノナレハ其所有權ヲ獲得スルノ手續ニ毫モ瑕疵ナシ故ニ控訴人ハ追求ス可キ權利ナシ)ト被上告人カ係争地ヲ獲得シタル手續ニ付瑕疵アルヤ否ヤヲ争ヒシモノ、如ク説明セラレタルハ民事訴訟法第二百三十一條第一項ニ所謂裁判所ハ申立サル事柄ヲ原被告ニ歸セシムルノ權ナシ)トノ法則ニ背キタルモノニシテ民事訴訟法第四百三十五條ニ該當スル違法ノ裁判ナリト云フニ在ルモ是亦上告適法ノ理由トスルニ足ラス如何トナレハ原判決ハ被上告人カ係争地ヲ獲得シタル手續ニ瑕疵ナシト云フノミヲ以テ上告人ノ請求ヲ斥ケタルニア



ラスシテ其斷案理由ノ主要ハ公示セサル契約ハ第三者ヲ羈束ス可キ効力ナシト云フニ在ルヲ以テ偶々其説明カ争ヒナキ獲得ノ手續ニ瑕瑾ナシ云々ニ及ヒタレハトテ毫モ本案ノ結果ニ消長アラサレハナリ同第三論旨ハ現行登記法第一條ニ明カニ(地所建物船舶ノ賣買讓與質入書入ノ登記ヲ請ハントスル者ハ本法ニ從ヒ云々登記所ニ登記ヲ請フ可シト專ラ單純ノ賣買ノミヲ豫定シ條件付ノ契約又ハ賃貸契約等ヲ掲ケサルカ故買戻ノ如キ賣買解除ノ性質ヲ含有セル條件付契約ハ固ヨリ全條ノ支配ヲ受ク可キモノニアラス且公示ノ手續ヲ爲サ、ルモ苟モ買戻契約アリタリトノ事實明瞭ナル以上ハ其公示ノ如何ニ拘ラス第三者ハ必ス其約務ヲ遵守セサル可カラストノ御院カ明治十九年第六十六號上告事件ニ付同二十年十二月十六日言渡サレタル判決例アリ上告人ハ原院ニ於テ此判決例アルヲ證シ殊ニ甲第四號證トシテ之ヲ捧呈シ因テ以テ此判決例ヲ遵守セサル可カラサルヲ申立

タリ然ルニ原判決ハ此判決例ニ反スルノミナラス上告人カ現行登記法ニ基キ控訴ヲ爲シタルニモ拘ラス其法律ノ如何ヲ願ミス公示ノ方法ナキ契約ハ云々第三者ヲ羈束ス可キ効力ナシト斷定セラレタルハ民事訴訟法第四百三十五條ニ該當スル不法ノ裁判ナリト云フニ在リ依テ之ヲ審案スルニ夫レ公示ノ方法ハ第三者ヲシテ安全ニ其權利ヲ取得セシムルニ在リ故ニ買戻契約ニシテ之レカ登記ヲ爲サ、ルハ縱令法律ノ完備セサルニ職由スト雖モ秘密ニ係ル契約ヲ以テ公示ヲ經テ取得シタル第三者ノ權利ヲ失ハシムル如キハ決シテ法律ノ許ス所ニアラス如何トナレハ若シ秘密ノ契約ニシテ法律ノ保護ヲ得タル第三者ヲ羈束スルモノトセハ之ヲ保護スル方法ハ反ツテ之ヲ害スルノ具トナルノ結果ヲ見ルヲアルニ至ル可ケレハナリ況ンヤ本件ノ如キハ現行登記法ノ施行後ニ成立タルモノナルヲ以テ登記ヲ經テ其保護ヲ受クルノ便アルニ自ラ之ヲ爲サ、ルモノナルニ於テオヤ上告人ハ



現行登記法ハ買戻ノ如キ解除條件付ノ契約ハ登記ス可キモノニアラスト論スルモ登記法第一條ニ所謂(地所建物船舶ノ賣買讓與質入書入云々)トアル其賣買トハ單純ノ賣買ノミヲ云フニアラス其成立上條件ヲ付シタル即チ買戻條件付ノ賣買ノ如キモ固ヨリ之ニ包含シアルヲ勿論ナルヲ以テ若シ之レカ登記ヲ爲サレハ同法第六條ニ據リ第三者ニ對シテハ其効ヲ失フ可キモノトス故ニ原院カ其判決ノ理由ニ(凡ソ公示ノ方法ナキ契約ハ概シテ云々)ト説明シタルハ允當ナラスト雖モ結局(甲第一號證ノ買戻契約ハ云々)第三者タル被控訴人ヲ羈束ス可キ効力ナシト斷定シタルハ相當ナルヲ以テ此論旨モ亦適法ノ理由ナキモノトス

以上ノ理由ニ付民事訴訟法第四百三十九條ニ據リ本件上告ハ棄却ス可キモノトス

右ハ本院從來ノ判決例ト判旨ヲ異ニスルヲ以テ構成法第四十九條ニ

據リ聯合會審ノ上之ヲ決ス

●新證提出 關席判決

民事訴訟法第四百二十九條末段ハ控訴人ニ於テ一應相當ノ證據力アリトスヘキ新證ヲ提出シ以テ第一審裁判所ニテ確定セル事實ヲ攻撃スルニ際シ被控訴人ニ於テ出頭シテ辯論セサルハ控訴人ノ立證ハ其證據ニ相當セル結果ヲ得タルモノトシテ關席判決ヲ爲スヘシトノ律意ナリ民訴第四二十九條

水入地所引渡地券名義書換並ニ未納米請求ノ件明治廿四年民

第八十一號明治廿五年二月廿九日判決

第一審 新潟地方裁判所 第二審 宮城控訴院

上告人 上杉桂三郎 訴訟代理人 廣江幸吉

被上告人 田卷三郎兵衛 訴訟代理人 大矢早利



右當事者間ノ水入地所引渡地券名義書換並ニ未納米請求事件ニ付宮城控訴院カ明治廿四年六月十二日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ一部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

## 判決主文

原判決ヲ破毀シ更ニ辯論及ヒ判決ヲ爲サシムル爲メ本件ヲ東京控訴院ヘ送移ス

## 理由

第一點上告ノ趣旨ハ要スルニ被上告人ハ本件所爭ノ地所ハ弘化年度以前ニ於テ之ヲ買得シ爾來明治十八年迄上告人ニ小作セシメタルモノナリト論スルヲ以テ之ヲ辯駁スル爲メ安政二年中當時ノ公吏カ認メタル打立野帳即チ乙第二號其他乙第三號證ヲ新證トシテ提出シ該地所ノ上告人ノ所有タルコトヲ論述シタルモノナレハ原院ハ民事訴訟法第四百二十九條ノ規定ニ從ヒ右ノ立證ハ其結果ヲ得タルモノト見

做シ闕席判決ヲ爲スヘキ筈ナルニ却テ對手人ノ地位ニ立チ乙第二號證ヲ以テ上告人ノ所有ヲ證スルニ足ラストシテ排斥セラレタルハ右ノ規定ニ反スル不法ノ裁判ナリト云フニ在リ因テ之ヲ審按スルニ民事訴訟法第四百二十九條末段ノ規定タルヤ控訴人ニ於テ一應相當ノ證據力アリトスヘキ新證ヲ提出シ以テ第一審裁判所ニテ確定セル事實ヲ攻撃スルニ際シ被控訴人ニ於テ其新立證ノ趣旨ヲ承知シナカラ期日ニ出頭シテ辯論セサルモハ控訴人ノ立證ハ其證據ニ相當セル結果ヲ得タルモノトシテ闕席判決ヲ爲スヘシトノ律意ナリ今本件ニ付上告人カ原院ニ提出セシ乙第二號證ハ第一審裁判所ニ顯ハレサルモノニシテ且ツ一應相當ノ證據力アリト見做ス書面ナレハ被上告人ニ於テ其立證ノ如何ヲ承知シナカラ期日ニ闕席シタルモノナレハ原院ハ右ノ規定ニ從ヒ上告人カ新證ヲ以テ證明シタル丈ケノ事實ハ先ツ證明シ得タルモノトシテ裁判スヘキ筈ナルニ之ニ反シ漫然該證ハ未



タ以テ上告人ノ論旨ヲ確實ナラシムルニ足ラストシテ排斥シタルハ  
上告論旨ノ如ク訴訟手續ノ規定ニ反スルモノニシテ民事訴訟法第四  
百三十五條ニ當ル不法ノ裁判ナリト云ハサルヘカラス  
右ノ理由ナルニ依リ民事訴訟法第四百四十七條同四百四十八條ニ依  
リ原判決ヲ破毀シ同等ノ裁判所ニ移送スルヲ相當トス

明治二十五年四月九日印刷  
明治二十五年四月九日出版

# 大 審 院

印刷者兼發行者

東京市芝區西久  
保茸手町壹番地

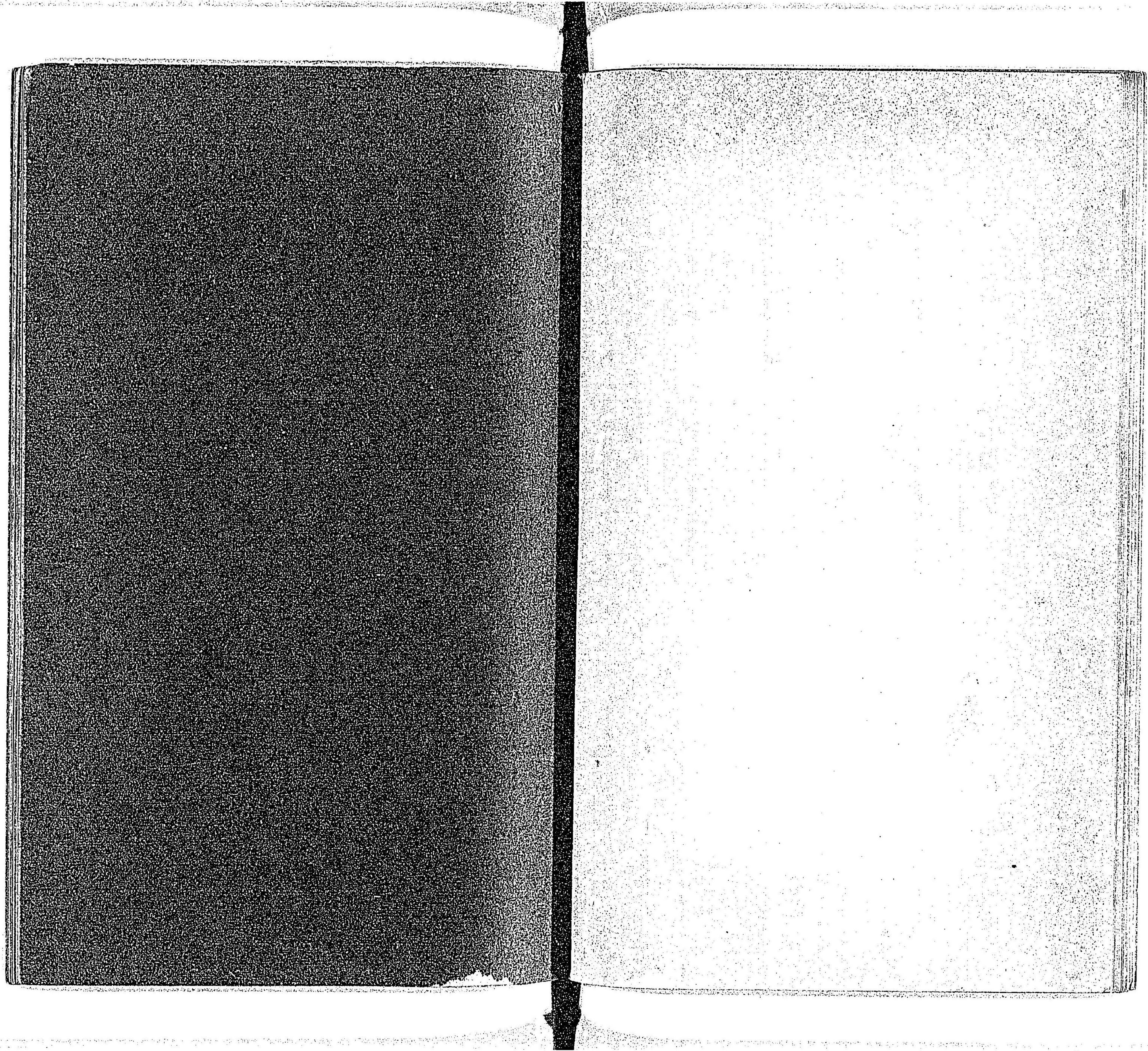
長 尾 景 彌

發 賣 所

東京銀坐四丁目

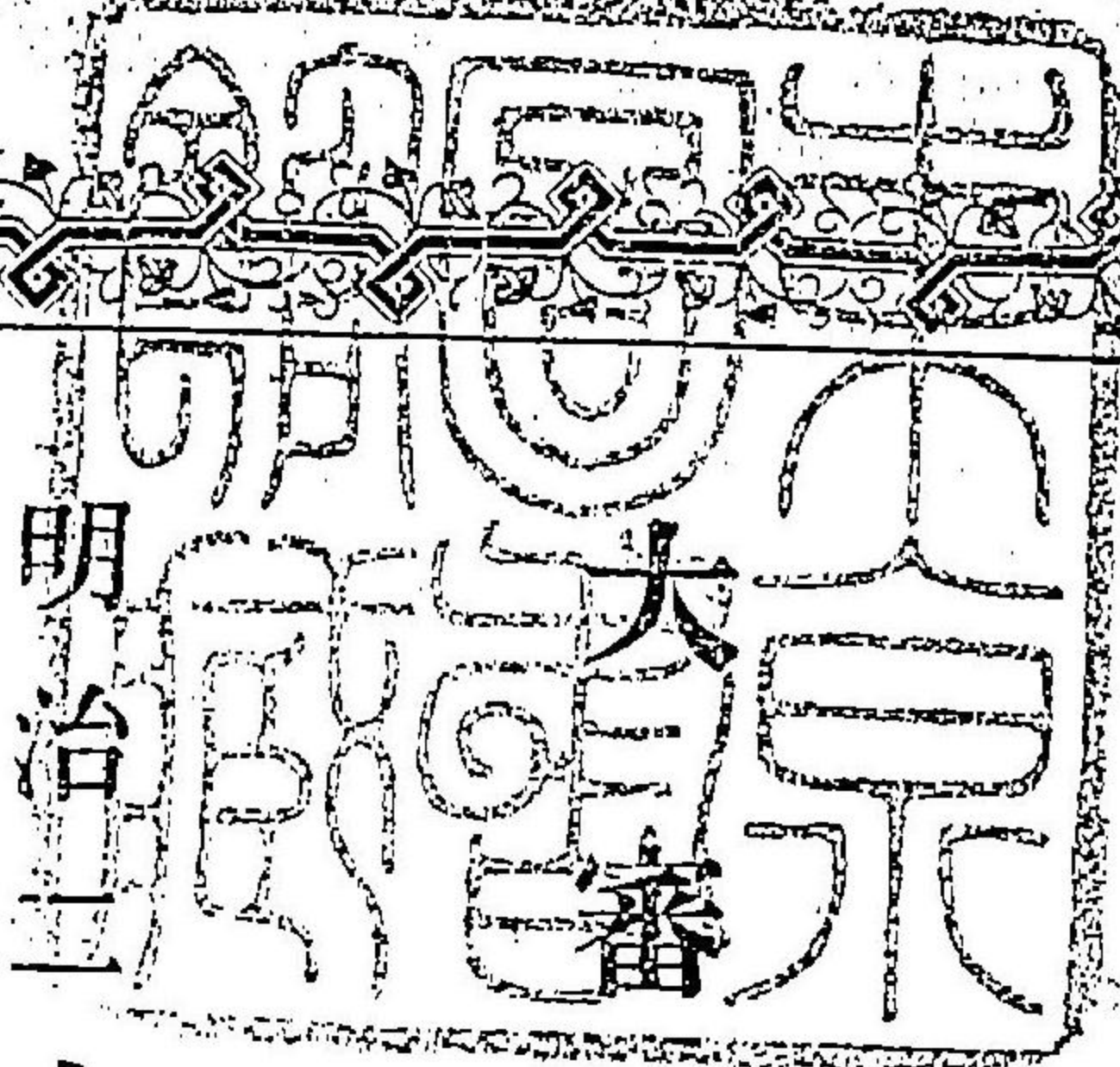
博 聞 本 社







1905/10

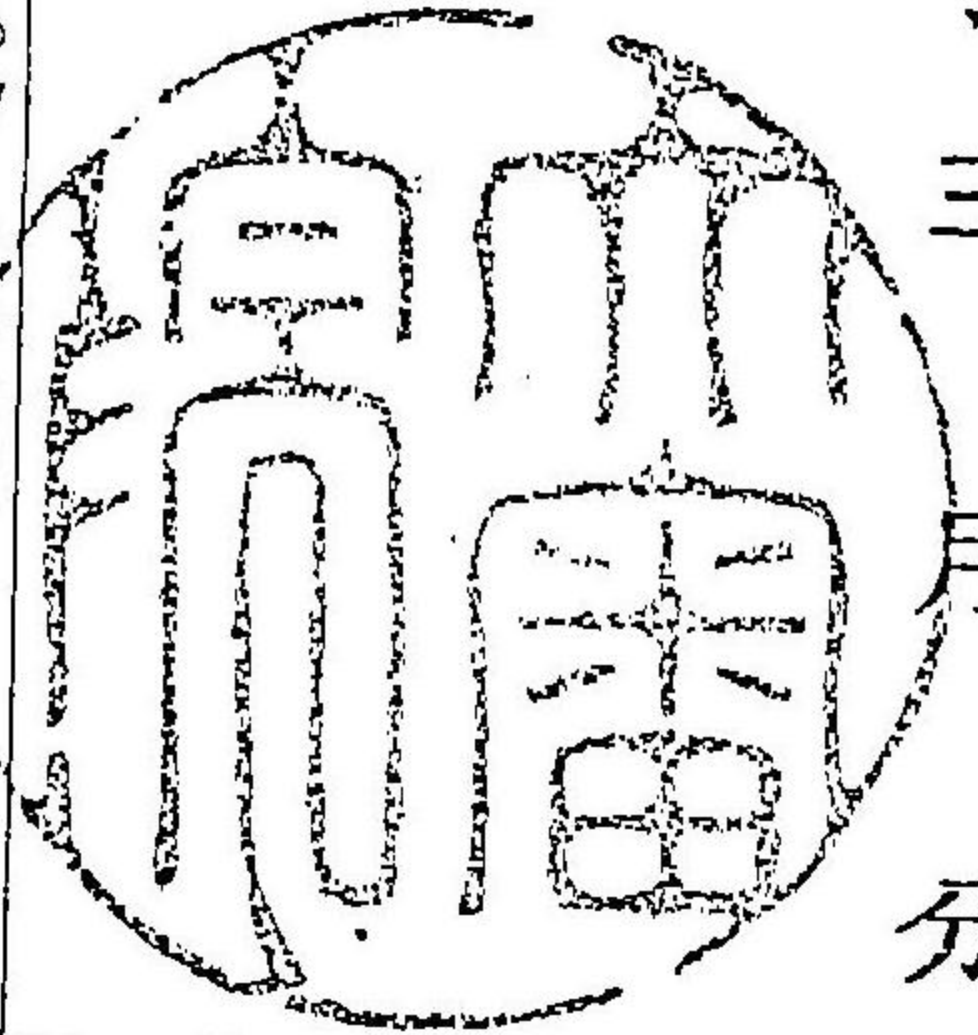


大審院藏版 版權所有

院判決錄

明治二十五年四月印行

明治二十五年三月





大審院判決錄 明治廿五年  
三月分

凡例

- 一 本書ハ大審院各部判決中他日ノ參考ニ供スヘキモノヲ輯録ス
- 一 本輯編次ノ體ハ一ニ判決日付ノ順序ニ從テ列載シ敢テ民事ト刑事ト分タス又事ノ相類似スルモノヲ區分シテ輯録セス
- 一 毎件ノ初メニ判決ノ要旨ヲ摘記シ且關係ノ事項ヲ列記ス
- 一 件名目錄ノ外いろは索引及ヒ法文表ヲ掲ケ以テ搜索ニ便ス
- 一 二月分ノ事件ハ宜シク前輯ニ載スヘキ筈ナレド都合ニ依リ其分三件ヲ本輯ニ加フ



目録

明治廿五年三月分

判決日附	番號	訴名	關係事項	訴訟關係人	丁數
二月十五日	民一七號	抵當權回復ノ件	原院ニ於テノ爭點 上告ノ理由 委任狀賣買ノ證、抵當貸借ノ證、 代理以外ノ權利關係所有權移轉 名義ノ書換、能力無記名委任狀、 株券ノ所持人所有者權力權能	上告人岩橋忠兵衛 被上告人金谷市太郎 上告人高野清一 被上告人野村維章	一
二月十八日	民三六號	株券賣却過剩 金取戻ノ件	刑事附帶ノ私訴 刑事裁判所 宣誓偽證罪ノ諭示、檢眞、對照、 取捨、承審官ノ職權、檢事ノ立會	上告人鍋島 篤 被上告人山口卓次、古賀善平、 上告人江口良重 被上告人錦織與四郎	五
二月廿五日	民二部一三三號	公訴附帶株券取 戻私訴ノ件	事實ニ悖レル推定證書ノ明記 法律違背 實權、速斷 理由不付	上告人岩瀧ウタ 被上告人岩瀧權次郎 上告人小澤嘉助 被上告人加瀬ハマ	一三
三月一日	民二部一四二號	代償金請求ノ件	關席判決ノ申立 法律適用ノ不當 付遲滯 樣式上ノ瑕疵	上告人榎本吉三郎 被上告人小原勝五郎 上告人南澤彌右衛門 被上告人竹内彦右衛門	一七
三月三日	民二部一六五號	貸金催促ノ件	永小作契約第三者 舊來慣行判例 申立テサル事物 違法ノ裁判	上告人後藤安太郎 被上告人山内莊太郎外一名 上告人福西四郎左衛門外一名 被上告人牧野久次郎	二一
三月三日	民二部一八九號	立換金請求ノ件		被上告人外二百三十七名	二五
三月五日	民一七號	財産公賣故障急訴ノ件			二九
三月八日	民二部三號	旋證書請求ノ件			三三
三月十三日	民一部一八號	白根暗箱進退差 障解除ノ件			三三







墓地ノ立木 通常ノ共有立木○墓地ハ普通民事上ノ 財産ト其性質ヲ異ニスル所アルヲ以テ 之ニ付着セル立木ノ如キモ亦通常ノ共 有立木ト同一視スルヲ得ス	三
返還 (神社ノ寶物)ヲ見ヨ	五四
取調ノ粗漏 (宣告書ノ衍字)ヲ見ヨ	四二
當事者ノ特權 (上訴取下)ヲ見ヨ	五七
取下願ノ効力 (上訴取下)ヲ見ヨ	五七
取下願ノ引戻願 (上訴取下)ヲ見ヨ	五七
當事者 (時効)ヲ見ヨ	七四
理由不付 (實權)ヲ見ヨ	三
株券ノ所持人 (委任狀)ヲ見ヨ	五
代理以外ノ權利關係 (委任狀)ヲ見ヨ	五
對照ノ取捨 (檢眞)ヲ見ヨ	三
第三者 (承小作契約)ヲ見ヨ	二九
斷罪ノ資料 (宣誓第二)ヲ見ヨ	四
他人ノ控訴 他人ノ控訴ニ關スル事柄ヲ以テ上告ノ 理由ト爲スヲ得ス	六二
脱漏 (追加裁判ノ申立)ヲ見ヨ	七七
速斷 (實權)ヲ見ヨ	三
相當ノ手續 (神社ノ寶物)ヲ見ヨ	五四
通常ノ共有立木 (墓地ノ立木)ヲ見ヨ	三四
追加裁判ノ申立 脱漏ノ自認ニ關スル證據ノ説明○民事	七七

訴訟法第二百四十二條ハ主タル請求若 クハ附帶ノ請求又ハ費用ノ全部若クハ 一部ノ裁判ヲ爲スニ際シ脱漏シタル場 合ニ適用スヘキ法條ニシテ自認ニ關ス ル證據ノ説明等ノ事ハ此中ニ包含セラ レサルモノトス 民事二 四二條	五
無記名委任狀 (委任狀)ヲ見ヨ	五
能力 (委任狀)ヲ見ヨ	五
官印偽造 (戸長役場及戸長印ノ偽造)ヲ見ヨ	六二
様式上ノ瑕疵 様式上ノ瑕疵ハ原判決ヲ破毀スルノ理 由ト爲スニ足ラス	二五
原院ニ於テノ争點 上告ノ理由○原院ニ於テ争點トナリタ ル證據ナキ事ハ採テ以テ上告ノ理由ト 爲スヲ得ス	一
權力 (委任狀)ヲ見ヨ	五
權能 (委任狀)ヲ見ヨ	五
刑事附帶ノ私訴 刑事裁判所○刑事附帶ノ私訴ハ刑事裁 判所ニ上告スルモノトス	三
刑事裁判所 (刑事附帶ノ私訴)ヲ見ヨ	三
檢眞 對照ノ取捨(承審官ノ職權)○檢眞ヲ爲ス ニ當リ上告人カ認ムルモノ、中ニ就テ 之レカ對照ノ取捨ハ承審官ノ職權ニ屬 ス	三
檢事ノ立會 民事訴訟法第四十二條第八號ノ場合ニ 於テ檢事ノ立會ナキモ裁判所ノ構成上 ニ影響ナキニ付其裁判ヲ破毀ノ理由ト 爲スニ足ラス 民事四二 條八號	三
關席判決ノ申立 法律適用ノ不當○控訴人ヨリ關席判決 ノ申立ヲ爲シタルハ民事訴訟法第四 百二十九條ノ規定ニ從テ判決スヘキモ	三

5. 索引



ノナルニ同法第二百四十八條ノ規定ニ從テ判決シタルハ法律ヲ不當ニ適用シタルモノトス 民訴四二九條二四八條	三九
原狀回復 (事實ノ認定)ヲ見ヨ	三九
決定 (控訴事件)ヲ見ヨ	五〇
原判官ノ職權 (情狀酌量)ヲ見ヨ	六二
刑期 (上訴)ヲ見ヨ	八〇
付遲滯 原判文中ニ「數回ノ督促ヲ受ケ云々」ノ文字ハ以テ付遲滯ノ理由ニ供シタルモノト云フヲ得ヘシ	三五
文書偽造 擬律錯誤○詐欺取財ノ手段トシテ文書ヲ偽造シタルハ刑法第三百九十條第二項ニ據リ重キニ從テ處斷スヘキモノトス同法第百條ニ照シ數罪俱發ノ例ヲ引用スルハ擬律錯誤ナリ刑三九〇條	四二
不足印紙ノ補充 (時効)ヲ見ヨ	七四
控訴事件 判決、決定○控訴裁判所ニ於テ控訴事件ヲ審判スルニハ其訴旨ノ如何ヲ問ハス必ス判決ヲ以テセサル可ラス決定ヲ以テス可キモノニアラス 刑訴二六一條	五〇
戸長役場及戸長印ノ偽造 官印偽造○戸長役場及戸長印ノ偽造ハ法律上官印偽造ニ適シ之ヲ使用セサルモ其罪已ニ成立スルモノトス	六二
公判宣告 (上訴)ヲ見ヨ	八〇
攻撃論争 異議ナキ證據、違法ノ判決○攻撃論争ノ點顯然タルニモ異議ナキ證據ノ如ク卒然之ヲ採用シテ認定シタルハ違法ノ判決ナリ	八四
永小作契約 第三者、舊來慣行(判例)○永小作契約ノ第三者ニ繼續スルハ舊來ノ慣行ナル	九二

ニ因リ大審院モ認テ以テ判例ト爲シタルモノナレハ今後新ナル法律ヲ實施シ之ヲ制限スルニ非ル以上ハ單ニ公示ノ手續等ヲ爲サ、ル私ノ契約ナリトノ一片ノ論旨ヲ以テ之ヲ無効視スルヲ得ス	五
抵當貸借ノ證 (委任狀)ヲ見ヨ	三九
裁判所ノ管轄 (事實ノ認定)ヲ見ヨ	七四
採用 (時効)ヲ見ヨ	三九
偽證罪ノ諭示 (宣讀第一)ヲ見ヨ	二九
舊來慣行 (永小作契約)ヲ見ヨ	四二
擬律錯誤 (文書偽造)ヲ見ヨ	五
名義ノ書換 (委任狀)ヲ見ヨ	六六
見本 遺却、反對立證ノ責任、違法ノ裁判○見	五
本ノ爭點ニ係ルコトヲ認メナカラ之ヲ遺却シテ何等ノ排斥ヲ示サス反對立證ノ責任ヲ歸シタルハ違法ノ裁判ナリ	一
所有權移轉 (委任狀)ヲ見ヨ	五
所有者 (委任狀)ヲ見ヨ	五
承審官ノ職權 (檢査)ヲ見ヨ	三
事實ニ悖レル推定 證書ノ明記、法律違背○事實ニ悖レル推定ヲ以テ證書ノ明記ニ反スル異常ノ事實ヲ認定シタルハ法律ニ違背シテ事實ヲ確定シタルモノトス	一七
證書ノ明記 (事實ニ悖レル推定)ヲ見ヨ	一七
實權 速斷、理由不付○單ニ組合營業ノ實權ヲ有スルノ故ヲ以テ營業者ト認メ速	二

五〇は索引



シタル裁判ハ理由ヲ付セサル不法ノ裁  
判ナリ

事實ノ認定

原狀回復 裁判所ノ管轄○事實ノ認定  
上ニ屬スル原狀回復ノ訴ハ事實ニ立入  
ラサル上告裁判所ノ管轄ニアラス

自己ノ利益ニ反スル訴旨

(被告人ノ上告)ヲ見ヨ

證言

(宣誓第一)ヲ見ヨ

神社ノ寶物

所有主所有權(神社)ノ管守者相當ノ手  
續 返還○茲ニ神社ノ寶物タル物件ア  
リ其未タ寶物タラサル以前ノ所有主所  
有權ヲ失ハサル事實等アリシヲ確認  
セシ以上ハ其人ヲ以テ該物件ノ所有主  
ト爲スモ不當ニ非ス○神社ノ管守者タ  
ル宮司ハ神社ノ寶物ヲ失ヒタルハ相  
當ノ手續ヲ盡シ之ヲ返還スルノ職分ヲ  
有スルモノトス然レモ明治六年第二百  
四十九號布告ニ拘ラス之ヲ左右スルノ

三九

四二

四二

五四

權アリト云フニアラス 明治六年布告第  
治九年敎部  
省達第三號

所有主

(神社ノ寶物)ヲ見ヨ

所有權

(神社ノ寶物)ヲ見ヨ

神社ノ管守者

(神社ノ寶物)ヲ見ヨ

上訴取下

當事者ノ特權 取下願ノ効力 取下願ノ  
引戻願 上訴權ノ喪失○上訴ノ取下ハ  
當事者ノ特權ニ屬シ一旦當事者ヨリ其  
取下ノ旨ヲ公言シタル上ハ當然其時ヨ  
リ取下ノ効力ヲ生シ前ノ上訴申立ハ至  
ク無効ニ歸スルヲ以テ其後取下願ノ引  
戻願ヲ爲スト雖モ上訴權ハ業既ニ喪失  
シタルガ故ニ其引戻願ニ對シ書記課テ  
允許ノ旨ヲ附記シタルモ喪失シタル上  
訴權ヲ回復スルヲ得ス  
(上訴取下)ヲ見ヨ

五五

五五

五五

五七

五七

情狀酌量

原判官ノ職權○犯罪ノ情狀ヲ酌量シテ  
本刑ヲ減輕スルハ至ク原判官ノ職權  
ニ屬スルニ依リ酌減ヲ彼レニ與ヘ此ニ  
與ヘサリントテ以テ上告ノ理由ト爲ス  
ヲ得ス

私證書偽造行使罪

凡ソ私證書偽造行使罪ハ之ヲ行使シテ  
初メテ其罪成立スルモノナルヲ以テ裁  
判ニ其行使ノ年月日等ヲ明示スルハ必  
要ナルモ偽造ノ年月日等ハ必シモ之ヲ  
明示スルノ要ナキモノトス

時効

處罰免脱 當事者 不足印紙ノ補充採  
用 違法ノ裁判○時効ニ依リ其處罰ヲ  
免脱シタルハ其處罰ヲ受ケサル責任ヲ  
以テ當事者ニ歸スルヲ得ス則チ原裁判  
所カ證書ノ不足印紙ヲ相當ニ補充シタ  
ルモノト認メ之ヲ採用シタルハ違法ノ  
裁判ト云フヲ得ス

處罰免脱

六二

六二

七四

七四

七四

七四

七四

七四

七四

七四

七四

自認ニ關スル證據ノ說明

(時効)ヲ見ヨ  
(追加裁判ノ申立)ヲ見ヨ

上訴

刑罰 公判宣告 上訴正當○上訴中ニ係  
ル日數ヲ刑罰ニ算入スルハ必ス公判宣  
告ニ對スル上訴正當ナル時ニ限ルモノ  
トス故ニ其他ノ言渡ニ對スル上訴ハ正  
當ナルモ刑罰ニ算入スルヲ得ス 刑五  
上訴正當  
(上訴)ヲ見ヨ

被告人ノ上告

自己ノ利益ニ反スル訴旨○凡ソ被告人  
ノ上訴ハ自己ノ利益ノ爲メニスルモノ  
ナレハ自己ノ利益ニ反スル訴旨ハ上告  
ノ理由ト爲ヌヲ得ス

申立テサル事物

違法ノ裁判○申立テサル事物ヲ訴訟人  
ニ歸セシムルハ違法ノ裁判ナリ 民訴二  
三一條

宣誓第一

偽證罪ノ諭示○宣誓ノ法式ヲ爲ス以上

七七

八〇

八〇

八一

八一

八一

八一

八一

八一

八一

八一

八一

八一

八一

八一

いろは索引

七



ハ偽證罪ノ諭示ヲ爲サ、ルモ以テ上告ノ理由ト爲スニ足ラス  
○八條  
民訴三

**宣誓第二**

證言、斷罪ノ資料○判事ハ刑事訴訟法第百二十三條ノ各項ニ觸ルコトナキヤ否ヲ宣誓ノ上陳述セシメタルモノナレハ其證言ヲ以テ斷罪ノ資料ニ供スルヲ得  
ヘシ刑訴一  
二三條

**宣告書ノ衍字**

取調ノ粗漏○裁判宣告書ニ一ノ衍字アレハトテ以テ其裁判ヲ破毀スル程ノ瑕瑾ト爲スニ足ラス若シ之ヲ以テ全體ノ取調粗漏ナリトシテ上告ヲ爲シニハ粗漏ノ點ヲ精確ニ指示セサル可ラス

四

四

法 文 表

刑法

五一條……………丁數 八〇

一〇〇條…………… 四二

三九〇條…………… 四二

刑事訴訟法

一一三條…………… 四二

二六一條…………… 五〇

民事訴訟法

四二條八號…………… 一四

二二二條…………… 三三

二四二條…………… 七八

二四八條…………… 二三

三〇八條…………… 一四

四二九條…………… 二三

法文表

明治六年布告第二百四十九號…………… 五四

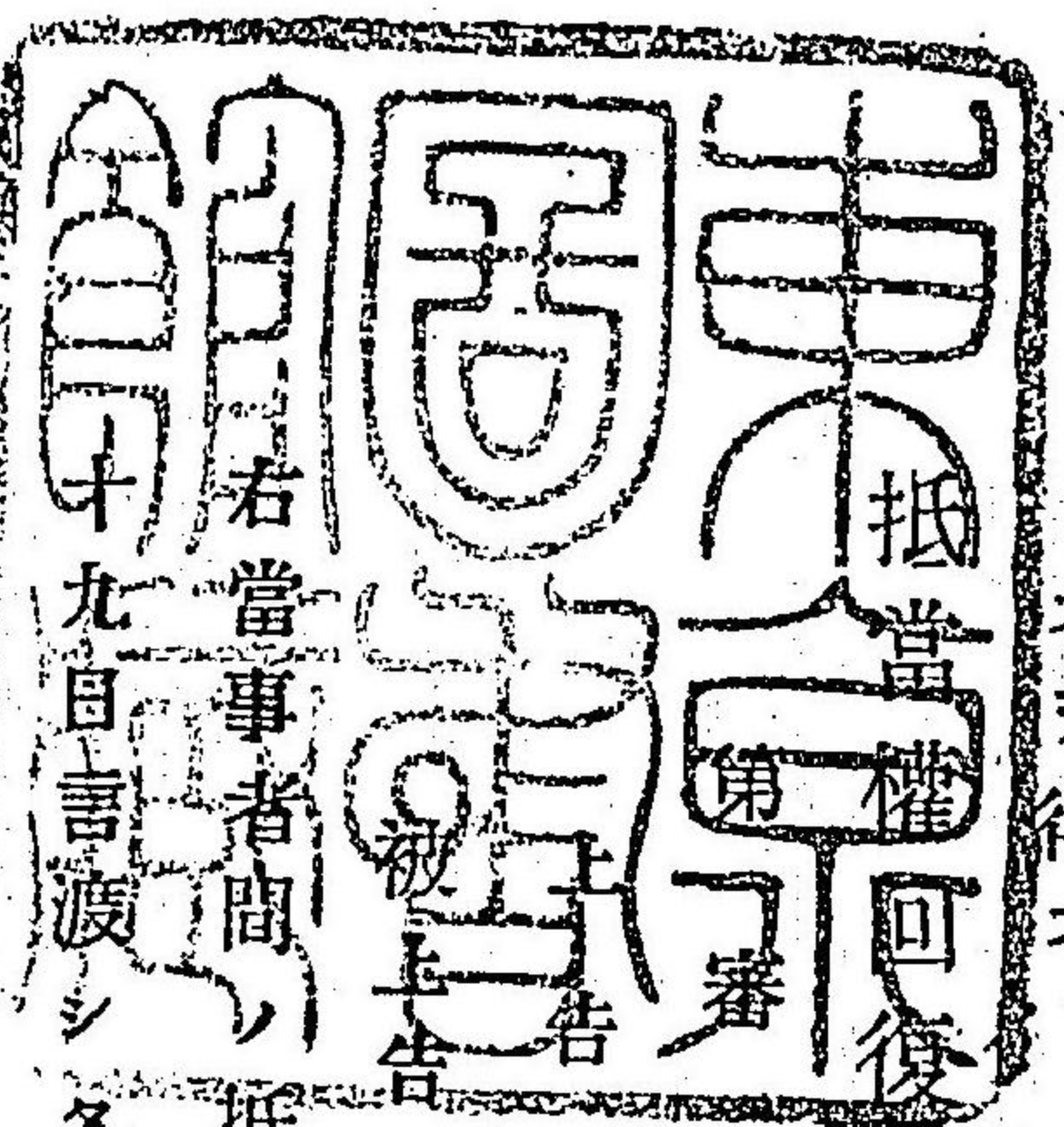




大審院判決錄 明治廿五年 三月分

● 原院ニ於テノ争點 上告ノ理由

原院ニ於テ争點トナリタル證據ナキ事ハ探テ以テ上告ノ理由ト爲  
スヲ得ヌ



ノ件 明治二十四年民第百十七號  
明治二十五年二月十五日判決

和歌山地方裁判所 第二審 大阪控訴院

原告 岩橋忠兵衛 訴訟代理人 檜原三四郎  
被告 金谷市太郎 訴訟代理人 木村重熙

若當事者間ノ抵當權回復事件ニ付大阪控訴院カ明治二十四年五月二  
十九日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲  
シ被告人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

判決主文

本件ノ上告ハ之ヲ棄却ス



但上告ニ付テノ訴訟費用ハ上告人之ヲ負擔ス可シ

二

理由

第一點 原判文中ニ假令該山林ノ立木ニ見込アリトスルモ將來實株者ニ掛戻スヘキ金額ニ對スル擔保ノ價格ナキモノト認定スルニ足レリ云々トアレトモ抑モ山林ノ價格ハ地價ニアラスシテ立木ニアリ其立木アルヲ認メナカラ地價ノミニ依リ抵當價格ノ多少ヲ論定セラレタルハ不法ナリト云フニ在ルモ原院ハ地價ノミヲ標準トシタルニアラスシテ其山林全體ノ價格ヲ見積ルモ尙ホ抵當ニ不足ナリト認定シタルモノナレハ右上告論旨ハ原判旨ニ副ハサルモノニシテ採用スルニ由ナシ

第二點 上告人ハ原院ニ於テ被上告人闕席シタルニ付闕席判決ノ申立ヲ爲シタル上ハ原院ハ民事訴訟法第四百二十九條ノ規定ニ從ヒ第一審裁判所ノ判決ニ記載アル上告人ノ申立即チ講事世話人ハ一切講

務ヲ處理スル權限ヲ有スル者ナレハ云々以下數行ノ供述ハ被上告人ハ自白シタルモノトシテ裁判セラレヘキ筈ナルニ之ニ違背シタルハ不法ナリト云フニ在ルモ右第四百二十九條ノ規定ハ其旨趣タル控訴人カ新ナル事實上ノ供述ニシテ第一審裁判ノ基礎トナリタル事實關係ニ抵觸セサルモノハ被控訴人之ヲ自白シタルモノト看做スト云フニ在レハ上告人云フ如キ場合ニ當行ス可キ規定ニアラス畢竟右論旨ハ法律ノ誤解ヨリ出テタルモノニシテ適法ノ理由ナキモノトス

第三點 假令抵當ニ不足スルモ明治十八年以來今日ニ至ル迄漸次掛戻シタルヲ以テ舊抵當ノ全部ヲ回復スルノ道理ナシ然ルニ原院ハ漠然相當ノ處置ヲ爲シ回復ノ方法ヲ盡サハルヘカラスト言渡サレタルハ理由不備ノ裁判ナリト云フニ在ルモ右ノ論旨ハ原院ニ於テ爭點トナリタル證據ナケレハ採テ以テ上告ノ理由トスルヲ得ス

第四點 甲第四號證ノ如ク鈴木兵助ノ抵當地ニ立木アリ其外證人世

三



話人等アリテ被上告人ニ損害ヲ生スヘキ道理ナキニ原院カ此等ノ理由ヲ審究セスシテ回復ノ方法ヲ盡スヘシト言渡サレタルハ不法ナリト云フニ在ルモ是亦原院ノ爭點タリシ事跡ナケレハ今更上告ノ理由ト爲スヲ得ス

第五點 原院ハ控訴人即チ上告人等ハ宜シク相當ノ處置ヲ爲シ回復ノ方法ヲ盡サ、ルヘカラスト言渡サレタルモ相當ノ處置トハ如何ナル事ヲ云フヤ又其方法トハ如何ナルコトヲ指スヤ其理由ヲ明示セサルトキハ執行シ能ハサル裁判ニシテ結局理由不備ノ裁判ナリト云フニ在ルモ被上告人請求ノ要旨ハ第一審裁判言渡書ニ明示スル如ク抵當權ヲ回復スルカ相當ノ擔保ヲ供スルカ掛込金ヲ返戻スルカニ在リテ第一審裁判所モ其判決主文ニ明記スル如ク此三個ノ請求ノ内其一ヲ履行スヘキ事ヲ命シタルモノナレハ原院カ相當ノ處置ヲ爲シ云々ト辯明シタルハ上告人カ適宜ノ方法ニ從ヒ右三個ノ請求中其一ヲ履

行スルノ義務アリト認メタルモノニシテ執行上毫モ差支アルヲ見ス故ニ右論旨モ亦上告ノ理由トスルニ足ラス  
以上辯明スル通りナルヲ以テ民事訴訟法第四百五十二條ニ依リ本件上告ハ棄却スヘキモノトス

- 委任狀 賣買ノ證 抵當貸借ノ證 代理以外ノ
- 權利關係 所有權移轉 名義ノ書換 能力 無記
- 名委任狀 株券ノ所持人 所有者 權力 權能

委任狀ハ他人ニ或ル權限ヲ與ヘテ或ル行爲ヲ委任スルモノニシテ直チニ之ヲ以テ賣買若クハ抵當貸借ノ證ト認ムルヲ得ス  
委任狀其モノヲ以テ直チニ代理以外ノ權利關係ヲ成立セサルコト明白ナリ但委任狀ニ依テ所有權移轉ノ爲メニ株券等ノ名義ノ書換ヲ行フノ能力ヲ付與スルニ過キサルノミ



故ニ無記名委任狀ヲ添ヘタル株券ノ所持人ヲ認メテ直チニ其所有者ナリト断定スルヲ得ス何トナレハ其株券及ヒ其委任狀ノ記名ハ所持人ノ名義ニ非レハナリ然リト雖モ所持人ハ該株券ヲ抵當ト爲スノ權力若クハ自カラ所有主タルコトヲ得ルノ權能ヲ有セサルニ非ス

株券賣却過剩金取戻ノ件

明治廿四年民第三百六號  
明治廿五年二月十八日判決

第一審 東京地方裁判所 第二審 東京控訴院

上告人 高野清一 訴訟代理人 岡村輝彦、和田守菊次郎

被上告人 野村維章

野村維章ヨリ高野清一外一名ニ係ル株券賣却過剩金取戻事件ニ付明治廿四年十月十五日東京控訴院カ言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ノ申立ヲ爲シタリ

判決主文

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告ノ要旨ハ原控訴院ニ於テ無宛名書換委任狀ヲ添ヘテ株券ヲ交付シタルトキハ該株券ノ所有權ヲ移轉シ即チ賣買契約ノ成立シタルモノト爲スノ慣習アルコトヲ認メナカラ本件抵當契約ノ場合ニ於テハ此慣習ヲ適用スヘキモノニ非スト判定シタルハ法律ニ違背スルモノナリト云フニ在リ乃チ其理由トシテ論辯スル所ヲ聽クニ  
第一原判決ハ當事者間ニ於ケル契約ノ効力ト當事者ト第三者間ニ於ケル契約ノ効力トヲ混淆シタルモノナリ抑々本訴乙第一號證ナル無宛名委任狀ニハ日本銀行株式百參拾株他へ賣渡候ニ付トノ明記アリテ該委任狀ヲ添ヘタル株券ノ交付ハ賣買即チ所有權ヲ移轉シタルモノナルコト明白ニシテ委任狀ハ即チ二箇ノ効力ヲ生シ第一賣買ノ契約ヲ成立シテ所有權ヲ移轉シ第二所有權ノ移轉ニ付キ姓名書換等總



テ代理調印ノ事ヲ委任スルモノニシテ今日商慣習ニ於テ之ヲ以テ株券ノ賣買ヲ實行シアルコトハ顯著ナル事實ニシテ現ニ原控訴訟ニ於テモ該商慣習ノ證明ヲ要セザリシ所ナリサレハ被上告人ト第三十三國立銀行間ノ關係ハ兎モ角川村傳衛ト第四國立銀行間ノ關係ニ就テ云フキハ全銀行ニ於テ無宛名委任狀ヲ添ヘタル株券ヲ所持スル川村傳衛ヲ見テ其株券ノ所有者ト爲スコトハ慣習上當然ノコトニシテ假令被上告人ト川村傳衛ノ間ニ於テ如何ナル契約アリトスルモ上告人ニ於テ之ヲ知ルニ由ナク其効力ハ第三者タル上告銀行ニ對シテ毫モ影響スヘキ理由アルヘカラス然ルニ原判決ニ於テ本訴ノ如キ現ニ抵當契約アル場合ニ於テハ決シテ此慣習ヲ適用ス可キモノニ非スト爲シタルハ被上告人ト第三十三銀行間ノ關係ヲ抵當契約ナリト斷定シ尙ホ且ツ其効力ヲシテ第三者ナル上告人ニ及ホシタルモノニシテ最モ不法ナリト云フニ在リ

依テ審案スルニ上告人ニ於テハ無宛名委任狀ヲ添ヘタル株券ノ受授ハ商慣習賣買ノ効力ヲ生スルモノナリト云フト雖モ抑モ委任狀トハ讀テ字ノ如ク他人ニ或ル權限ヲ與ヘテ或ル行爲ヲ委任スルモノニシテ所謂代理關係ヲ生スルモノヲ以テ直チニ賣買若クハ抵當貸借ノ證ト爲スコトハ蓋シ法理ノ許サ、ル所ナリ若シ夫レ上告人ノ論スル如ク之ヲ以テ當然賣買契約ヲ成立スルモノト爲スキハ委任狀ヲ添ヘタル株券ノ交付ハ賣買目的物ノ引渡ニシテ之レニ對シテ交付スル所ノ金額ハ之レヲ其代價ト云ハサルヲ得ス果シテ然レハ何ソ株券所有者ヨリシテ別ニ借用證書ヲ差入ル、ノ理アルヘケンヤ此ニ由テ之レヲ觀レハ委任狀其モノヲ以テ直チニ代理以外ノ權利關係ヲ成立セサルコトハ明白ニシテ畢竟必要ノ場合ニ於テ此委任狀ニ依テ所有權移轉ノ爲メニ株券ノ名義ノ書換ヲ行フノ能力ヲ付與スルモノタルニ過キス換言セハ所有權ヲ移轉スルニ在ラヌシテ所有權移轉ノ行爲ヲ爲シ



得ヘキ方法ヲ授ケタルニ過キヌ去レハ上告人ノ所謂慣習ニ於テ賣買  
 ヲ成立スト云フハ委任狀ヲ附シタル株券ヲ所持スルモハ何時ニテモ  
 自ラ其所有權ヲ移轉セシムルノ能力ヲ有スルカ故ニ實際ノ取引上之  
 レヲ賣買ト同一視スト云フニ過キヌシテ法理上若クハ裁判上ニ於テ  
 ハ之レヲ以テ已ニ所有權ヲ移轉シタル者ト爲スヲ得サルナリ  
 第二上告人ハ又被上告人ト第三十三銀行間ニ在テハ如何ナル契約ノ  
 アツテ存スルモ被上告銀行ニ於テ河村傳衛ヲ認メ株券ノ所有者ト爲  
 スハ當然ナレハ前當事者間ニ於ケル契約ノ効力ヲ以テ第三者タル被  
 上告銀行ニ及ホスハ不當ナリト云フト雖モ前段説明スル所ノ法理ニ  
 據レハ被上告銀行ニ於テ無記名委任狀ヲ添ヘタル株券ノ所持人河村  
 傳衛ヲ認メテ直チニ其所有者ナリト斷定スルハ均シク不當タルヲ免  
 カレス何トナレハ其株券ノ記名ハ被上告人ノ名義ニシテ其委任狀亦  
 被上告人ノ名義ナレハ河村傳衛ヲ見テ該株券ヲ抵當ト爲スノ權力若

クハ自カラ所有主タルコトヲ得ルノ權能ヲ有スルモノト爲スハ格別  
 之レヲ以テ已ニ業ニ所有者ナリト見ルコトハ前段説明スル所ノ如ク  
 未タ法理ノ許サヘル所ナレハナリ之レヲ要スルニ河村傳衛ト被上告  
 銀行間ニ於テハ所有主ノ承諾ヲ得タル他人ノ物件ヲ以テ抵當ト爲シ  
 タル場合ト同一ノ効力ヲ生スルニ過キヌシテ唯々其異ナル所ハ債務  
 者ニ於テ其義務ヲ果サヘルニ際リテ更ラニ其所有者ノ所爲若クハ公  
 力ヲ藉ルヲ要セス自カラ其委任狀ヲ利用シテ辦濟シ得ルノ一點ニ在  
 ル而已トス

又該株券ハ河村傳衛カ第四國立銀行ニ對スル五萬八千五百圓ノ債務  
 擔保タル以上ハ法理上擔保契約以外ノ債務ニ對シテ責ヲ負フノ理ナ  
 キハ勿論ナレハ上告銀行ニ於テ擔保品ヲ賣却シ之レヲ以テ擔保金額  
 及ヒ其利子ヲ控除シタル殘額ハ之レヲ株券所有主ニ返還スルヲ以テ  
 相當トス



以上説明スル所ノ如クナルヲ以テ原控訴院ノ判決ハ相當ニシテ破毀ノ理由ナキモノトス  
此他數多ノ上告點アリト雖モ畢竟大体ノ論據ヲ異ニスルヨリ生スル所ノ辯難ニシテ別ニ特立ノ上告點ト爲ルヘキ違法ノ事項若クハ判決ノ全旨ニ對シテ變更ヲ來ス可キモノニ非サルヲ以テ民事訴訟法第二百三十條第二項ニ依リ上告各項ニ就テ一々辯明ヲ與ヘス

● 刑事附帶ノ私訴 刑事裁判所

刑事附帶ノ私訴ハ刑事裁判所ニ上告スルモノトス

公訴附帶株券取戻私訴ノ件 明治廿四年民第二部第百二十三號  
明治廿五年二月廿五日判決

第一審 佐賀地方裁判所 第二審 長崎控訴院

上告人 鍋島篤 訴訟代理人 鳩山和夫

被上告人 山口卓次 古賀善平 江口良重

鍋島篤ヨリ山口卓次外二名ニ係ル公訴附帶ノ株券取戻ノ私訴ニ對シ長崎控訴院カ明治廿四年四月二日言渡シタル判決ニ付上告人ハ全部破毀ノ申立ヲ爲シタリ

判決主文

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告ノ趣意ハ明治廿四年四月二日長崎控訴院ニ於テ言渡シタル裁判ニ服セス之レカ破毀ヲ求ムルモノナリト雖モ本案ハ素ト刑事附帶ノ私訴ニ係レハ刑事訴訟法ニ依リテ刑事裁判所ニ上告ス可キモノトス

● 宣誓 偽證罪ノ諭示 檢眞 對照ノ取捨 承審

官ノ職權 檢事ノ立會

宣誓ノ法式ヲ爲ス以上ハ偽證罪ノ諭示ヲ爲サ、ルモ以テ上告ノ理



由ト爲スニ足ラス○民訴三

檢眞ヲ爲スニ當リ上告人カ認ムルモノ、中ニ就テ之レカ對照ノ取捨ハ承審官ノ職權ニ屬ス

民事訴訟法第四十二條第八號ノ場合ニ於テ檢事ノ立會ナキモ裁判所ノ構成上ニ影響ナキニ付其裁判ヲ破毀ノ原由ト爲スニ足ラス民訴四二條

貸金辨濟請求ノ件明治廿四年民第百九號  
明治廿五年三月一日判決

第一審 松江地方裁判所 第二審 廣島控訴院

上告人 江角權藏 訴訟代理人 岡村輝彦

被上告人 錦織與四郎

江角權藏ヨリ錦織與四郎ニ係ル貸金辨濟請求事件ニ付廣島控訴院カ明治廿四年七月六日言渡タル判決ニ對シ上告代理人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判決主文

本件ノ上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告第一論旨タルヤ原控訴院カ採リテ以テ裁判ノ基本トセシハ鑑定人林良助石見仲助兩人ノ鑑定ナレトモ該鑑定ハ原控訴院カ右兩人ニ對シ姓名住所身分職業及當事者トノ間ニ親戚雇人ノ關係アルヤ否ヲ訊問セシニ止マリ民事訴訟法第三百八條ニ掲ケアル偽證罪ノ諭示ヲ爲サスシテ爲サシメタルモノナリ仍テ原裁判ハ法則ニ違背セシモノニテ破毀ノ原由アリト云フニ在レトモ訴訟記録ヲ調査スルニ右兩人共式ノ如ク宣誓ナサシメアレハ偽證罪ノ諭示ヲ闕キシハ唯一部ノ不注意ニ歸スルニ止マリ主要タル法式ヲ闕キシモノニアラサルニ付此等ハ以テ上告ノ原由ト爲スニ足ラサルモノトス

同第二論旨タルヤ上告人カ申立シ檢眞ノ方法ハ主トシテ明治廿年度



ノ貸金臺帳タル甲第四號證ト利子ノ受取書ナリト云フ乙第一號證及第三號證トノ對證ニアリテ原控訴院モ之ヲ許容シ各鑑定人モ專ラ之レニ意ヲ注キシハ鑑定上申書ニ依リ明瞭ニシテ上告人カ利子ノ受取書ヲ交付スルニハ右臺帳ト同一ノ記載ヲ爲シ之レニ割印スヘキニ付乙第一號證ト乙第三號證トノ筆蹟印影カ同一ニ歸シ兩證共上告人ノ手ヨリ出テシヤ否ヲ檢センニハ甲第四號證タル右臺帳ト對照スルニ如クナシ然ルニ原控訴院カ右甲第四號證ヲ全ク排斥シテ一言ノ說明ヲモ爲サス乙第三號證ノ印影ヲ甲第二號證ノ印影ト對照シ又筆蹟モ甲第四號證ニ依ラスシテ眞偽ヲ發見シ難キ甲第一號證ノ付箋ニ對照シテ判斷ヲ下シタリ仍テ原裁判ハ證據ヲ排斥シテ其理由ヲ付セサル不法アルモノト云フニ在レトモ本論告ハ苦情ニ過キスシテ上告ノ理由トナラサルモノトス何トナレハ檢眞ヲ爲スニ當リ上告人カ認ムルモノ、内何レニ對照スルモ承審官ノ職權ニ屬スヘキニ付乙第三

號證ノ筆蹟印影ヲ甲第一號證ノ付箋及甲第二號證ニ對照シテ甲第四號證ト對照セサリシトテ上告ノ理由トナラサルハ勿論又甲第四號證ニ對照セサル理由ヲ附セサルヲ得サルノ實メ承審官ニアラサルニ付其理由ヲ付セサリシトテ上告ノ理由トナラサレハナリ同第三論旨タルヤ本案爭點ハ乙第三號證タル受取書ノ眞偽如何ニアリテ民事訴訟法第四十二條第八號ニ該當スル性質ノモノナリ左レハ口頭辯論ノ際檢事ノ立會ヲ要スヘキニ原裁判ハ之レカ立會ナクシテ爲シタルモノナリ仍テ原裁判ハ法則ヲ適用セサリシ不法ノモノト云フニ在レトモ辯論ノ際檢事ノ立會ナキカ如キハ裁判所ノ構成上ニ影響ナキニ付本案裁判ヲ破毀スヘキ原由ト爲スニ足ラストス

●事實ニ悖レル推定 證書ノ明記 法律違背

事實ニ悖レル推定ヲ以テ證書ノ明記ニ反スル異常ノ事實ヲ認定シ



タルハ法律ニ違背シテ事實ヲ確定シタルモノトス

代償金請求ノ件 明治廿四年民第二部第四百十二號  
明治廿五年三月三日判決

第一審 大阪始審裁判所 第二審 大阪控訴院

上告人 岩瀧ウタ 訴訟代理人 守屋 此助

被上告人 岩瀧權次郎 訴訟代理人 村上正幸、牧野充安

岩瀧ウタヨリ岩瀧權次郎ニ係ル代償金請求事件ニ付大阪控訴院カ明治廿三年十月十四日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

判決主文

大阪控訴院カ言渡シタル判決ヲ破毀シ更ニ辯論及判決ヲ爲サシムル爲メ本件ヲ同院ヘ差戻ス

理由

上告ノ第一點ハ原控訴院カ本件貸借ハ被上告人權次郎ノ借受使用シ

タルモノナルヤ將タ上告人ノ借用シタルモノナルヤヲ裁判スルニ際リ若シ被控訴人先代亡權次ハ畜ニ其受人タリシニ過キサル者トセハ被控訴人ニ於テ債主ヨリ出訴ヲ受ケ身代限ノ處斷ヲ請求セラル、ニ當リ必スヤ甲第一號證殊ニ公證アル權次郎抵當地ノ公賣ヲ請求セサルヘカラサルニ其事ナキノミナラス甘シテ身代限ノ處分ヲ受ケ云々トノ理由ヲ付シ宛カモ此公賣ヲ爲サ、ルハ即チ上告人自カラ其義務者タルコトヲ甘諾シタルモノ、如ク論斷シタリト雖モ縱令公證アル抵當ト雖モ其所有者タル者ニ於テ未タ確定ノ裁判ヲ受ケサル限りハ決シテ公賣ニ付スルコトヲ得サルコトハ裁判ノ効力ヨリ觀察スルモ現行慣例ニ依テ見ルモ明白ナル所トス然ルニ原控訴院ニ於テハ此ノ如ク法律上不可行事柄ヲ執行セサリシコトヲ理由ト爲シ本件貸借ハ上告人ニ於テ借受使用シタルモノナリト認定シタルハ違法ノ裁判ナリト云フニ在リ仍テ審案スルニ抑モ上告人カ本件貸金催促ノ訴ヲ受